可笑い咄しを聞たり或る藝妓が其の抱えの雛妓に向ひ「小札チャン昨夜のお客さまの一座はどなたく〳〵だつたエ「ハイどなたく〳〵で御座いました「ム、さうかエ夫ぢやァ皆歴々の紳士さん方だつたネエ「イヽエ紳士さんぢやァ有ませんヨ旦那がたで御座いましたヨ「此子は分らないネ旦那がただから紳士さんぢやァ無いかネ「姉さん夫だつて皆さんがお花を仕ませんから紳士さんぢや有ませんソ」以て世上にて紳士の品行を認むるの如何を卜するに足るべしとは慨嘆の至りなり

□□雑誌の時事

諸新聞默するは何ぞや　兩三日前に東京紳士の中にて花遊の七險人と異名せられたる一群あり其群中の某々三名が青柳橋の畔なる○○亭に於て所狎の藝妓や其家の女房を相手にして花を引て居たる所に近所の悪徒即ち世に云ふゴロ附の遊び人に荒れ込れて二百圓をゆすり取られたる珍談あり世間では誰知らぬものも無きに諸新聞紙が探訪の迅速にして確實なるにも似ず東京二十餘種の紙上に今日まで未だ一紙として此事を記せざるは不審なり或は云ふ其の三紳士より内々各社に依頼して記載の見合に及びたるなりと果して然らば新聞紙も當には成らぬものと云ふべし成ほどコリャ隨分えらい攻撃だネ「□□雑誌にあるのは此間の桐山菊川梅田の三人が鞦韆亭の一件だネ、三人ともソコは商賣人だから直に手を廻して各社に依頼したに山て宜鹽梅に諸新聞に出なか

つたが此雑誌に手を廻さなかつたと見えたネ「コンな事を書立られちあァ困り切るぜ何も是が他人に迷惑を掛ると云ふぢやァ無し銘々に銘々の紙幣を出して取遣をするのだもの幾ら勝ても負ても毫末も他人に關係の無い事だから大きにお世話な咄しさ「ソレに是しきの事に何も國家の盛衰に拘る程の事は有やァ仕ないワ新聞記者と云ふ奴は得て太さうな法螺を吹立て動ともすれば他人の榮譽を傷つけたがる奴ヨ、まこと風俗を矯正すると云ふなら我々の花よりもモそつと重いモそつと近い所に矯正せねば成らぬ事が何程もあらうぢや無いか、ソリャ罰金禁獄が怖いから何とも云はずに紳士に向つて弄花の一件を攻撃するとは卑怯千萬サ「大きにソウサ尤も此の弄花は御同様ばかりぢやァ無い世間一同がコウだから何と書れても少しも恐る、所は無いがモシ麗々と姓名でも書立られちやァ困るから番子の内を積で新聞雑誌に口留イヤ筆留を仕て置うぢや無いか「ヨカらう〳〵夫にや桐山菊川梅田の三人に骨を折せにやァ出來ないから直に使を立て三人を呼に遣う「さう仕やうと評議一決して早々に手紙を認め三士の許に使を出し相談あれば即刻來車あるべしと申遣したり

「……三人ともアノ手紙を見たら直に來だらう「來ともく〳〵飛で來に違ひないワ「時に彼等の來まで手を空しくして安閑と待ても居られない「ソウともも昔し大禹は寸陰を惜しむ我輩豈に分陰だも惜まざる可けんやだネ「ソレが即ちタイム、イス、モニー時は是れ黄金なりだ「モニー〳〵其モニー

を少し儲けて遣らうかサア四ツで初めやう〳〵「オツト器械は是に御座いだと又々例の通りに魔界の快樂をぞ初めける

第十四回　青天の霹靂

丁度時候は小春の日和庭前の紅葉は二月の花より紅るに染なし殘んの菊もまだ見所なきに非ず幸ひ明後日は土曜日に候へば野生が別莊へ御入來下さるべし古河翁の新作の淨瑠璃に清元お葉が節を附て花柳の老人に一指舞せ御慰にいたし申すべしと風流好事を極めたる松野が案内に委細敬承仕り候と返詞を出して當日午後一時ごろより此別莊へ集ひ來りしは例の桐山櫻谷武藏野菊川柳下梅山これに主人を併せて七險人のお顔揃ひズラリと縮緬の座蒲團の上に居並び時候の挨拶主客の應答をなせる所を拜見すれば何れも金箔附の上等紳士あるひは時事を談じ或は社交を評し政治貿易工藝技術の流行問題の出る毎に議論は風の如くに生じ意見は雲の如くに湧出て何に掛ても迂濶ならぬ有樣は實に東京にて泰斗と仰がれたる本場飛切の紳士かな此等の人ならでは社會の進運を謀るべき人はあらざるべしと人も望み我も望めるは尤なりとぞ思はれたる。やがて白拍子等が持運ぶ配膳に調理は固より善美を盡し此の好風景に對して觴を舉げ心神を快活にせる半日の佳興その間には妙音の唱

歌名手の舞踏目を喜ばしめ耳を樂ましめ喧々呵々の笑ひ聲に餘念なきは流石に上等の御宴會外國の人々に見物させ度ほどにて有りき

然るに主客とも飽に酒食に飽き日も暮なんとするを道具替の知らせにや道具ぐるりと廻れば奥座敷の合戰場六人の播切にて七人目は落絡を集めて切直し七枚附て渡すのも一興なり三七二十一で勝利を取れば十一環の墜を賞れるは面白いと七人一座の大戰爭その夜は勿論徹夜にて明れば今日は日曜日流連して戰はずんば有べからず浮世夢の如し歡を爲す幾何かある此好日勝景に遇て戰はずんば我輩何の爲に毎日事務に鞅掌せんや斯る快樂こそ浩然の氣を養ふの法なり精神の活潑を助くるの手段なりなど、自分勝手の理窟を附てソレ引けヤレ引けと一心不亂の花軍に髪は蓬々として塵を被りたるに毛艶を失ひ鼻の孔や眼の緣はランプ蠟燭の煤に墨隈を取たる如く昨日の顔は今日に成ても未だ洗はず一昨日の晩に入湯したる儘なる體は今夜の再浴も其期甚だ覺束なく煙草盆の中には喰殘した る團子の串火入に算を亂し前に置たる附石の間には柿の種も替環と共に一座を成し紙屑は半ば吸て茶卓の上に捨られ煎茶は未だ飲ざるに翻れて蒲團の下を濕し寒いとて褞袍を洋服の上に羽織たるもあれば熱いとて上着の片肌を脱で下着の胴を見せたるもあり鼻拭で後鉢卷をなすものは持病の腦が痛み出したるにて濡手拭にて眼を濕すものは連戰にて目脂の出るが爲なるべし其體裁は無禮講の

ボンチ上流のゴロ附遊び、昨日の清遊は何地へやら飛去て見るも氣恥しき有様なりき

此に某殿とて此紳士の七險人等が長者とも敬ひ親分とも貴べる殿あり此殿は平生から氣象も快宇にて啻に政治社交の本領のみならず風流の道にも暗からで或時は時事を論ずるの間に詩歌の吟詠を樂み或時は社會の雅事を處する中に章臺の花月を翫び玉ひて洒々落々たる方なれど生得博奕を嫌はせて當節の紳士貴顯など云へる社會に弄花の悪習の盛んに行はるゝを深く憂ひ玉ひて中にも此七險人の連中に向ひ「君等は社會の上流に立る人々なれば花遊だけは止められよ余と親しみ交際んとならば博奕は禁ぜられヨ、其外の遊は何なる道樂たりとも敢て問はざるべし、若し聞入なくば絶交の外は有まじと迄に度々意見をし玉へども七險人は其面前にてこそハイ〳〵恐入ましたイヤモウ禁止いたしますと體よく答はすれ持たが病ひ好たが煩ひで得意につけ不平につけ寄と障るとソレ花牌よと止べうも無かりけり。然るに今日の日曜を幸ひに某殿は郊外の紅葉黄菊を見んとて供をも連ず唯一人人力に打乘て邸を出られ此近所にて車より下りて彼處此處と杖を曳て散歩し圖らずも松野が別莊の門前を通りて内を見玉ふに人力車六七挺轅を並べて待居たり、扨は客來ならんか其客は誰やらんと素知らぬ振にて門の内に入り誰殿の車ぞと問玉へは供待の車夫等は早くも某殿なりと顔を知つて誰々の車にて昨日の午後より此方へ參つて候と丁寧に答へたり、扨こそ彼等ござんなれイデ其席に

踏込で懲して遣らんと即座に思案を定められツカ〳〵と玄關に至り履を脱ぎ案内も無く打通り兼て勝手を覚えし家なれば座敷を打過て廊下に掛り玉ふにぞ松野が家來は某殿と見奉りて只今主人へ申聞候程に是へ渡らせ玉へと中奥の座敷へ招ずるを聞ざる振して其家來が急いで奥に入ると共に奥座敷に入て見玉へば案に違はず七險人が戰爭尤も酣なる處なりき。某殿は尤も不快なる顔色して其處に座し玉へば七險人の豪傑だちも是には大辟易恰も青天に霹靂に遇たる如く落花狼藉の中に列を爲して面目なげに手禮すれば某殿は「諸君のお樂みの中に參つて御妨いたしたが、諸君は余がアレ程までに諫めても更に博奕を止られぬよナ、此體を見るに是が紳士たる人々の境界と思はつしやるか何も凡庸の町人連中なら花を引うが采を伏やうが余は構ひはせぬワ、法律で禁じたる博奕の取締りは役人がするに由て余が與かり知る所で無い、よしや其者等が巡査の爲に縛せられ様とも監獄に投ぜられ様とも自得自業ゆゑ氣の毒とも何とも思はぬがの、諸君は余とも年來懇意の間柄で朋友の交際をして居るのに余の朋友に博奕打が有ては諸君は夫でも宜らうが實に余が困る諸君マア銘々の地位を顧たまへ理財商 業殖 産工藝法律時論文學に於て各々其牛耳を執て社會の觀望を繫ぎ上下兩院は言に及はず天下の輿論は諸君の一論一議で左右せらるゝ位の地位に立て居る人物ぢや無いか、いかに慰みが面白いと云つて其慰に事を欠て博奕三昧とは何の積りだネ、ソレ程に金が儲けたけ

れば相場なりと何なりと公然とするが宜ワ、モシ又慰ならば何なりとも外に慰みが有うでは無いか、世間で諸君の事を何と評して居ると思はつしやるか彼等は博奕打ぢや某々等が信用して親くする輩は東京で有名の博奕打ぢやと遂に余等までが諸君の爲めお相伴を被て居るは殘念だと思ふヨ今日限りモウ誅もせず忠告を致さぬから悪いと思ふなら斷然博奕は止たまへ止ないとあらば余も遺憾千萬だが諸君とは絶交ぢや道同じからざれば相與に謀らずで仕方が無いノ……、懇々たる御意見に七険人は低頭平身惣身に冷汗を流し恐れ入たる計なり（ア、宜きびだ）

第十五回　禁花の誓約

七険人の豪傑連もさすがに某殿の意見には大閉口で一言も無く青菜に鹽を懸たる如くシホ〳〵として悔悟伏罪の外は無かりき。扨某殿が歸られたる後の評議に基きて吉日良辰を卜し愈〻某館に於て弄花禁斷の誓約を行ふべしと一決し梅田菊川の兩士その幹事となりて萬事を取扱ひたり。當日午後三時より此席に參着したるは松野鶴藏、桐山鳳栖、櫻谷幕助、武藏野丸作、柳下定九郎、菊川青也梅田鶯所の七険人にて案内に依て招待せられたる客員には萩原猪助、藤山杜鵑齋、八橋富蒲之助、高雄紅鳳、牡丹花蝶扇なんど云へる其道に掛ては世に名高き歴々の顔揃ひにて事の物山々しくて見

えし幹事が計ひとして座敷の中央には高き卓を置き其上に誓約書の本書を恭しく載せて記名調印の爲にとて硯箱肉池も其側に備へたり。梅田が案内にて靜々と一間を出で來りて遠慮もなく此卓の正面に設けたる達磨椅子に腰を掛け殊勝氣なる顔色にて拂子を颯と左右に打振り口の中にて喃々と唱へながら濟し込で居たるは當日の大導師萬古上人にて在俗の其昔は此仲間にて魔道に惑溺したる知識なりき。次の間の襖を左右に開きて松野桐山初め七険人の面々は導師に向ひて一列に立ち客員は其左右に列座したり。此時桐山鳳栖は威儀を正して少しく前に進み

諸君、今日我々七名の者かくの如く此所に會し、諸君の面前に於て諸君を立會に乞ふて、相互に誓約いたさんとする所のものは、即ち我々が是迄飯よりも好で酒色の樂みにも代たる弄花を斷然今日より禁止して、是よりは如何なる場合たりとも花牌には手を觸れまいと云ふ事を契約する爲であります。抑も貧者は酒に其憂を慰め富者は花に其氣を養ふと云ふが古今内外を通じて社會一般の慣習にして即ち人情の自然に基くものなれば敢て咎むる所は有ません、我々が弄花の爲に何程の時間を費さうとも何程の負勝を仕やうとも我々相互に隨意の承諾より成立ものゆゑ他人には利害の及ぶ事は些とも無い道理でげす、夫を彼是と世間で批難を下し甚しきは我々を目して博奕

に耽るが如くに云ひ做すものは畢竟彼輩か我々紳士社會の境界を羨む所からの嫉妬偏執たる事は明白で有ます、苟も我々内に顧て疚しき事なくば假令彼輩が囂々し樣とも雨蛙か油蟬が鳴も同樣だと思つて耳に掛ずとも宜しい譯でけすが、哀いかな世は未だ黄金世界で無から多數の人は道理も辨へず利害も便ぜずして彼の蛙や蟬が眠々閣々と鳴立ると直に其に雷同して我々を攻擊するとは實に淺ましい人情であります、誠に攻擊するならば我々が公なる行爲に付て遠慮なく論ずるが宜しい我々も甘じて受ませうが私しの行爲を表面に持出して攻擊の材料にするとは何と卑怯では有ませんか、併し殘念な事には我々が此社會に生息して居る限りは所謂鄕に入れば鄕に從がへで眞さかに現内閣が超然として政黨の外に立つと澄して居られる樣な譯には參らぬに由て社會の批難を受ぬ樣にするが肝心で有ます、ソコで我々が申合せて今日只今より誓約を立て弄花の事は斷じて禁止といたします

と辯舌爽かにお手前勝手の理窟を並べ立て演說を畢つたれば菊川は進で卓の上に載せたる誓約書を取上て朗讀したり其文に云く

玆に記名する我々七人の者は社會の通則に從がひ時論の壓制を甘じて受けざる可からざるの地位に在るを以て僞君子の狀態を粧ひ世上の名望を維持せんが爲に其實は無害なりと雖ども弄花の快

樂を斷念し本日より以後は決して相會して花牌を弄せず如何なる場合たりとも又如何なる顯微鏡たりとも決して花牌を手にせざることを誓約す若し此誓約に背き密かに弄花をなすものあらば其者は背誓を謝する爲に金五百圓を同盟員に差出すべし

此誓約の我々が誠意に出で、僞なきを證する爲に各々自筆を以て記名調印するもの也

と讀畢れば松野桐山と順々に七險人は卓の前に進み銘々に筆を採て姓名を記し實印を押たり、梅山は是を立會の客員に示して後に改て卓の上に置き萬古上人に見せたれば上人は手に取上て一讀し再び原の如くに卓の上に置き拂子を一振り振て

惟みれば娑婆世界は修羅の戰場にして一切衆生は鬪戰の生類たり、非情の草木だも猶ほ生存に競爭す況や有情の人類に於てをや、朝には榮利の街に無明の妄念を起し夕には五慾の界に貪着の煩惱を釀し、思ひを達すれば增上慢となり望を失へば忿怒の相を現はし、永く輪廻の間に彷徨して遂に涅槃の域に至ること能はず、抑も其慾望は人に由て各〻格別なりと雖ども名利原是れ一體にして其歸依を殊にするに非ず。此境界に迷惑して不斷鬪戰競爭に無上の罪障を造るもの何ぞ弄花の一事にのみ屈託するを要せんや、之を斷ずる間より無功德なり、之を犯すも亦敢て其罪過を增すに非ず、山僧熟〻諸子の心を諦るに善念は深く石炭の烟に覆はれて良心は尙ほ金庫の中に隱れ

たり、悔悟の機緣未だ到らざるに偶〻外物の感觸に由て此弄花禁斷の事を企つと雖ども紅爐上一點の雪山僧その永續を知らず、嗚呼悲かな誓約に背て畜生道に墮落し、胡枝花間の野猪とならんか、紅楓樹下の山鹿とならんか、猪か鹿か山僧素より淨肉を忌まず取て我晩齋に供養せよ、喝不見點風前の燈火

「サア〳〵是で弄花禁斷の誓約式は相濟だ皆樣御退屈でしたらうドウぞ此方へと招待すれば萬古上人も原はさるもの「ナニ愚僧は坊主でも酒も飲し魚も喰うし御馳走ならば白拍子の伽も尤も結構ですとズッと擦けて一同に膳に附て杯盤狼藉「時に各〻樣がた彼のお誓約が永續しますかネ「ソリヤ大丈夫我々が此通りに決心したからは磐梯山が破裂しても權現堂の堤が切てもマア動かぬ積でげす「ハヽア動くまでは受合だと云ふのでエせうも古い奴さ「時に御七名とも弄花を禁斷して其代りのお樂みは「僕は謠曲にする積りだ「僕は茶の湯「僕は義太夫「僕は一中節「僕は清元「僕は踊り、「僕は新内に仕やう「ヘーエ謠曲に茶の湯踊りに義太夫一中清元新内節君がたにはソウ藝盡しをされた日にや夫こそ社會で幾千百人が難儀をするか知れないぜァヽ困つたものだなァ

第十六回　誓約の破毀

斯樣に七險人の非は物の見事に弄花禁斷の誓約を成し夫からと云ふものは俄に宗匠を賴んで繪圖を引てもらひ數寄屋を建て、骨董家に法螺を吹れて誠と思ひ怪しげなる茶器をひねくり廻し世上の嘲を受る盲茶人の垣覗するもあり。分りもせぬ書畫を無暗に鑑定して自分目利で買入れ、ナニ是が岩佐又平の眞蹟よ又平が後に土佐の將監光起となつた名人で吃の又平とも云た人だから古法眼元信と同時代ぢやと講釋して新聞の材料となれるもあり。或は當時一二を爭へる大夫を宅に招いで義太夫の稽古を初めおのれが肖像の油繪の前で回向せうとてお姿を繪には書せはせぬものをと呼つたり、二十圓に足らぬ利息を還しく云ひながら金ならたつた三百兩と大袈裟に語つたりして時によると宿屋から大井川のおつ通しで出入の聞手を苦し泣に泣せるもあり。或は内外二百番の謠曲本を机の上に飾り立て檀那寺の和尚の引導もよろしくと云ふ鈍聲を張り上て誰とも見えぬ上蔦の破れ車に召されたるはと唄ふては昔しの遊女は乘合の因多羅馬車に乘たかと思ひ「旅の衣は鈴かけと云へば獅子の俄に出る藝者の褊衿に鈴をガラ〳〵附る樣のものと心得て說法するもあり。「まだ其くせか大淀の關も出ぬのにと云から昔しは大淀の關とて逢坂不破清見白川須磨など、云へる名所と共に日本十關の内であつたと誇れば、イヤ〳〵大淀と云ふ關所は無いソリヤ大淀と云ふ關取の角力ぢや余が方の「正田源兵衛の惣領息子角力取にて白藤源太と云た關と兄弟分であつたと論ずるもあり。此方では

「嵯峨や小室の花盛りと浮氣になつて語れば、彼方では「四谷で初めて逢た時と馬方聲で唄ふもあり」て其をかしさは中々本氣の沙汰とは思はれず、其中にもズッと調子の狂つたのは唄ふよりも踊れ踊るよりも芝居と七險人が銘々思ひ附の洒落は外で見れば其お相手や聽聞人にされては大變だが實は滑稽を求めずして自然に得たる境界なりき。去ども竹林の七賢人も酒が無くては七賢らしく無と同じことで今この密谷の七險人も「花なくば何のおのれが紳士かな」と云ふ鹽梅で兎角に手持不沙汰の樣なる心地して甚ずやありけん左ばかり嚴重の誓約も二週間とは續かずして忽ちに反古とは相成つたり

「エ、誓約に背くのは怪からぬぜ「何で怪からぬぢや抑も法律を立るの權利あるものは其法律を破るの權利ありとは是れ立法上の原則で不動の道理である然らば我々が申合せて破るは至當の事であります「御尤々々僕も其說に贊成するが但し立合人に斷らずとも宜しいかネ「宜しいとも〳〵我々獨立の權利より云へば最前この誓約を立た時にも交際上の禮式を以て立合せた丈の事で更に其干涉を蒙るの義務は無い譯ゆゑ外交上の典例に於ては決して斷るにも通知するにも及ばぬよ「贊成々々然ば愈〳〵精進落の初り〳〵と七險人は再び源の七險と成て花遊の再興、イヤモウ是で無くては夜が明ぬヨ

「サア桐山君コリャ君が出した百五十の切手だから是で差引を附て貰はう、と云へば桐山は右の名刺を(凡そ此社會が弄花の上で渡し置く證書は概ね名刺の上に數字を以て金額を記入するを例とす)見て 桐山「成ほど僕の切手に相違ないがコリャ紀元前の切手だから此では差引に成らぬぜ 柳下「ソウ云ふ法があるものか、コリャ前月シカモ松野君の別莊で君が渡しだのぢやないか 桐山「その通り、併し一旦弄花禁斷の誓約をして其後更に弄花を再興したる今日より論ずれば卽ち紀元前と云はねばなるまい 柳下「シテ紀元前と云て君は是を反古にする氣か 桐山「サア全體法理上より論ずれば紀元前の貸借は都て期滿免除で宜しい譯だけれど社交上より議する時はまさかソウも往まいに由て公債の例に倣ひ凡そ紀元前に係る分は舊公債の處分法を以て大藏省の減債法に則り卽納すれば全額の一割五分か二割で打切勘定にする事と仕たいネ 柳「イヤ怪からぬソウ云ふ規則を制定して人民の貸借に立入られては夫こそ資產の消長を左右すると云ふもの僕は決して同意は出來ないネ 桐「同意が出來るも出來ないもソリャ衆議に掛て多數の決する所に從はねば成るまい、僕とても君にやア負債があつても他にはまた貸に成て居る(ト紙入より切手を出して見せて)コレ此通りだ、併し僕は何れにも多數決に從て異議は唱へない積りだネ、と云ふは此の桐山が貸借を差引すれば借方が多い故の事なり、されば如何と議論の末に多數決と成り菊川梅田桐山櫻谷の四人は舊債處分法を可なりと仕たるに付

き松野柳下武藏野は少數ゆゑ泣々も多數の壓制を受て差引の方を附け、サア是からと例の如く激戰に及びたるに一場の大議論こそ起つたれ柳下が親で短一の手役、梅田が胴二で三光櫻みの無役、桐山が末で赤三の手役にて戰に及びたるに哀れむべし胴二が四光の謀叛も畜餠に屬し青も已に割れて仕舞ひたれば相殘る處は末の裏が出來るか出來ぬかと云ふ場合とは成つたり、末の桐山は既に梅の短册を取り二挺の打別れに櫻の素を打當たれば櫻が甞さへすれば手の松は極りゆゑ宜しいと甞を見やうとすると柳下はオット待たりと止めて萩の素を起し「サア宜しい親に素十六が出來たから人の手役を消して四光並桐山君から十環梅田君から十四環貰ひませう、と言ければ桐山は「ドッコイソウは往まい僕の所にコノ通り裏がチャンと出來て居るから三九の出を頂戴いたさう」「ソンナ法があるものか現に素十六が先に出來て居るもの」「先でも後でも宜しいに敵する者は無い宜しいが出來れば牌を毀すから素十六でも惣一杯でも勘定の出來やうが無いワ」「惣一杯は引上て勘定の上で無くては分らぬが素十六は其と違ひまだ引上もせず君の宜いが出來もせぬ内に此通り出來て居るから卽ちお先ぢや無いか夫を彼是と云ふ譯は毫末も無いぜ」「イヤ〳〵ソウで無い四光青裏の三ッの外には毀しにする役は無い抑も此花では四光裏青の三ッに敵するものはなく其他は惣一杯と雖ども素十六と雖ども宜しいに向ては其權利を失ふが卽ち宜しいの最上權たる所ぢや無いか」「ソンナラ

手役はナゼ勘定する」「アイヤ手役は引前に相互に勘定すべき物だから格別ぢや」「イヤさうはさせぬ」「ナニさうする」「怪からぬ」「不屆千萬」「無法至極」と顏を赤め合ての大議論に一座の連中は仲裁をしたる末に「是と云ふも畢竟は不文律法ばかりで未だ此上に成文法が無いゆゑに兎角に個樣な議論が起ると云ふもの衆々申合せたる如く近々會議を催し全會委員となつて規則を制定して其發布式を行ふと仕やう「先づ夫までは暫く桐山君の說に從つて三九の出と仕て置て此座に限り法律は既往に遡るとして其時に確定しやうと仲裁しやうと此難論を納めたり

第十七回　議席の不體裁

此は某し館とか呼べる集會の場所、この日は外國貿易に付き東京の商業社會より利害の意見を其筋へ上申せん爲に催したる臨時の大會議、およそ商業に直接の關係ある輩は勿論のこと經濟學士理財博士その外名だゝる先生だちは當會主幹の招待に由て集ひ來れる大集會なりければ天文家が見たならば得星は此に集ると云ふなるべし（德星には非で損得に掛る得星なりと知るべし）されば七險人の輩は初より此集會の相談に預りて殆んど亭主方も同前なるに刻限に成ても中々來らず漸く二時間も過て早や會議を開かうと云ふ所に斷付て、遲刻いたして相濟ませんが實は據なき商用にて…

……某省に出頭いたして……某殿が參られて……など、頓だ所にお役人風を吹せて胡魔化しは胡魔化したれど其實唯今の今までも此連中の家で花軍して居たりしは顔付の揃て汚れたるにて現はれたり

會議に列して椅子に就きたるは此集會にて選擧せられたる三十餘人の委員その外は會には列なれど親しく意見は陳述せず傍聽同樣の心得と定めたる一種の變則會議尤も七險人はいづれも此委員に選ばれたれば儼然と儀威を正して着座したり。衆議にて先づ當日の會長を選びたれば會長は上席に着て開會の趣意を簡短に述べ（簡短と云ても五十分間の演說なれば退屈も御尤もなり）書記を以て議案を會員に配布し順序を逐て朗讀をなさしめ（この朗讀が二十四分四十八秒半）サア意見をと成たるに會長と呼掛て、抑〻此議案に關して本員は先づ全體上より試に利害の觀察を下したるに……と初めたるが皮切にて何が扨我は學者なり我は博識なり……實驗家なり……經歷家なり……實際家なり……專門家なり……と銘々に得意々々を貯へたる名家揃ひの大天狗小天狗愛宕の太郎坊秋葉の三尺坊銀行の利息坊會社の請負坊商會の駈引坊商店の遺繰坊を初として權利坊やら理論坊と何れも鼻高の寄合なればコレサ押な〳〵余が先口だと押分へシ分て演說の先陣を爭ふ樣は左ながら佐々木梶原が宇治川に異ならず。然るに平日なら熊谷平山が一二の蒐を競へる如く眞先かけて口

を開き他人に後れぬ七險人が何故にや此日に限り（何故は知るものは知たれど知らぬもの〻不審なり）何れも口を閉て捗々しき議論もせざりしが會議はまだ尖ならざるに其中にも菊川桐山松野の三人は數日連戰の疲れに堪ず椅子にもたれて居眠なし或は卓の上なる議案に涎を垂したり或は議論の最中に隣席でグー〳〵鼾を搔たり或は口中にて喃々と寐語を言つたりイヤハヤ不體裁を極めたる有樣に流石に隣席の人も氣の毒に思ひ膝を突打て眼を覺さすれば桐山は惝り仕ながら目を見開き演說の止たるに氣が附て會長と呼び「一體この問題たる議案に依れば關稅の事と論じたる一節には本員頗る疑點が御座る其故は……と堂々と辯じ掛つたるに（餘り堂々でも無けれど）會長は「アイヤ桐山君唯今は第一節の討論でマダ其關稅の第三節には參りませんと跳附られて「ハ、ァ成ほど左樣で御座るか然らば其場所に至て發言いたすで御座らうと澄して着座は仕たれども其不手際千萬は會議に黑人と知られたる桐山には不以合なりとは赤面の次第なりき。第一節の決議を畢りて第二節に移つたれば會員の某氏は「此の沿岸航海の事に付ては菊川氏こそ外國の實例を取調べ居らるゝと承はれば同氏の說明を聽聞いたし度と居睡を承知で態と小聲にて述たれば會長は某氏の請求に由り菊川君御演說あつて宜しからうと是も承知で命じたれど白川夜船の菊川なれば更に返答なし、菊川氏菊川氏と再三呼起されて「へ、イ成ほど本員に演說のお望み心得て御座る此の治外法權と申すはエ

キスダラ、テルリトリヤリチーと云ふ原語で其起源は中世土耳其國と歐洲各國の通交を……「イヤ菊川氏本員の請求は治外法權では御座らぬ沿岸航海の實例を所望で御座る「フウ、エンガンコウカイ、艶顔後悔……本員曾て研究仕つらぬ尤も艶顔の爲に欺かれて後悔した事は御座つたが其實例は公衆面前では吶しが仕り悪いが……左樣かコースチングトレードの事ですか、どうも銘々勝手に譯語を附て申さるゝに由て了解いたし兼て御座つたと分疏しても分疏くらき居睡の證據「シテ〳〵此案に就て尤も緊要なるは輸出入の統計それが無くては空論に陷りませうかと一本指したる松野が目を覺したる第一着の疑問に「イヤ其統計は議案の後に參考として附て御座るが君の議案にも附て居ませぬか「成ほど此に有ましたイヤ餘り細字で印刷して有たゆゑ目には入らなかつたとは窮極つたる負惜と全會一致の物笑とぞ成たりける

會議歸りは三十間堀のとある待合茶屋の樓上「イヤ實に今日の會議には辟易したよ「それに君は居睡ばつかり仕て居たもの「僕は始終居眠で持切たから別に破綻も出なかつたが菊川君の寐ぼけには恐入たネ「僕も失策をしたが松野君の統計は妙だつたぜ「ナンノ妙な事があるものか君が隣席に居ながら一寸注意して呉れば好のに「デモ僕も好心持に糟で居た所だつたもの「夫じや仕方がないが僕よりも桐山君の方が醜かつたヨ「ナニアレ位な事は有がちだネ「餘まりソウでも有まいが實の所

が連日連夜の戰爭揚句に會議は閉口仕つるネ「ソリヤそれに違ひ無い、左なくてさへ人の演說の永いのを聞されちやア寐猫唄を聞く樣な心持に成て眠氣が出るものだのに軍さ疲れの後では我ながら尤さネ「是に就て僕には屈竟の名案があるがネ、帝國議會開設の上では定めて兩院ともに議論が囂しからうが、此議員に限つては徹夜の花軍を成すべしと極てセツセと引かせて其足で直に議場に出席させる樣に仕たら何れも疲れの居眠りで原案通過と成だらうが、ナント名案だらう「コリヤ名案だ「コリヤ妙策だ「奇計だ「クレウルホリシーだ「クードタクチツクだ「内々で内閣へ建白したら宜らうぜ

第十八回　虎口の危難

梅田「コレサそう早く彈れちやア唄へないネ一體二上りは間が大事だから三味線を寛くりと彈てくれんじや困ネ　小でれ「ハイ私いにやアソウ甘くは引ませんヨどうで貴郎のは延へまさんが合三味線ですからネ　櫻谷「ソウだ〳〵、コリヤ小でれの言通りだ梅田君は何でも延へまが所へ往と清元を二段語つた後で端唄を五ツ六ツ呻つて夫から本職に掛ると云ふから延へまも豪傑さネ　柳下「道理で此節は延へまの顔の色が青く成つて來たぜ　梅田「馬鹿を云ひ玉ふナ、シテ見りや小でれなんざア剛氣なものだネ

櫻谷君が聲調子外れの謠曲を三四番も聞されて辛抱しても何とも無いから不思議サ　じん助「ナニ實の所が小でれチャンだつて不死身ぢや無から中りませうヨ私いなんざア身體が弱いせいか旦那の一中節を丸一段彈ますと二日ばかりは胸先が痛うございますもの　柳下「じん助、怪からぬ事を云ふナ、手前それだつてお廣の順講の席で余が石和川を聞て夫から色に成る氣になつたぢや無いか　じん助「戯談いつちやア往ませんよ川合の姉さんがアノ旦那は堂だと言つたから私いも暮で苦しい最中ゆゑ唯宜しいと言たけれどアノ石和川で御免を蒙りたいと斷つたじやア有ませんか　小でれ「チャよく似た咄しが有ねェ私いも後生だから謠曲だけは止にして下さいましナンボ旦那藝でも外の藝者衆に對して私いの片身が狭いから、其代りに誰も居ない所でなら私いが聞て上ますからと賴んで居る位ですヨ　柳下「甚助、ソレ見ろ、でれチャンは手前から見ると餘ほど實があるぜ　櫻谷「餘まり實も無いヨ、僕が偶に謠曲を唄ひ出すとづッと立つて其場に居た事は有りは仕ないワ　梅田「コリヤ居ない方が尤だ、居ちやア命に障るからネ　櫻谷「君の清元だつて命に障らない方でも無いぜ　柳下「ソウとも〳〵アノ變な聲で「寐屋の障子に面影もれての甲所を語られた日にや絶交し樣と思ふ事があるヨ　梅田「夫でも君の、「小町御前を負まいらせよりやア遙かに出來るものさ　小でれ「左樣サどつちがどつちとも言へませんが柳下の旦那の「聞てもらえば遠山の松は色こき夕霞も困りますヨ　柳下「コレ〳〵乙に余に當てくるなお前の旦の「道成の卿うけたまはり初めて伽藍たちばなの兒た樣に夫の遠吠は仕ないヨ　武藏野「コウ〳〵藝事の喧嘩は止にし玉へ〳〵　櫻谷「デモ餘り僕の謠曲を　柳下「イヤ僕の一中節を　梅田「イヤ僕の清元を　梅田「誹謗極まるに由て　柳下「いかに信友の間柄でも　梅田「勘辨致し　三人「惡う御座る　武藏野「御尤々々然らば僕が仲裁の驗しに羽鶴を（竹本羽鶴とて義太夫の女師匠）呼にやつて安達の三でも語らうか　櫻谷「ソリヤ大變　武藏野「ソンナラ質店をソックリ聞せ樣か　柳下「猶更騷動　武藏野「ソレぢや大負に負て三十三間堂に仕やうか　梅田「何分とも御勘辨　三人「願上るでムりますハ、、、ア夫ぢや遊藝は止にしてサア商賣に取掛らうと差圖に任せて持出す兵器、土俵は赤い氈布を敷き四人で初めた惣忍花、「出たヨ「逃た「差だ「何だ晒しか「オット桐で十、十五、「追込だ、「赤で二枚の一環づゝ「サア來い望め「オットさうはさせぬぞ切て末に預て置う「サア打分れだ「ドッコイ〳〵松は法度だ野の廿を打つたり〳〵「エ、忌々しい手甞で居やがる「ソレ三六の出だ「酷い〳〵「コウ〳〵稀らしいぜ千番に一番と云ふ手役雨の四枚で空素の一二四「ナンダ空素の一二四、十環役か「剛いものが附たぢや無いか「是で僕の勝利が流れたか、エ、殘念やな無念やな……此上は生替り死替り恨を晴さで置べきか「コレサ〳〵何に大手役を喰たと云て芝居の身振は御免だぜ「デモ君がエ、殘念や無念やなと菊五郎の聲色を遣つたからつひ振を見せる氣になつたのヨ「そんなら戻橋の鬼女で我住家へつれ往ん

とやらかせば宜に「コレサ芝居ばなしは後にしてサア望だり〳〵と景氣よく引て居たる所に下より此家の女房は忙たゞしく上り來て大變ですよ〳〵棒が來ましたヨとの知せに落花微塵の大騒とは成たりけり、此中にも柳下は斯る險呑なる場合に臨んでは度胸の納まつたる大膽の冒險家なりければ棒と聞くより早く花牌も碁石もクルリと氈布に引包み其氈毛をば手早く自分が敷たる座蒲團の下に敷き其上にドッカと坐り火鉢を前へ置き煙草くゆらせ居たる所にドカ〳〵と足音をさせて上り來りしは兩名の捕亡吏なるが制服の釦丹を光らせて此間に入來りジッと座敷を見て　各　方は誰で御座るとの尋ぬれば、柳下は悠然として、拙者は東京〇〇〇柳下定九郎と申すもの是なるは〇〇〇〇櫻谷幕助〇〇〇〇武藏野丸作〇〇〇梅田驚所で御座る「シテ是へは何用あつて「別に用事は御座らぬが遊興の爲に參り御覽の如く藝者どもを呼寄せ是より酒宴を催さんとする所で御座る、併し何か拙者共に御不審あつて案内もなく御踏込なされたる義で御座るか「イヤ　各　方には別に仔細は御座らぬが他に取調ぶる事あつて是へ參つた譯で御座ると、捕亡吏は何だか座敷の體たらく怪しいと思つたれど原々他に目指したる罪人を詮議の爲に此家へ來りしものなれば深くも穿議もせず殊に東京にて屈指の紳士ゆゑ蒲團の下の赤氈布おかしいとは知たれどソコまでは糺しもせずして引去つたり後では虎口の難を遁れたる心地して一同はホット大息を吐き「ァ、怖かつた「イヤ僕も實に轉倒し

たよ「夫に付ても柳下君の膽略には驚いたネ「ソリヤ君たちの臆病者とは違ふワ、こう見えても御一新前から白刃の中を潜て來た男だもの「ソレに柳下君は原は上州の長脇差で國定忠次の子分だつたからネ「勢力と喧嘩の時にや大そう働たさうだが「甲州の祐天にや叶はなかつたらう、デモ會津の小鐵や清水の次郎長など、は兄弟分だと云ふから「コレサ〳〵僕を何だと思つて居るか是でも今日では東京の紳士だぜ君たちも僕のお蔭で今日の難を遁がれたのだからサア是から僕に御馳走し玉へ「勿論々々併しモウ〳〵懲々だネ「是に懲て茶屋船宿の樓上の戰爭は止に仕やうぜ「ナンでも戰爭は自宅に限るヨ其中でも西洋館で戸の鎖前をピンと卸して初めるのが一番安泰だぜ「ソウとも〳〵以來個樣なる所では決して戰爭を成ざるべしと誓約しやうヨ「又誓約か、直に取消になるだらうぜ「イヤ〳〵此個條は遵奉するヨ誰だつて市谷行や佃行は下らぬからネ

第十九回　七險の末路

個樣に七險人の輩は長者には意見せられ捕亡吏には踏込れ龍の顎や虎の口の危き難に罹りなんとしける事の屢〻なりしかど持たが病ひの好な道とて「博奕打とも言りよが儘よ好な花牌が止らりよかア、コリヤ〳〵、と鼻唄で諫を拒み今日も合戰、明日も戰と夜を日に繼での弄花三昧。コレが明治

二十三年の今日の如き方正嚴直の社會であつた事なら何に七險人が英雄でも豪傑でも素封でも學者でも世間で承知を仕なく成で有らうがソコが何を云にも十四五年以前の事で未だ社會に德義の制裁など、云ふ小むづかしい事が流行なかつた時代であつたゆへ夫で通つて往たがサア時の勢といふものは不思議なもので弄花の流行は日を逐て益〻熾になり雨降つゞきのコケラの如く何所も彼所も寄と障ると花騷、昔し羅馬にて御一新の初め時の宰相參議を初めとして權威ある官員は皆田舍出の功臣たち許りなりければ羅馬の都めづらしく朝には驄馬に鞭うつて章臺の柳に轡を並べ夕には畵舫に棹さして桃葉の渡りに纜を繫ぎ巫山の夢に連理の歡を極め落花もし情あらば流水いかでか心なからんやなど、洒落て英雄は色を好むと云へば色を好むものは即ち英雄なりと云ふ論理法で附會て居た頃にある時席上の雜話に「イヤ何の某は白拍子の誰に狎みてトウ〳〵落籍せたさうで御座ると、噂したれば上席の參議が是を聞れて「ハヽァ左樣か夫ぢや定めて金も入だらう奏任に上て遣ずば成まいてのウ……白拍子を引する位だから人物じやらうヨ、と言はれたと云ふ滑稽ばなしを聽た事がある其實否は知らぬが成ほど羅馬帝政の初頃はソンナもので有たかも知れぬ、然るに紳士社會の流行が殆んど夫に類する位の勢ひに成て「時にあの漢も此節は惣忍花から勅忍花を引さうな」「ハヽァ左樣か夫ぢや我々上流紳士の仲間に入て交際をしても宜しいアノ地位で勅忍の席に列なる位なら定

めて人物であらうと云ふ程だから大變な譯サ、世間一體紳士一統が花で持切て來たから今では更に稀らしからず七險とも十哲とも云ふ人さえ無くなりたれば七險人は益〻得意になり誰憚らず世間はれての花軍さ勝負の慰みに他事なかりける然はあれど新陳代謝は事物の數とかやにて十年前までは突轉ばしの色男を勤めたる花形も今日では老人の役がはまり役になつたり、此間までアラ否で御座いと云た赤襟が此節は待合茶屋の女將軍になつて旦那アノ奴は何です手輕く御周旋いたしませうなど、切て廻す世の中になつたれば天保弘化に生れたる有志家は疾に天弘老人連と高閣の上に束ねられてモウ少し立てば生ながら觀古博物館の備品に成らんずる景色となり嘉永安政度もモハヤ古びが附て何でも文久慶應明治の初に生れた者で無ては相手にならぬといふ勢とはなりぬ。されば弄花に於ても右同斷の譯合でサア一雨々々に後進の生徒が殖て來たとも〳〵續々と後から出來たが其中には實に後生恐るべしで驚くべき上手や名人が現はれたれば初めの程こそ七險人の老輩が、ナンノ彼等ごとき黄口乳臭の兒輩いかんぞ乃公に敵するを得んや、ソノ通り〳〵彼奴等なんぞはマダ卵の殼がくッ附て居やす退治るのは譯やァげエせんなど、甘がつて掛つたれ、サア眞劍勝負と成て來ると若手の後進が威勢よく引てピタ〳〵と起し腕達者に引て引て引捲るに敵しがたく流石の七險人も動ともすれば受太刀になりて籠城も堪へがたき迄にはなりにき

『どうも若手の連中が無法引をするにやァ困るネ「實に困り切るぜ自分さえ宜りやァ一人殺しになつても勝利が崩れても搆はぬと云ふ連中だからネ「それに此上の妙所は己を知り人を知るに在で、余が手に是々があつて出たが、末は手役、シテ見れば胴二は是々を持て此の見込で出を掛たのだなアと勘を附て下るものは下げ寛める所は寛めるが肝心だネ、夫を若手の奴等が少しも心得ずに自分勝手ばかり引が怪しからぬョ「だから我々が本筋を引て却て彼等が逆を引くのに負される事がある は殘念千萬だネ「ソウとも〳〵夫だから此地でも無法引を仕やうと思ふが扨サアと成るとソウは往ぬものでつひ正道を踏で其爲に誤らる、事があるョ「併し僕は彼等が爲に彼是二月ばかりの内に十五1500ちかく取られたぜ「ソウだらう僕だつて此間の三徹で丁度十一1000やられたネ「なんでも彼等は此春から我々共の手から八十8000は取たらうぜ「宜いッ〳〵此次の土曜から日曜に掛てあの若武者共を根こそぎ酷い目に遇せて息の音が出ぬ樣に仕てやらうョ「なんの我々がサアと元氣を出した日にや譯なしョ「ソウ甘く往ば宜が

彼方にては若武者連のはなし「ヲイ睦月君一昨日は堂した「ナニ少しばかり七險人の燒廻り連中を退治て遣つたョ「ソレヤ宜つたあの慾張の爺連は手前勝手の引樣ばかり仕て碌ない所作をするから思ふさま退治て遣るに限るぜ「それで此間も更衣君と彌生君と僕と三人で櫻谷桐山武藏野を相手に

して戰つた時にも、サアと出を掛て置ながら人が哂し掛る手附を見てオット見損なつたから逃ると云たり、宜しいが出來さうな樣子を見てわざと一枚手の札を隣に落して足ないと云て毀さうと仕たり卑劣至極な事をする奴ョ「ソレでヤレ是が親の權利だの胴二の義務だの末の特權だのと理窟ばかり並べて講釋をするから實地でドン〳〵退治るに限るぜ……ナンノ彼奴が金は元々惡錢だもの取て遣るのが功德になるサ

第二十回 結尾

（琵琶の音カラリン、テン、ツテンレントン、ヂャン）

祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響あり沙羅雙樹の花の色盛者必滅の理をあらはす、奢れるもの久しからず只春の夜の夢の如し猛き人も遂には亡びぬ偏に風の前の塵に同じ

イヤ永々と小秘事をお聞せ申しては御退屈であらうから平家は殘念ながら此等で止にして七險人の身の落着をお話しいたさうが此人々は我身の榮華を究むるのみならず一門とも繁昌して地面邸宅公債株券いくらと云ふ數を知らず綺羅充滿して堂上花の如く駄貴群集して門前市をなす楊州の黃金荆州の珠吳郡の綴蜀江の錦七珍萬寶一として缺たる事なく花道舞樂のもとひ魚綾爵馬の翫び物（コレ

サ〳〵上人まだ平家で御座りますか、恐れますネ）マア聞つしやれ實に贅澤三昧で金錢は浮世の湧物だに不景氣とはどんな風だか當つて見たいものだ貧乏と云ふものも却て氣樂で面白からうにと明ても花暮ても花と花に浮身を窶しつゝ、櫻町の中納言の故事を學び花の齡を泰山府君に祈りておはしたりけるが左しも盛りを極めたる二十餘年の榮華の夢も滯永の春の浦風に吹荒されし如くにて敢なき終りを見せ玉ひしぞ遺恨なる（コレサ〳〵上人マダ平家句調ですか、困りますぜ）

先づ衰への初めと申すは柳下定九郎が頓死なり此人は兼て申せし如く奸佞冒險の剛の者にて酒は一升酒を飲み婦人は人一倍の好物でその上に健啖の癖あつて不養生を極め弄花に掛ては一月三十日の内で二十七日は徹夜すると云ふ位なりけるが秋の央より心地何となく常ならざりしに桐山松野櫻谷菊川の四人と自宅にて三日三夜の連戰に及びしが三日目の夜半ばかりに花牌を手に持ちながらウンと叫びて毛氈の上に倒れ其儘にて息絶えたり武士ならば戰場の討死に比しき最期とは云へまだ五十五歳の齡にて左したる老境と云ふほどならぬに花ゆゑに頓死せられたるは一門の嘆き家族の悲しみ一方ならずと何へど他の人々はあはれ柳下が果報かな花の莚に往生の素懷を遂し事の有がたさよと羨み玉ひしとぞ。

次に武藏野丸作は生得の吝嗇にて慾深き性なりければ弄花の負をば地面の思惑にて取返さんと去年

より許多の地面を買入たりけるに此節に至り俄に地面の大下落に遇ひ持堪えも出來ずやありけん柳下が頓死より一月も立ざる中に武藏野が身代限を出したるぞ是非も無き。菊川青也は世に時めきたる時論家なりしが弄花に耽つて博奕打も同樣なりと反對の悪に浮名を立られて法螺の聽衆は減り負債に首は廻らず成たれば不平が高じて發狂したり。松野鶴藏はいくら花は負ても響の入る身代にはあらねども酒と女が過たる上に弄花の爲に身體に響が入つて四十二歳の厄年で中氣となり二本杖の天王樣とは成られたり。櫻谷幕助は米か株かは知らねども掛引の手は狂ふし八方より敵は責て來るし迚も籠城覺束なしと悟りてか鑛山視察と立派な名をつけ東京を出立したりけるが其以來今日まで十餘年が間誰も過たと云ふものも無ければ生死の程は確ならず。桐山鳳栖は酒と女が身の敵の上に花遊に氣根を遣ひ過て腦病を起し遂に健忘の症に變じたれば得意の法律もどこへやら往てしまひ此世事は蜚には忘れ果は女房子の顏さえ見忘るゝ樣に成たれば菊川の如くに荒れ廻りこそせね今朝の廢物の中に數へられしぞ氣の毒なる。梅田鷲所は多病の癖に酒色は達者で花に凝固まり著述と兩方にて眼をひどく使ひ過たる其上に花の負債が苦勞の種となつて眼病を起したるに希代の難症に名醫の治療その効なく遂に皆目の盲とは成りぬ命にこそ別條なけれ左丘明ミルトンの學力文才あらば知らず梅田ぐらゐにて盲目の著述家は思ひも寄らず何にしたりけん其後たよりも聞かずなりにき。

是が即ち七險人の身の果で今は已に十餘年前の昔し語りとは成てござる

彌陀の本願が四十八願で人の癖が四十八癖、なくて七癖と申せば癖は誰にも有が當然、なるほど七險人の人々の性質や所業を論じたら批難する個條もあつたで有うが法律理財商業事業時論製造著述の七事に附ては各〻其上では一方の旗頭と云はれた人材これが眞目で今日まで居られたら世上の尊敬社會の名望みな此人々に集まつて木鐸とは云はるべかりしに中途にて斯も果なく衰亡せしは悔みても嘆きても猶餘あり是と言ふも畢竟その源を尋ぬれば花道の魔界に墮落して由なき快樂に溺れたるが禍の基ぞかし内にては、妻子和樂の歡を失ひ外にては朋友相助くるの義を損じ社會の信用は日日に薄くなり世上の誹謗は時々に加はりて面白からぬ冷遇を蒙りたるも皆是れ魔界の障碍ゆゑなりしとは此人々も迷ひの夢の覺し時には思ひ當りしならん、愚僧も曾ては其仲間に立交りし事もあれば罪障消滅の爲にと說きたる花懺悔かくの通り、參詣の方々是がよい手本じや程に弄花の魔界を免れて正道に返らつしやれ、だが中々ソウ容易は思ひ切まいからせめて番子の半分だけでも懺悔の爲に愚僧に奉加なされい、南無歸命頂禮顏富流如來平等利益攝取不捨と鉦打鳴らして廻向したれば聽衆もみな隨喜の涙に懺悔の思ひを爲したりける

稿了り筆を擲ち合掌して曰く

南無阿彌陀佛〳〵

櫻癡居士識

滑稽小說

花懺悔畢

廻る因果

第一回

鐘一つ賣れぬ日は無し江戸の春とは德川家の世盛り、大御所樣(家齊公)時代の繁昌土一升に金一升とは何のその、大河一つ隔て、深川の世界を觀れば、春の宵の一刻が金千兩では廉いものと、そゞろに浮れて來る客の足跡しげき岡場所の、中にも取わけ賑ふは意氣と粹との中町にて、春風に翻へる尾花屋の暖簾は秋まだきに人を招き、道ゆき通ふ歌妓の素足は殘んの雪かと疑はる、火繩箱を提て急ぐ船頭あれば、仕掛文庫を持て歸る輕子あり、送迎ひの提灯は棧橋の上に繁く、貰ひ引の掛合は帳場の前に忙はし、威儀を作れる武士も二本差たる豆腐よりも柔くなり、道德高き上人も女人の濟度に渴仰す況てや町人商人番頭手代、千早振鈴の神主、藥箱もたぬ醫者に至るまで、一たび此鄕に足を踏込ては誰かは歸るを忘れざるべき、實に桃源の別天地、此世からの極樂淨土といふも却々恐なり。頃は天保十年三月十九日の午後の事なるが『大きに有がたう皆はん今程……』と世詞を殘して左褄をきり、と取り供の男に長箱を持たせて山の松本の門口を出來れる歌妓は、當時中町で屈

指の流行妓富本豐綱とて年の頃は廿二三、水際の立たる婀娜もの座敷の酒にほんのりと櫻色に成たる目許これ一入の佳處なれ、最前より松本の近傍を用あり氣に彷徨き居たる一個の男、垢じみたる袷を着たるが、それと見るより足早に近づき寄り後より『オイ小綱〳〵』と聲を掛くれば。豐綱は振返りて『オヤ德さんかエ』と柳の眉に八の字を寄せたり。男は其顏を見て『そんなに卿、いやな面を仕なくつても宜ぢやァ無いか』『ナーニ否な面をする理ぢや有りませんが……さうして貴君なんぞ川が有るのですか』と尋ぬれば。男は頭を搔きながら『さうさ用と云つて外ぢやァ無いが卿も知つてる通り余も段々の不造化で……度々の事で氣の毒だが些ばかり借り度のだが……』『お氣の毒だが德さん、今日は可ませんよ』と權もほろ、の挨拶に、男はムッとしたれど猶も詞を卑くして『そりやモウ度々の無心で卿も否だらうが、エ、小綱、見て呉な、此樣ぢやァ何を仕やうと思つても人が相手に仕てくれねエよ、と云つて何所へ無心に往かうと云ふ當も無し、昔剛染の卿に縋り合力たのむ外は無エ、夫も些ばかりで宜のだから算段して呉な、然すりやァ其で身形を拵へ何とか工夫をする積だ』と只管賴だり。豐綱は深く氣にも止めず『サア持合せが有るなら上げも仕やうが今日は生憎だから可ませんよ』と言捨て、行掛れば。男は前に立塞りて『持合せが無エからッて都合の出來ねエ卿でも無からう助けると思つて幾らでも宜から……』と附纏ふたり。人の往來しげき通

りでは有り、相手は歌妓では有り何事にやと往來の人々立止れば。豐綱は極り惡く少し聲を荒らかに『可ないッたら可ないんですよ』と突退くる。男は猶も袂に縋りて『オイ小綱、後生だからよ』『止てお呉な煩さいねエ』と振切れば。男は怒氣滿面に溢れハッタと豐綱を睨みて『オイ小綱、汝おれを物貰ひだと思つてるのか昔の事を思やァさう薄情にされた義理ぢやァあるめエが』と聲高に罵るにぞ。供の箱廻しは見兼て遮り止め、互ひに言合ふ高調子。斯る所へ松本の内より抱への蔦頭が走出て男を突退け『ナンダ此社内の往來中で歌妓衆をつかめエて何をぐづ〳〵喰しやァがるんだエ、尊姐、一體此奴ァ何所の奴だい』と聲高に尋ねたり。豐綱は事面倒に及ぶを惧れ、蔦頭に向ひて『ナァニ頭、こりや私の身寄の人ですよ……サア德さん兎も角も私の家へ往て咄を聞ませう』と其場を言繕へば。蔦頭は打頷きて『さうかい私ァまた只の無賴漢だと思つたから、此八幡の境内で言掛りする太エ奴、向後の見せしめに酷甚い目に遇して遣らうと思つたに』と云へば。男は『ナニ酷甚い目に遇すと、巫山戯た事を吐しやァがるな』と喰つて斯るを。豐綱は押止め『何にも言ねエで私の家へお出なさい頭まことに濟ません』と會釋すれば。蔦頭『豐綱さん卿も良い身寄を持て仕合だね』と嘲笑へば。男は眼に角立て『なんだと』と又ふり返るを。豐綱は無理に引連れ我家へこそは歸りけれ。

立止りて此態を傍觀したる往來の人々は口々に『今の男は何だらう。アノ歌妓は仲町の豐綱だが、あれの情夫だらう』『ナァニ情夫ぢやァねエ、どうも樣子が同胞らしいぜ』『大違エ〳〵、ありやァ先の亭主だらう、見ねエ、アノ男の面ァ情夫といふ面ぢやァ無エぜ』『オット眼鼻の細工にお目を留でごらうじませか』と噂區々なり。抑も此豐綱と云へるは今より七年前、岩井小綱と云ひて立花町より姉子にて弘めを爲し、專ら客の招きに應じて座敷を勤めたりけるが、年紀十六、色藝雙全の噂高く、引手あまたの其中に別て深く陷りしは鎌倉河岸に富有の聞え高き米問屋山田屋德太郎と云へる漢なり其頃德太郎は二十五歲、家には妻もあり清吉とて六歲の小兒ある身にて、小綱の色香に惑溺なし、家を外の放蕩三昧、小綱が十六の秋より十九の冬まで買通し、人の意見も世の譏も顧ず、小綱が爲に莫大の金子を使ひ棄てたれば。實父德右衛門、斯ては遂に家藏をも他手に渡すに至るべしと、親類相談の上にて德太郎を勘當なし妻女は離緣して實家へ歸し、先に分家させたる次男德次郎を妻子もろとも本家に呼戻て戸主となし、部屋住の三男德三郎を德次郎の跡に直したり。德太郎は昨日に變る身の零落、屢々小綱の家へ無心に來りければ、小綱は之を厭ひ殊には德太郎の爲に其身の惡評をさへ來したれば二十の春、深川に轉じて藝名を富本豐綱と改め歌妓とは成たるなり此豐綱は右に云へる如く、十六七より數の男に出會ひて頗る浮薄の性なれば、深川に轉住して後に

彼是と間夫狂したるに、此程は達磨の辰五郎と云へる漢と深き中に成り、男振の小意氣なるにうつつを抜し、此頃にては其胤を胎内に宿して居たりけり、扨また徳太郎は其後いよ〳〵窮迫して博徒の群に入り、豐綱が深川に轉じて後も、なほ無心に來りければ。豐綱も煩き餘り、すげ無く斷りて打拂ひたるに付き。徳太郎は手段を考へ、今日しも豐綱が座敷の歸りを待受け、わざと往來中にて無心を言懸たるなり。さて豐綱は蒲頭に出られて餘儀なく徳太郎を中裏の我家へ連歸り着替を爲して火鉢の側に坐り箱廻しに向ひて『源どん、卿に些と用があるかも知れ無ェから其に居てくんな』と臺所に待たせ置き、鐵瓶の湯を注で飲みながら徳太郎の顏を見詰て『ェ、徳さん、貴君にも困りますね全體私に何の遺恨があつて、あの樣に往來中で私に恥を搔せなさるんだェ』と聲鋭くも問掛れば。徳太郎は豐綱が煙草の箱を引よせ、我身の運も雁首も俱に細りし鉈豆の烟管にて烟草を蒸して居たるが『ナニモ卿に恥を搔せる積ぢやァ無かつたが、行掛りで大きな聲をして誠に濟なかつたマァ勘辨して吳な、卿も度々の事で煩さからうが、先きも云つた通りの理だから些ばかり算段して吳な』と又くり返す金の無心、豐綱は澁面作りて『そりや以前立花町から出て居た時にや、お世話に成つた貴君の事だから、是まで二兩三兩と恵んで上げたお金の高は一々覺えて居ませんが、生優しいお金ぢや有りませんよ、私だつて給に詰たやうな金の生る樹は有て居ないし、さう何時までも

義理〳〵と云つて御合力は出來ませんよ』と突つ跳たれば。徳太郎は眉を怒らして聲高に『ナンダイ恵んで遣るの合力のと、大きな御託を吸きァがるなイ以前の事を想やァ余が來る度毎に平清の料理で御馳走して、二十や三十の小遣ェを持たして歸ェしても宜い筈だ。愚痴ぢやァ無ェが一寸出るにも手代丁稚を供に連れ世間に知られた若旦那山田屋徳太郎と云はれた男が斯云ふ樣に落零たのァ誰のお蔭だ、汝だつて十六から四年ごし仕てェまゝの贅澤三昧、言ふ目がいつでも出て居たなァ皆余が仕て遣たのだ。犬猫だつて些とァ恩を知てるぜそれに何だイ只た二兩か三兩の端た金を惜みやァがつて……吳れねェと云ふなら要ねェや其替り汝の出る先々へ附纏つて祟つて遣るから然思へ』と近所へ響けと罵つたり。

第二回

徳太郎が四隣構はぬ大聲に豐綱は堪り兼て『靜におしな近所隣もある町中だよ野中の一ッ家ぢやありやァしないよ』『だから大きな聲をして汝に恥を搔せるんだ』と一倍大聲にて怒鳴るにぞ。豐綱も困り果て斯る惡徒に何時までも附纏はれては稼業の妨げなりと、思ひ直して膝押進め『貴君のやうに然う横車を押されちやお咄しが出來ませんね、貴君だつて立派なお家の若旦那、昔の身分を考

へて口をお利なはいな、私もするだけの事は仕てある積だから、此上、貴君に盡す譯は有りませんが、手切と云ふなら若干か都合して上げやうが、貴君不承知かェ』徳太郎も豐綱が今日の樣子にては、此のち無心に來りても容易には聽入るゝまじと思ひたればニッ返事にて『余だつて度々來るよりやァ、一度に貰つた方が宜が、汝いくら吳る氣だ』『貴君、幾らなら宜のだェ』さうさ十兩出して吳ねェ然すりやァ奇麗さつぱり汝と手を切てしまはうから……ェ、小綱、十兩の手切なら涙の出るほど廉いものだぜ』『餘り廉くも無いねェ併し緣日の植木のやうに直段の聞ッ放しにも成るまいから、言直通り十兩上げるが、其替り一札書てお吳なはるだらうね』『そりやァ喇が言ねェでも當然だ』豐綱は立上り鏡臺の抽斗より鼈甲の櫛と笄を取出して紙に包み、箱廻しを呼びて『源どん、氣の毒だが伊勢屋へ是を持て往て、十兩借て來ておくれな』『宜う御座ェやす』と箱廻しの源次は櫛笄を受取り急ぎ出行きたり。

豐綱の情夫辰五郎と云へるは、表面は小舟乘(遊客を迎送する小舟の船頭なり)なれど其實は博徒の中にも名を知られたる男にて容一面に達磨の文身したるより達磨の辰五郎、更に略して達辰と呼ばれたる男骰子一ッに運命を賭るは博徒の習ひ辰五郎は近頃奪られ續けの運わるさに煙草入から懸守まで質に置き無一物の身となりて、果乎と豐綱の家に來りたるは是また金の無心と知られたり。内

の樣子を窺へば見知らぬ男が手切の懇合『さては此奴が豐綱が話に乘て聞た山田屋徳太郎だな』と勘付いたれば、そッと裏手に廻つて立聞なし、頃を量つて表の格子戸ガラリと開けて入り來る。豐綱は折惡しと思へども倦み果たる徳太郎、さして遠慮もせず『オヤ辰さん、お出なさい』と自分の敷たる座蒲團を取り、打飜して達辰に敷せたり。達辰は徳太郎を尻目に掛ながら『オイお綱。遂に見掛ねェお顏だが、何所のお方だィ』と尋ぬる詞に何と無く凄味をこそは含みたれ。豐綱は落付顏にて『此お方は何時か郎君に咄した事が有つたらう私が立花町から出て居た時分、お世話に成つた山田屋の旦那さ』『フウム此方が山田屋の徳太郎君か』『アゝさうだよ』と兩人が應答の樣子に、徳太郎は疾くも此漢こそ小綱の情夫なりと悟り、ジロリと達辰の横顏を見遣りて『オイ小綱、おれの名を聞た此人は誰だい』と尋ねたり。豐綱はさすが返詞に躊躇たれば。達辰は徳太郎に向ひて、『初めてお目に懸りやすが、私ァ辰五郎と云ふ小舟乘でエす毎度旦那のお噂を豐綱から伺つて居りました』『ナァニ噂をされる樣な私ぢやァ無いが、其以前は金が廻つた所から深川邊の藏廻り商賣向の往還りに毎日遊んだ其間で尾羽うち枯した今の樣、お恥しい事で御座ェます』『ナァニお氣を落しなさる事ァごぜェません、一の裏ァ六で今に好目が出ませうぜ』『有かたう御座ェます。時に貴君は小綱の身内のお人でエすかェ』『エ、私ァお綱の亭主でエす』徳太郎はわざと驚きたる顏色

を作して『アノ貴郎が小綱の御亭主……些とも知らずに居ました』『さうで御座エませう歌妓に亭主は禁物だから隠して居やすが、實はお綱は私の女房で御座エますよ』徳太郎は嘲笑て『オイ小綱良御亭主を持て仕合だ』下墨かけたる喧嘩の端緒。氣相を變て達辰は『モシ徳太郎君、乙な事を云ひなさるね、お綱が承知で持た亭主。良らうが悪からうが大きにお世話だ』と敦圍けば。徳太郎は落着澄して『辰五郎君なにも其様に向に成つて怒る事ァねエぜ昔馴染の小綱ゆゑ爲を思つて言て遣んだ』『夫ほど爲を思ふなら何で度々豐綱に無心を言懸け心配させ、苦しい中の酷算段、その金を取りに來るんだ可愛想に馴のお蔭で何様に貧乏して居るか知れやァしねエぜ。それに今も聞て居りやァ、手切に十兩是非呉いと凄味を見せた無理掛合、たとひお綱が承知をしても亭主の私が不承知だ。十兩は愚、一兩も出させる譯にや行かねエから足許の明るいうちサッサと歸つて貰エませう』と言切つたり。

徳太郎は折角經つたる手切の談に横鎗を入れられてクワッと怒り『一言いやァ二言目にやァ亭主亭主と聞て居ても嘱が出らァ、オイ辰五郎君馴は能くも知るめエが此小綱が十六で立花町から踊子に初めて出てから四年ごし買て買て買通し、暑さ寒さの移り替り、座敷の支度頭の物、仲間の交際世間の義理、親への仕送り日々の出銭、みんな余が仕て遣つたのだ。口幅つてエ言分だが、まだ尻端

に卵の殻がくつ附て居た餓鬼上りそれが岩井小綱だの立花町の岩井だのと、人中で言はれる様に成たのは誰のお蔭だ、余が附た金箔の光りであると云ふ事ァ江戸中隠れの無エ噂だ其を思やァ今日からでも余が此へ轉げ込み、今から我が亭主だと、坐つたからつて満更に曲つた理窟ぢやァあるめエぜ』『常談言つちやァ可ねエぜ歌妓娼妓が客衆から金を取るのァ當然だ、其客衆が零落たからと云つて、一々世話をした日にやァ浮む瀬はありやァ仕ねエ、其を今更愚癡だら〳〵翻した所が死だ子の年を數へる様なもの、見りやァ馴も好男だが、あんまり愚頭々々言て居ると段々馴の器量が下るぜ、悪イ事ァ言はねエから、サッサと早く歸んなせエ』『歸エらうと歸るまいと余の勝手だ、汝達に逐立を喰ふやうな徳さんぢやァ無エや、このいけどう奴が』『ナニ此乞食めが』と氣速の達辰、片肌脱で立上るを。豐綱あわて、押止め『辰さん、まァお待な、此で喧嘩を初めちやァ直に私の名が出るわけだから止ておくんな』『ダッテ此野郎ァ生意氣な事を吐しやァがるから』『言つたら如何したんだイ』と徳太郎は懐中に片手を入れ、イザと云はば匕首を拔かんとこそは構へたれ、豐綱は達辰に取縋り『今は兎もあれ以前はお世話に成つた徳さん、手荒な事は止ておくれ』と庇ひしは激情ながらも四年ごし馴染かさねし名殘なり。斯る所へ箱廻しの源次は息急き歸り來りて此體を見て躊躇ひたり。豐綱は見るより『源どん御苦勞だつた、あれで追附いたかエ』『ヘイやつと陰拔番

頭を口説落して尊姐の仰しやつただけに附させて來やした』と懷中より質物の通と金子十兩とを取出して豐綱に渡し、達辰に會釋して臺所へと退いたり。豐綱は達辰が猶も頻りに拒めるを言慰めて十兩の金子を德太郎の前に出し『サァ德さん、手切の十兩受取てお呉なはい、後日の爲だから一札書てお呉なはい』と硯函と半紙を出したれば。德太郎は金子の員數を改めて腹卷の中に押込み一札認めて渡したり。豐綱は一見して火鉢の抽斗に入れ『餘計なお世話だが今上げたお金を無くさないで、其を資本に小商賣を始めなすつて、お家に歸參の稱ふやうになさいまし、私だつて貴君が好く成つたと云やァ嬉しいからねェ』『余だつて非氣で居るんだ、運に稱つて好くなりやァ又禮に來るよ』『ナァニ禮にやァ及びませんよ、そりやさうと貴君、今は何所に居なさるね』『橋場の駄菓子屋の二階に居るよ』『今日は直とお歸りなさいよ。途寄をしちやァ好事アごぜェせんによ』と注意れば。德太郎は『大きに有がたうごぜェました』と禮もそこ〳〵暮六の八幡鐘に送られて豐綱が家を立出でたり。

第三回

箱廻しの源次は勝手元より鹽笊を持出して『一昨日お出で』と言ひながら入口に鹽花を撒きて『姉さん御川が有つたら見番に居ますから……親方、御免なせェまし』と挨拶して出行かんとするを。豐綱は呼止め『源どん、少しばかりだが』と二朱金一ッ紙に包んで手渡しすれば。源次は押戴き一禮述べて出行きたり。達辰は豐綱が手切の金を德太郎に與へたるを見て、一ッには妬心より二ッには己の當の外れたるより痛く機嫌を損ねて『卿、なんだつて彼奴に金を遣つたんだィ詰ら無エぢやアねェか』『ダッテ仕方が無いワね、以前世話に成つた客衆だから』『フウ非で米練が殘つてるのか』『馬鹿ァお云ひな、誰があんな穢らしい男に……』『ヘン滿更さうでも有るめェぜ』『卿ぢやアあるまいし、其樣浮氣ッぽいのぢやァ無いよ』とツンと拗たる懷手『卿も知つての私の身體、かうして居ても氣が氣ぢや無いワ』と褄を襟に押入れて溜息ハッと吐たれば。達辰も此中にて金の無心も言出し難く、手を叉いて居たりしが『サァ夫だから卿が彼奴に十兩遣るのを余ァ故障を云つたのだ、エ、お綱、いつそのこと奪返して來やうか』『お止な、一旦遣つたお金だから……夫にあ、して置かないと五月蠅くつて仕やうが無いよ』『ナーニあんな奴アこッ酷く脅嚇し付て遣りやァ二度と來ねェもんだ……どう考エても彼奴に十兩取られたのァ馬鹿々々しいや』『打遣つてお置きな十兩位また何とか埋合が附だらうから』『口ぢやァ十兩だが經つた金だぜ、どうしても余ァ取返して來にや癪の虫が治らねェ』と立上れば。豐綱も止め兼て『取返すのは宜が手荒な事はお止よ』

そりやァ大丈夫だ』『往くと極りやお飯でも喰てからお出な』『ナーニ途で喰べるから宜イ』と言捨て達辰は急ぎ出行きたり。豐綱は跡にて獨り氣を揉み、如何に懇合へばとて、一旦取たる十兩を徳太郎が返すべき筈も無く、殊に以前の旦那風は何所へやら消失て、血に交れば赤うなる色も香も無いごろ附の悪徒じみた言語舉動、辰五郎とて性急の質、いかなる間違のあらんも知れず、コリヤ斯しては居られぬ所と、帶しめ直して我家を飛出し、近き邊の棧橋より小舟に乘りて急がせたり。此に又、徳太郎は十兩の金に有りつき造化よしと悅び、寺町を横に突切り森下を眞直に本所に出で中の郷より吾妻橋を渡りたるに、時刻は彼是戌刻頃なり、懷の暖なるまゝ、伊豆熊に入りて、鰻を燒かせ酒食に及びたり。達辰は此所まで徳太郎の跡を見え隱れに附て來りしが、無手にて彼奴に向ふは危險なりと思ひ、徳太郎が酒食の間に廣小路の露店にて、出刄庖丁の古物ながら研澄したるを買求め、手拭に卷きて懷に呑み吾妻橋の橋詰に彳みて徳太郎の出るを俟ち居たり。斯とも知らず徳太郎は十分に飲食して伊豆熊を出でたれば。達辰は其跡を附けて遂に汐入堤まで來りしが、人通りの絶えたるを見て後より『オイ徳太郎君ちよつと待ておくんなせェ』と聲を掛たり。徳太郎は振返ッて『私を呼んだのは誰だへ』『私でエす先き豐綱の家で逢た辰五郎さ』徳太郎は星明に透し見て『フウ成程、辰五郎君に逢エ無エが、其辰五郎君が何で私を呼止たのだ』『サア少し

卿に咄が有て此まで跡を附けて來たが、マア一通り聞てくんねェ』と蹲踞れば『ム、人ッ子一人通らねェ汐入堤、用があるなら咄しなせェ』と同じく傍に寄たるにぞ『サア用と云ふなァ外でも無エが、先きアノ豐綱が卿に渡した十兩の金、ありやァ少し間違エだから、お氣の毒だが改めて私に返しておくんなせェ』『ナニ十兩の金を返して呉ろと』『さうさ返してくんねェ、十兩と云ふ大金、卿に遣らう理が無エから』『ナニ理の無エと……理の無エ金をなぜ渡した』『そりやァ卿、女の事だ卿が否に凄味を見せてゆすり掛けた所から、肝の少せェ豐綱が恟りして出した金、云やァ强もて取た金外の者なら宜らうが、外貌は吝な野郎だが深川から大川筋ぢやァ些とは人に知られた達辰その女房の豐綱が昔の客衆に怒鳴られて現在辰の見る前で手切の金を取られたと世間にぱッと知れた日にやァ私も只の奴に成り世間へ面が出され無エ夫をあの時言立すりや御互エが恥の上塗さう思つて虫を押へ其場ぢやァ卿に花を持たせ此まで跡を附て來たのだ。其金が途中で減たも此方は承知殘つて有るだけ今此で私に返してお呉なせェ』と詞尻かに掛合へば、徳太郎はせゝら笑つて『ハゝハ辰君、なるほど卿は好漢だ小綱が私に出した手切、横合から貰はうとは餘り虫が好過るぜそんなに徳君は老碌しちやァ居ねェよ』『ぢやァ是程理を云つても汝、金を返さ無エな』『知れた事さどこに返す奴があるものか』と立掛るを。達辰すかさず胸ぐら取て『返さなきやァうせやァがれ』

とぐッと引寄る。其手を徳太郎しつかと押へて『巫山戯やがるな』と振放し一目散に逃出すを。逃しは遣らじと捕へつ、互に挑み爭ひしが、徳太郎は素より微力の男にて、其上酒に醉ひたれば達辰の強力に組伏られたり。組伏られて懐中の匕首、逆手に拔持て切付る。達辰、左の肩先に一寸ばかり薄手を負ひ『うぬ切やァがつたな』と云ふより早く腰に差たる出刄庖丁、振翳して突掛る。折しも出る伏待の春も朧の月の影、光りきらめく刄の電　互に引かず戰ひしが、達辰が烈しく突出す庖丁に胸板づぶと貫かれ、アッと叫びて徳太郎、其儘どうと倒れたり。

豐綱はまた山谷堀にて舟より下り、只一筋の急ぎ足、後れ馳に追來り此體見るより恟りして『辰さん、是だから私があれ程止めたのに、飛だ事を仕たぢやァ無いかね』と戰きながら言ひ寄れば。達辰は息を切つて『余も殺す氣ぢやァ無かつたが、此奴が拔て余を斬やがつたから』『オヤ卿も斬られたのかへ』『ナーニほんのかすり疵だ』と徳太郎が打倒れて呻き苦しめるを見て『斯なりや仕方が無エ、毒を喰はゞ皿までだ』と又もや庖丁取直し咽喉ぐさと突通せば全く息は絶たりけり。腹卷に手を差入れ九兩餘の金子を奪返し、いざ去らんと立上れば。豐綱ふと心附き『卿その庖丁をさうして置ては』『さうだ是から足が附ちやァ大變』と再び取上げ限なく照たる月明りに透し見て『ヤァ此の柄に押た焼印は山形にトの字、今の印し』『殺されたも山田屋徳太郎で今の家名』『ハテ變な事もあるものだなァ』とさすがの達辰、奇異の想をなしければ。豐綱身の毛もぞつと彌立て『もしや其恨が胎内の兒に祟りでも……』『ナンノ其な事があるもんか凡夫盛なれば祟りなしだ』と庖丁を川中に投入て『サァ往う』と豐綱を誘め勵まし遙に聞ゆる鐘の音に散りゆく花の夜の雪、あとに見なして逃たりけり。

翌朝に成りて汐入堤にては人殺ありとの大騒ぎ、殺されたるは山田屋徳太郎なりと知れて、徳次郎方にて死骸を引取りしが、殺したるは誰が所業とも知れざりけり。

其後、達辰は肩先の傷痛みて病づき、神經病と成りて狂ひ死したり。扨また豐綱は十月に至り女子の雙兒を産落したるに、助力を乞ふべき人も無ければ種々に難儀をしたる上、かの雙兒に少々宛の金を附て別々に緣切にて養女に遣し、おのれ身一つに成て稼ぎたれども、以前の樣には流行らず徒らに歳月を送りしが、天保十二年の改革に深川の遊所取潰の時、行方知れず成たりけり。

第四回

この數年以來は外國の關係より世の中の狀況いたく變り、江戸京都の兩府にては禁裏も幕府も一方ならぬ騒擾にて、事少し乖たらば今にも合戰の起りもすべき態なしりが大阪の漠然さはいつも變ら

ぬ太平無事、しかも安政五年の彌生中旬の黄昏すぎ、兩側の軒行燈のまばゆき中を行通ふ藝子娼妓の送り迎ひに忙はしき島の内の繁昌、賑ふ往來の其中に楢路屋につッと入來る一個の客人、仲居頭は見るより出迎へて『旦那はん宜うお出やす、サァお二階へ』と仲居小職に指圖して燭臺提げて先に立ちお世辭たら〳〵案内して座敷へこそは通しけれ。大事の客と見えて内儀續いて出來り燒昆布あられ引裂鰒、盃洗そへて持出し先お一ッと勸め『伊丹幸の文龍はんに知らせて遣んなはつたか……早うお仕ィな。夫から他の藝子はんは何時もの顔ぢやに、何をぐづ〳〵仕て居るのぢや……早う合狀書て遣らんかいな』と叱詞を云ふも客への饗應、繋の談話は嘘と眞のはぎ合せ『ホンニ〳〵文龍はんは旦那はんに首たけで、とんと性根はおまへんぜ』夫と云ふも彼妓はんも江戸ッ子で旦那はんも江戸のお方、御互に氣が合ふて居るゆゑだすやらう『とんとモウ皆が羨しがつての噂だて、島の内の評判でおますえ』エ、旦那はん藝子殺しはえらい罪だすぜ』と物に慣れたる仲居等が嬉しがらせの口先は實にも南地の名物なり。客はニッコと打笑みて『惚れたの張れたのと云ふ理ぢやァ無エが、水道の水を湯産に使つた文龍にやァ上方者は可愛さうに肌に合めエよ』と脂下つたる得意顔、そも此客は如何なる者ぞ江戸南新堀の豪家立田屋清吉と名乘りて堂島の米相場に手を出して一攫千金は愚か忽の間に一萬兩ばかりの利を得たるより築地の浪花屋に旅宿を轉じ、常に島の内に遊び楢路屋に來りて豪遊を極め、伊丹幸の店の文龍を一方ならず寵愛したりけり。

の藝子は當時有名の尤物ばかり中にも敵妓の文龍は年のころ二十餘り桃顔粧ひを凝さねど自からなる麗質は一座の名妓顔色なしと云ふ程の美人、生れは江戸にて十五の年に養母に連れられて大阪に來り、伊丹幸の店より舞子に出で次で藝子となりけるが、母は二三年跡に病死なし今は只だ一人の自前づとめ、年は若し縹緻は佳し殊に藝は江戸仕込の水ばなれ引手數多の流行妓、當時島の内にては五本の指に屈られたり。清吉が差したる杯をぐッと呑乾して内儀に差して『お内儀さん度々のお使で濟ませんでした、有やうは今日は藏屋敷のお客に連られて大西へ見物に往つて居たので……』と皆まで云はせず清吉は妬心半分調戯半分『璃珏の顔ばかり見て涎を流して居たのだらう、道理で來ようが遲いと思つた』止してお呉なさいよ、俳優衆なんかに血道を上げるやうな私ぢや有りませんよ、戯談も大抵にお仕なさいな、人の氣も知ら無いでさァ』と流し眼に清吉の方をジロリと見遣れば。並居る藝子は手を拍つて『文龍はん、こりやえらい言ぢや、旦那はん、どう仕てお呉やす播半の鼈ぐらゐぢや否だすぜ』と一座は涌くばかりの騒ぎ、序に旦那のお心意氣をと座敷に馴れたる老妓が先立、三味線の音〻を合せて或は二上り三下り絃歌に興をぞ添へにける。客は懐中より廿五兩包一つ取出し仲居頭に渡して囁けば。仲居頭は心得て座を立ちたり。頃て纒頭の紙包を丸盆に堆く

載せて出來り一座の藝子に引きければ、四邊を照す燭臺の光りは一入煌きたり。仲居等は兼て清吉の聲自慢を知るゆゑに『今夜は是非文龍さんの三味線で旦那はんの江戸唄を聞せてお呉やす、お世辭やおまへんが旦那はんの富本とやらが好エことなァ』と客をそらさぬ營業上手。清吉は微笑ながら『其樣に煽動て呉なさんな汗が出るやうだ』眞實の事だすワ』文龍『富本と云やァ旦那お綱さんを御存知で有りますかエ』お綱さんとはそりやァ藝者かね『ィヽエ藝者衆ぢや有りまへんが先頃から此地へ來て居る一中節の師匠で富本や端唄なんか旨いもので御座いますよ『さうかい江戸と聞きやァ懐かしい呼に遣んな『ちやァ直に使を遣りませう』と立掛るを。内儀は止めて『お綱はんなら私がさう云ふて遣りませう』と階下に下りて行き程遠からぬお綱が假住居へ人を走らせたり。此お綱と云ふは去年の秋、江戸より此地に來り都一綱と名乘れる一中節の師匠なり。年の頃は四十三四にて盛の花は疾に過ぎたれど面上なほ美人の名殘を留め別けて姿の意氣なるはそれ者の果とは知られたり。三絃取ては本藝の一中節は云ふに及ばず豐後長唄なにくれと無く巧者なるが、富本は特に勝れて達したれば江戸流行の島の内の藝子にてお綱に就て習ふ者多く文龍も亦その弟子の一人なり。此に不思議なるは此お綱と文龍とが眼鼻だちの似たる許か音聲迄も何所やら似たる所ありければ心着たる誰彼は奇異の思を爲したりけり。暫く有てお綱は迎の者と共に梯路屋に來り二階に上り次の間に手を突きて清吉に對て一禮なしけるが、何に感じたりけんハッとばかりに驚きて面の色唯ならず見たり。文龍は夫には心着ず『お師匠さん此方へ』と招じたり。清吉はお綱の容貌を守りて『サァ師匠、此方へお出なせェ』と云ふに。お綱は氣を靜め色を直して文龍の傍近くに坐し清吉が差たる杯を一寸會釋して戴き少し飲て下に置きたる手際にて天晴酒席に馴れたる古兵とは知られたり。やがて清吉はお綱の返杯を受けて師匠、何でも宜いから一ッ聞せてお呉なせェ『どう致しまして旦那のお耳に入れるやうな淨瑠璃ぢや御座いません、ホンの胡麻化しでございますよ』其樣な事は言ッこなしに仕ませうぜ、聞きやァお流儀は都だが富本も大層旨いさうだね、一體富本は此師流行る清元と違つて又良い所が有りますよ、私も實は富本が好で柳橋の太夫に一二段教はつた事が有ッたつけ『オヤさうで御座いますか、旦那のお聲なら富本は屹度良いに違ひ御座いません』所が大違エ、調子が外れて半間と來て居るから無しよ、夫よりや師匠一段聞してお呉なせェ『まづく宜けりやァ語りますが、お笑ひなすッちや可ませんよ……左樣サ一中節は陰氣で御座いますから富本に致しませう』と文龍が差出したる三絃を取上けて調子を合せながら『何が宜うございませう何でも宜から師匠の得意をホヽヽ得意なんか御座いませんがそれぢやァ此節文龍さんが稽古を仕てお居の淺間を少しばかり申上げませう』と語り出したる音曲の絶妙なる尋常の技倆に非ざれば清

吉を初め一座の藝子、此家の内儀中居小職に至るまで感に堪へ曲畢りて一同手を拍つて賞賛へ暫しは鳴も止ざりけり。お綱は三味線を下に置きて『さぞお聞辛ふ御座いましたらう』と挨拶すれば。清吉は深く悅びて『師匠恐入つた、風に柳から寐室の障子の中所なんか家元だッてあゝは往ないぜェ、文娘、實に面白かつたなァ』と手厚く經頭を與へ盃を差したりけり。抑このお綱を誰だと云ふに、是ぞ發端に記せる深川にて一時花を咲せたる富本豐綱が成の果にてぞ有りける

お綱は此清吉を見るに昔容さながら其昔おのれが曾て契りたる山田屋德太郎に生寫し汐入堤にて殺されし人の再び此世に顯はれ來りしかと、ゾッとして思はず身の毛も戰慄たりけるが清吉に向ひて『旦那、誠に失禮で御座いますが江戸のお家は那邊で居らつしやいますか』『家は南新堀で立田屋と云ふ米渡世でェす』『夫ぢや鎌倉河岸に山田屋さんと云ふ米屋がございましたのを御存知で居らつしやいませうね、今だに御繁昌でございますか』『エ、山田屋は繁昌して居ますよ。斯云ふ私も其山田屋の由緣の者だが尊姐又どうして山田屋を知て居なさるかい』『實は久しい以前私の稽古友達で藝者に出て居た娘が山田屋德太郎君と仰しやるお方のお世話に成つて居ましたので噂に聞て居まりしたから』と云へば。清吉は膝押進めて『其德太郎と云つたのは私の親父さ』と我から明せし身の素性お綱は心に慈きながら悟られまじと氣色を謹み『オヤ〳〵夫ぢや貴君は山田屋さんの若旦那で居らつしやいまするか『サア一體ならば私は山田屋を相續するのが當然だが、些と理が有つて分家の叔父が跡を續いだのさ、所がマア聞きなせェ其叔父の婦人が可ねェ女で何かに附けて私を邪魔にし丁稚同樣に追使ひ出て行けがしの酷い扱ひ、餘りの事に家を飛出し親類に引取られ今ぢやァ一本立の商人南新堀で立田屋清吉と人に知られた米屋でェす』と誇り顏にて語りたり。お綱は清吉の身上を聞きて益〻不氣味に成りたれば、今夜は生憎他に餘儀なき座敷の約束ある由を述べて暇を告げそこそこに歸りたり。清吉は夜更くるまで騷ぎつ唄ひつして有りけるが、其夜は例の如く文龍と倶に柳路屋の一間にて仇なる夢をぞ結びたる。抑〻此清吉が南新堀の立田屋と名乘りたるは一時を粧へる虛言なり。彼が父德太郎が修身放蕩にて家出を爲したる後に弟の德次郎分家より歸りて其跡を相續し、德之助（即ち清吉の實名）が兄の嫡子たるを以て大切に育て上たるに、此德之助親に似たる放蕩ものにて十五六歲の頃より早くも酒色の兩道に迷ひ入り、果は賭博を好み良からぬ交りに身を持崩し、德次郎はじめ一家親類の意見を用ひず遊蕩惰弱を極めたりければ。德次郎も持て餘して遂に山田屋を放逐したりけり。夫より德之助は清吉と名を改め或は博徒の群に入り或は遊客の中に交り流れ〳〵て大阪に來り米相場に手を出し思はずも大金を得て斯くは俄大盡と成りて全盛を張りたるなり。

第五回

島の内なる相生橋の通り北詰の路次を入りて三軒目、手狹ながら小綺麗なる住居、下は三畳に六畳二階は四畳半、是ぞ島之内の流行妓文龍の住居、文龍は漸く四ッ半頃に（午前十一時）寐床を起出てしどけ無き寐衣の儘にて楊枝を使ひ面を洗ひ髮の亂を掻上げて長鉢火の前に立膝して坐り煙草一吹の間に下女は膳拵へをして持來りければ文龍は食事に及んだり。

斯る所に格子戸をガラリと開けて『文姐モウ起たかい』と音なひて入來れるは都一綱のお綱なり。文龍は夫と見て『お師匠さんサア此方へ……お常や其所の座蒲團を持てお出で……そしてお膳をお下げな』お綱は文龍の向ふに坐りて『今御膳が濟だのかい』『ハア昨夜歸りが遲かつたので、ついつい今朝は寐過しましたよ』『遲くならなくつてもお姫樣のお目覺はいつもお昼時分ぢや無いか』『ホヽヽヽ、お師匠さん平常はまさか斯う遲くはありませんよ』『ハヽヽヽ、辯疏を仕なくつても宜ワね。時に文姐、一昨日の晩は有がたう』『アラお師匠さん、お禮なんか云つちや困りますね』と云ひつつ茶を汲んで出し『酷いお茶ですよ』『お構ひで無いよ……そりやさうと文姐あの立田屋さんと云ふお客は舊いお馴染かエ』『イヽエつい此間ッから愛顧に成つて居るのですよ』『爲に成るだらうね』『ハァ切離れは良やうですが』『さうかエ、だがの旦那だと云ふ觸込ださうだが油斷は出來ないよ』『そりやさうでエすとも誰があんな人に深入する奴がありますものか、水腐いやうだがつい一ト通りで取て居るのでありますよ』『そんなら宜が氣を許しちやァ可ないよ、何も私が水を指すのぢやァ無いが私が見た所ぢや豪家の旦那衆らしく無いね、當節は喰せ者が隨分有るから好加減に切上げてお了ひなあ、云ふお客と親類附合でも仕樣ものなら、きつと酷い目に會ふのが落だよ』と說勸むれば。文龍も默頭きて『私も然う思つて居ますのさ、今の所は堂島で儲かつた勢で爲にも少しやァ成りますが、どうで一夜大盡一夜乞食と云ふのは相場師、當にならぬは百も承知、經つた物を取つたら宜い所で斷にして樽ひ附け無い私の了見』と腹を明した文龍が色氣も無き無情の詞に。お綱は安堵の顏附して『卿の腹がさうしつかり仕て居りや剛氣さ、けれど卿も根が江戸ッ兒だから意氣張づくでは惚ても居ないお客に入揚げとんだ馬鹿を見るだらうと餘計な心配、大きなお世話だと卿は思ふだらうが其所が同じ江戸の生れ、流れ〳〵て御互に知らぬ他國の大阪で朝夕かうして往來するのも深い因緣、それで私が今の意見わるく思つてお呉で無いよ』『何で惡く思ひませう一昨々年おッ母さんが死でからは何方を見ても他人の中、心細い私の身の上、此後ともお師匠さん相談相手に成つてお呉なさいましよ』『たとへ嘘でも卿が

さう云つて呉りやァ私も張合が有るよ……時に文姐、何時ぞは聞かうと思つて居たのだが卿はどうしてマァ此大阪へは來なすつたのだェ』『サァ夫には段々理のある事、元私は深川生れ藥の上から養母に育てられ十三の年に檜物町からお酌に出て足掛け三年稼いで居る中、親父は病氣で歿なつて跡にはお袋とたつた二人、お袋が悪い奴に引掛つて家を仕舞ひ少しの知音をたよつて此大阪へ來たのは私が十五の年、伊丹幸の店から今の名で舞子で出たのが其年の暮それから斯やつて居るものの別に便りも無き身體。暑さ寒さにや江戸が戀しう御座いますよ』『さうかねェ卿なんぞはモウ大阪の川水が身に浸て此地の方が宜だらうに』『だつてお師匠さん私が眞實の母さんが今でも江戸に居るだらうと思ふと戀しう御座いまさァね』と身の上談に聲打濕りぬ

お綱は文龍が深川の生れと聞くより若しやと思ひて膝押進め『可笑な事を聞くやうだが卿若や鴛鴦裂の守袋の中に深川八幡さまと洲崎辨天さまのお札が入つて居るのを持つて居や仕ないかェ』と尋ぬる詞に文龍は恂りして『ハィ何にも其守袋は眞實の母の形見ゆゑ肌身離さず持つて居ますが夫をどうしてお師匠さんが……』『サァ知て居る理がある其お守の中に臍の緒が入て有て其包み紙に天保十年己亥十月七日出生の女子深川仲町豊綱娘ふみとかひでとか書ては無かえ』『ハァ其通りふみと書て御座いますが、さう云ふ稀しい事までも……』『知らいで成らうか私ァ卿の母だもの』

『ェ、生の母ぢやと仰つしやいますか、夫には何ぞ慥かな證據が……』『オ、其證據は此守袋』と云ひつ、お綱は遽たゞしく守袋を取出して『サァ卿の持つて居る守袋を出して御覽な、同じ裂で拵へたのが母子の證據』と詞忙しく云ひければ、文龍も肌の守を取出し較べて見れば寸分違はぬ鴛鴦裂、疑念は朝日に消行く霜『母さんか』『オ、娘』と眞身の母子が名乘合ひ互に手に手を取合ひて涙ぞ眞の情なる。兩人は漸くに涙を拭ひて文龍『眞實の母さんに名乘合ひ此樣嬉しい事はありません、さうして私のお父さんは如何したでせう』と問へば。お綱は遽辰の子と云ふ事を押隱して『卿は或る藩邸のお留主居のお胤だが理あつてお名前だけは今はまだ明されぬ無いが其時生だは女子の孖同じ裂の守袋に同じお札と同じ書付それには秀と書て置たが卿の姉妹、其後別々に養子に遣る時後の證據と持たせてやつた守袋』『そんなら私は孖の娘で外に姉妹がありますかねェ。シテ其お秀と云ふ娘に慈母は逢ひましたか』『ィ、ャ其お秀にもまだ逢はぬがコリャ江戸に居るらしい』卿も是から氣を附て俱々搜して見ると仕よう、夫に附ても守袋が證據に成て親子の名乘をする事が芝居の筋にもよく有から私が其時思ひ附て揃へた此守袋』『それが證據で逢つたとは八幡さまや辨天さまのお引合有がたう御座りまする』と又もや涙に暮れけるが『其お秀姐にも永い月日の中には廻り合ふ事もあるでせう。乃で母さん斯うして母子と云ふことが知れたからには一緒に居ようぢや有り

ませんか』『だがねエ卿の家へ一緒に居ちや卿が困るだらうから』『ナァニ母さんさへ斯な狹い所で構はぬけりや私の方は何にも困る事は有りません』『イエ狹いのは構はぬいよ』『夫ぢや引越しておいでなさい私も其方が心丈夫で宜いから』と說勸めたれば。お綱は素より望む所なり即座に談を極て我家に歸り衣類手道具を取纏めて其日の吉日なるを幸ひに文龍の家に引移り母子同居したりけり。

文龍はこの數年大阪の水に浸みて情は賣れど心まで賣らぬが藝子の主義と心得、其詞は綿の如く溫にして其心は氷の如く冷かなるが情客に接する一大秘訣と覺れる歌妓なりければ母の諫めに從ひて是より清吉に對して漸々に疎外の念を懷き待遇また舊日の如くならず。斯れば清吉も亦面白からず思ひて平辰の奈良菊とて文龍よりは一ッ年下の藝子をば寵愛して文龍に是見よがしの豪遊を極めたり。文龍は今は取る程の金は取りつ我から見限りたる清吉なれば更に惜しとは思はず他の客に身を任せて清吉の方は顧ざりき。然るに清吉は此夏初めて日本に流行してコロリと名附たりける虎拉刺に罹りて既に死ぬべかりけるを不思議に助かりたれど此年の七月よりして清吉の手口は漸次に逆流に變じて損の上の損となり八月九月との三月間に全く儲けたる金を失ふのみならず負債山の如くに嵩みて十月に至れば朝夕の小遣にさへ困り果、知人と云ふ知人には不義理の借金を爲し今は一朱の

融通も成兼ぬるやうになり、十月の寒空に向ひて袷一枚の境界、恥も外聞も棄て同月十九日の午後道頓堀の梅の井と云ふ小茶屋に來り小女を使にして文龍を呼出したり。文龍は清吉なりとは心附かず使に來りし小女に何方だエと問けど小女は清吉に言含められたる旨あれば『ついぞ來やはつたことのおまへん御方だす』とばかりにて名を明さず。文龍は小首を傾けて有りしが兎に角往けば分ると小女を歸して跡より梅の井へ出向きたり。此梅の井は文龍の如き有名の藝子が常に出入りする茶屋ならねば、内儀に内證を聞くほどの懇意ならず、一通りの挨拶して二階に上れば立田屋清吉たゞ一人火鉢に兩手を差伸べて見すぼらしげに坐り居たり這は悪しかりしと思へども今更せん術無ければ笑顔を作りて清吉の向ふに坐し『旦那マァ暫くで御座いましたねエ』『さうさ久しく逢なかつたが相變らず全盛ださうだね』『ナァニ近頃ぢや蹉ばり可ませんよ。さうして旦那は今何方に』『私かエ、私は何所と極ずに知己の家を泊り歩いて居るのだが、此夏のコロリで酷い目に遇つたよ』『オヤマァそりや飛だ事で御座いましたねエ……』と文龍はワざと打慄ける態にて挨拶は程よく仕たれど實は其當座疾も櫛路屋にて聞知り居たるなり。清吉は溜息を吐きて『既の事に死ぬる所で有つたのを不思議に助かつて命だけは取留たもの、夫から後は手口が悪く僅か三月の間に二萬兩ばかり損をして今ぢやァ此ざま卿に會ふのも面目ねエ譯だ』と悄々として語りけり。文龍は是を聞きど

うせ末は斯だらう早く見極めを附てさらばに仕たのは我ながら上出來で有つたと思ふ心を色には出さず表面ばかりは信切らしく『實に御氣の毒な譯で御座いますねエ。併し旦那此方にさうしてお居なさるよりは早く江戸へお歸りなすつちやどうで御座いますね』『サァ私も歸りたいとは思つて居るが江戸からも是まで度々大金を取寄せた揚句今更路銀を寄越せと云つて遣つても店ぢやァ余を疑ぐつて居る樣子だから又かと思つて容易には寄越すめエし、と云つて此寒空に向つて袷一枚で震へては猶居られ無いし實に途方に暮て居るのだ』と眞實虛僞うち交て嘆きたり。

第六回

文龍は平氣にて敢て別に氣の毒とも思はず清吉は斯と見て談に一歩を進めて『乃で卿に折入つて賴みと云ふのは今云つた江戸へ歸る路銀だけ都合して貰ひ度のだ、其替り江戸へ着くと利に利を附けて飛脚で金を屆けるから只望是だけ聞て呉な』と賴めば。文龍は澁面作りて『そりや御愛顧に成つた旦那の事ですから出來さへすれば都合をして上げたいは山々ですが、今ぢや私も母さんを引取て居るので暮しに逐はれて七所借一兩は愚一分の都合も出來ぬ內幕借金づくめの大世話場、旦那の御難儀はお察し申して居ますが右の理ゆる私の手で路銀の算段は迚も附きませんよ、夫よりは旦那、

奈良菊さんにお咄しを爲さいましな』と突放したる苦小舟の流れの身にも商賣敵さては中途で奈良菊に乘替へたるに意地を持ち斯くは强面挨拶に及びたるなと思ひ違へて清吉は『彼事に附ちやァ種々卿に咄が有るのだ』と言掛るを。文龍は遮つて『今に成つて旦那の言譯は聞きたう御座いませんよ、奈良菊さんと旦那との中は島の內で知らない者は無いほどで、お蔭さまで私も宜い恥を此島で掻ましたよ、それだもの幾ら旦那のお賴でも今更奈良菊さんを差置て私がどうする理にも往ないぢやァありませんか。旦那の方でも又私に斯云ふ咄しをお仕なさるのは筋が違つてるかと思ひますね、夫でも出來る事なら如何にか仕てお上げ申度が今申した樣な理ですから惡しからず……』と體よく斷りてハヤ歸り支度。清吉は文龍の心底を漸く悟つて不實を怒りたれども猶色に出さず。文龍は煙草入を帶の間に入れて『旦那まことに濟ませんが今日は見山屋にお約束が有りますから御免なさいましよ』と起上らんとす。清吉は手を伸して文龍の袂を控へて『一寸待つて呉な、都合が出來ねエと只だ一口に云つて了やァ夫迄だが、それぢやァ卿餘り不實だらうぜ。つい此間まで卿の爲に成つて遣つたをまさか卿も忘れは仕めエ夫を思やァいま余が僅な金に差支へ手を突て賴んで居るのを聞ずに其儘歸ッては卿も少しやァ冥理が惡からうぜ。本艘甲の櫛笄金足つけた珊瑚の釵それ一ッ持たせて遣りやァ右から左に間に合ふ事それ位の遣引は卿も知つて居さうなものだが……』と

云ふに。文龍は嘲笑ひて『そりや年中逃繰して居るから此欽を持たして遣りや幾許に附くと云ふ事まで知つて居ますよ。だが旦那よく物を思つても御覽なさい、頭の物や若類まで質はち置て貴君に貢ぐ夫ほど私しやァ貴君に義理は有りませんよ』と愛想も無く言放てば。清吉は堪らへ〳〵し憤怒を面に顯はして『ナニ』と云ひさま身を起せば。文龍は聲を上げて『アレ誰ぞ來て下さい』と叫びたり。階下にては何事ならんと驚きて亭主を先に内儀女中折節來合せたる誰彼まで駈上りて亭主『マァどう仕やはッたんだす』と文龍を圍ひて詞急しく尋ねたり。文龍は諸人の見る前もし清吉を悪脚の如くに思ひ做して言觸されては稼業の妨なりと思ひければ『親方、聞てお呉なさいよ、此方は半年ばかり前に時をり呼んで貰ふたお客、今日私を此へ呼んで金を貸せと無理難題、只のお客に藝子が金を貸す譯が無いから斷わつたら氣相變へて私を毆りさうな權幕につい大聲を上げて皆さんを騒がしたのは誠に濟みません』と會釋に及べば内儀『マァ何事も無うて宜うおました』と清吉に向ひて『貴君も悪い洒落だすェ何樣に流行る藝子はんでも根が浮た稼業だすさかいお金の有らう筈がおまへん、止におしやす、常談にも寄けりや』と花を持たして宥むれど、清吉は逆上なして耳に留ず『恩を知らねェ畜生め何所を推せば其樣音が出るッ』『恩だの義理だのと餘り大口を利ておよで無いよ、知ら無い人が聞と外聞が悪う御座いますよ、貴君だつてお金を只出した理ぢや無し私だつて只貰つた理ぢや無い、勤の中の勤め世辭それを眞に受け情男がつて私に無心を吹掛やうとは餘り虫の好すぎた話、これでも伊丹幸の文龍ですよ男旦が仕やァしまいし馬鹿げるぢやァ有りませんか』と壁み掛ての悪口に。清吉は色蒼ざめて身震ひなし、おのれ其舌の根をと飛掛らんとしたりしを。人々制し止むれば内儀はまた文龍が手を取つて急ぎ階下に連ゆきたり。文龍は斯る所に長居せば悪かりなんと挨拶さへ匆々に梅の井を立出たり。清吉は諸人の前にて文龍に罵られて恥辱を受け無念骨髓に徹しければ騒の紛れに梅の井の臺所にて出刃庖丁を盗みとり手拭にて卷きて懐中に隠し入れ其所を立出たるはハヤ夕暮頃なり、ぶらぶらと道頓堀に來りて安料理屋に入り酒食を爲し其所を出で、寄席に入り夜の更ゆくを待つたりけり。

其夜九ッ半頃(午前一時)清吉は文龍の家に往きて内の樣子を窺ひたるに下女のみにて文龍母子は未だ歸らず、依て清吉は文龍の家と隣家との間に潜みて今や歸ると待居たり。斯とも知らず文龍は着物の褄を高く取り酒に醉ふて歸り來たり入口の戸を開けて『まだ母さんは歸ら無いかェ』と云ひつつ入る後より清吉ずッと續いて入り片手を伸して文龍が襟上をグッと摑みて引倒し『先刻の悪口覺えて居るだらう、よくも恥を掻せたなァ』と云ひざま出刃庖丁を振上げて只一突にと突きけるが手元狂ひて右の頬耳端かけて切下げたり。アッと叫びて跳返り逃出す文龍。すかさず清吉追蒐ておの

れ逃して成るべきかと行燈の周圍を追廻す。下女は驚きて臺所の流しの隅に身を潜め念佛申して震へ居たり。文龍は彼方此方に身を飜し又を潜りて逃まどふ機に我と我裾を踏みて前へ倒れたる脊に清吉仲掛り頂より力に任せて突通せば文龍は手足を悶躁きて死したりけり。清吉は出刄庖丁を傍に投棄て急ぎ戸外に飛出す路次口、お綱の歸りに出逢ひて身を交せば。お綱は怪しと持つたる提灯突附てオヤと云ふ間に清吉はお綱が提灯掛き落して逃去つたり。お綱は提灯を拾ひ上げ心ならずも急ぎ足にて我家に歸り見れば上り口に血汐の痕ハッと驚き駈入り見れば四邊は血汐の唐紅、影さへ薄き行燈の此方に仆れし娘の屍盛りの花の顏は龍田の紅葉に染なして霜をも待たで落散て今は果なき修羅の業見るも無慙の最期なり。お綱は餘りの不意に打愕き涙さへ出ざりしが、此騒動に近所合壁の人々も集り來り下女が現場を見たる樣と云ひ、またお綱が路次にて見たる樣にても下手人は清吉なりと知れたるが、お綱は死骸の傍に打捨ありける出刄庖丁を取上げて能く〳〵見れば不思議や柄には今の烙印、二十年前に山田屋德太郎を殺害せし時の庖丁にも今の印ありたるが、今是にも其と同じ印、ことにカノ清吉は山田屋德太郎の實子なれば其手を借り我娘を殺させたるか、恐しや若も殺せし其者は清吉なりと言立てなば我身の舊惡露顯の恐れと、出刄庖丁を取隱し路次にて見たる事をさへ口外せざりければ、文龍を殺せる者を詮議の證據も自から湮滅したりけり。夜明けて後町奉行所に屆出で手綱の檢視を受け其次の日文龍を葬りたり。其當座島の内はじめ大阪市中にては文龍殺しの噂高くなりて清吉が梅の井にて恥を洒したる遺恨の殺害と言ふ說さへ頻りに起りしが是と云ふべき證據も無く、其上に清吉も大阪に姿を見せざりければ噂も自づと止みにけり、お綱は娘に別れ心細き旅の空いつまで住むべき土地ならねば其年の暮に所有品を賣拂ひ金になして首に掛け又もや江戸に歸りたり。

第七回

深川の岡場所とり潰されて十七年の星霜を經たれば今は唯だ其噂の遺れるのみ獨りカノ淡粧瀟洒を極めたる歌妓の遺風のみは猶柳橋の藝者に遺り誰が言初めけん春風に濯ふ柳と評しけるも眞に道理なり、其中にも別けて一二を爭ふ流行妓伊勢屋の久吉と云へるは齡は二十一、明けやらぬ外山の櫻か黄昏の夕顏か洗髪の島田に水道の水で磨き上げ透徹るやうな白粉氣なき素顏、雪の如き手で左褄を取り立ちたる姿は心も詞も及び無き美人、藝は二の町なれども調子の良きことは第一等、如才なき待遇ぶりの中に自と艶ありて人を迷はす魔力を備へ、お酌より一本になりて以來曳手あまたにて霜枯知らぬ流行妓、其替り浮氣に掛けては並ぶ者なき多情の質にて俳優力士落語家義太夫かたり有

らゆる藝人を取替へ引かへ情夫にして隱れ遊びに憂身を窶したり。此秋以來久吉を贔屓にして屢〻酒樓へ呼び心ありげに振舞へる大盡客は日本橋横町の豪家濱村篤之丞とて大名へ出入のお金川達、年は漸く二十五六なれども權門勢家を相手の交際に年中狹斜の巷に遊び飛鳥をも落す程の勢ひ、今日もお側去らずの都可中、古池庵蛙鳴を幣間に連れて代地の川長で淺酌、久吉が外の座敷を貰つて來るまでの繋ぎに老妓を相手に一中節の低唱、可中が滑稽に座興を添へ笑聲もいとゞ高かりける所に久吉は稍〻酒氣を帶び會釋をなして入來れば可中透さず『遲い〳〵遲刻召されたなァ』と誰が聲色とも知れず芝居がゝりにて言掛れば久吉は『ホヽヽヽホ可中さんお止よ女中衆が氣遣ひだと思はァね』『デモ貴孃の素振が變だから一本參つて見たのよ』『常談お言で無いよそんな浮氣な藝者ぢや無いよ、ネエ宗匠……』『など、乙に色目を遣ふぢやァ無いか、コりャァ宗匠と怪しいわい』『人聞の惡い可中さん大概におしよ、夫程男に飢饉は仕ませんよ』『是は御挨拶だね、私だつて吉原へ往けば羽織かくして袖引止めてと云ふ色が有るでけす、然う見くびつたものではけェせん』『宗匠の惚氣も久しいものだが遂しか遊びに往つて持てた例が無いから妙だ』『イヤ旦那まで裏切は恨みでけす、兎も角、久吉さん一ッ獻じよう』「ハヽヽハ宗匠も中々如才ないね』笑ひ興じて杯の獻酬に篤之丞も思はず醉を催したり。頃しも仲の秋の十日の月さし昇りて大川の景色まことに面白かり

ければ篤之丞は『是から吉川で船を艤へさせ首尾の松で月見を仕ようぜ皆一同に來るが宜い』と云ふに一同『それは結構イザ御供をいたしませう』と騷めき立ちて久吉も俱に調子を合せたれば、篤之丞は急ぎ船の支度をさせ一同を引從へて代地の河岸より乘船したり

大川の流に浮ぶ月の影えも言はれぬ夜景に興を催していつか御藏下を打過ぎ東橋をも越え遂に山谷堀の大津屋となん云へる船宿に上りて再び酒を呼び夜の更るを知らでありぬ。可中等は兼て篤之丞が意中を悟れる事なれば密に久吉に向ひて比翼枕に巫山の夢露の情の語らひを聽したまはんやと口說たれば久吉も爲になる客ではあり氣前はよし男振さへ憎からぬ篤之丞の事なれば爭で否やのあるべき兩人が計ふまゝに打解けて篤之丞に身をまかせたり

大津屋の樓上に一夜を明し翌日は更に大七へ河岸を替へて堀の小萬お玉に春富士紫玉閻魔の金八等を呼びて藝盡しの遊興に日を暮しけるが濱村の本宅より手代のもの跡を追ひて尋來り急にお屋敷の御用出來いたしたれば一旦お歸り下されよとの口上に篤之丞は惜しき名殘を後にして駕を飛ばせて歸りたり

久吉は佐波の妙藥にて甘く箱屋をくるめ歸り路の夕まぐれ猿若町の高橋屋に立寄れば兼て知りたる中とて女主お梅は心得て『オヤ久ちやん大層お精が出るね……直に呼びに遣るから奥へお出な』と

奥の小座敷に久吉を案内し若者に何か吩咐て使に遣りたり久吉はお梅を相手に煙草を吹しながら四方山の雑談して笑ひ居たるが使は歸りて『幕に成つたら直にお出なせエます』との口上に久吉は喜色面に顯はれて待て居たるに程も無く入來れるは色白でノッペリした眉毛の無い男、かつら下に髪を結び幅廣の帶に派手やかな京お召の單物の八口明たるを裾長にぞろりと着て女とも見まがふ姿は云はでも知れた女形の俳優、久吉の顔を流目に見てお梅に會釋し設けの座に就けば女主は煙草を吸付けて出し『大層來るぢやありませんか』『ヱ、好鹽梅です』『お祭りでも出來ますかエ』『三階ですると云ふ話です』『また責められるのでせうねエ、三階のお祭りも久しいものさねエ……久ちやん今にお跳が參りますから御緩りと……』と氣を利して座をぞ外したる。男は久吉の傍に寄て『昨夜卿へお客と一緒で堀の大津屋に泊たらう』『能く知つてるねエ』『そりや蛇の道はへびだもの浮氣をすると直に知れるよ』『浮氣なんかと思はれちや埋ら無いねエ昨夜の樣に辛い思ひをして否なお客の御機嫌を取るのは誰故だと卿お思ひだえ』『サア誰ゆゑだか知ら無いが聞て見りやア餘まり好心持も仕ないね』『そりやアさうだらうよ、いくら卿が不人情だつて少しやア人間らしい處があるだらうからね』『マア好く聞ておくれよ此頃ぢやア家でも卿と怪しいと氣取たと見えて否に喧ましい事を言て困り切るよ、夫と云ふのも持て來るものを持て來いと云ふのだから夫が讀て見りや

ア私だつて主人に口を利せ無い樣にする事はせざア成るまいぢやア無いか。だから私が否な思ひをするのもぐるりと廻つて見りや卿ゆゑ少しやア可愛想だと卿に思つて貰はにやア本統に引合は無いワ』『成ほどさう言はれて見りやア一言も無いが聞ば聞腹で悔しいと思ふのも無理ぢやア有まいよ……所で昨夜は泊込で卿しつかり實入に成たらうね』『實入に成たらうと、戯談お言で無いよ。場末の寐猫藝者ぢや有まいし血の出るほど心の中では欲いと思つても初めて逢た時にお金なんか取れるものかね取卷から茶屋衆への渡りに自腹を切るのは當然さ』『さうさね其所が柳橋の藝者の位だから骨が折れるね……併し夫ぢやア私が此間頼んだ事も……』『そりやア家から持て來たよ』と懸守の中より二歩金を十個ほど出して『サア此に五兩あるから足まいが是で我慢おしな』と手に渡したり男は金を受取り滿面に笑を含みて「こりやア有がたい夫ぢやア久ちやんお氣の毒だが少しの間お借り申ますぜ』と己が紙入に收むれば『お借り申ますたア他人じみて水臭いね、卿そのお金を私に返へす氣かえ』『サアさう云れちやア半句も出無いが……夫ぢや久公貰つたぜ……時に卿今夜はゆるりと泊つて可のか』『可ないよ家の婆アが喧ましいから四ッ(午後十時)迄にやア歸らにやア成ら無いワ』『そいつァ困るね』と言つゝ久吉が手を取て引寄せたり抑この女形は嵐仙蔣とて元は名古屋出の旅役者、旅又旅を渡り歩き藝は未熟なれども面容の良と藝

度胸のあるので舞臺を胡魔化し烏無き里の立女優その上に見掛に似合はぬ白無垢鐵火で盆席に向つては人も恐る、羽織ごろ突それに女に掛ては不思議の達者もの到る處で婦人を惱ませ毒を流したる大變者、先年猿若町の中通りの俳優等が盆替りを打上げて東海道へ旅稼ぎに往きたる時は仙壽は一座を成て、あはれ役者冥理には大江戸の檜舞臺を一度でも踏で見度と重立ちたる者に賴込み同道して江戸へ來り初めて歌舞伎芝居へ出勤なしたり、素より如才なき質なれば只管座頭へ摺込み暫時の間に可なりの地位に昇進し目に立つ役を勤むるやうになりたれば藝は二の次、面の良のが評判で女見物は大騷ぎをなし言寄る女の浮氣者も多かりけり。久吉もいつか仙壽に見惚て情を通じ末は夫婦の約束まで爲し稼いだ金が有れば有たけ仙壽に入上げて浮かれ遊びしは愚にも亦淺ましかりけり

第八回

却說濱村篤之丞は久吉に仙壽と云ふ虫ありとは露知らず大津屋にて仇なる枕に望を達してより更に一層熱度を增し三日に上げず久吉を呼び、しめやかに遊びけるが信切で溫和くて金遣ひが綺麗で氣障ッ氣の無い旦那なれば久吉に取りては此上なき金匣なり。久吉つく〴〵思ひけるは是程のお客に贔屓に成るは藝者一代まんが稀、風浪の好中に甘く口說て自前になり夫から先は羽を延して仕度こ

とをするのが一生の得と早くも思案を定め濱村が機嫌の好折を窺ひて拖藝者の辛き身の上を喞ち此程は叩き分とは成たれども却て丸抱よりも苦しき節ありなんど、其實例を擧て口說き小夜の寐覺の睦語の傷にておはさずば今の苦悲を助け自前になして玉はれよ、さしたる大金の入る事にても候はず微やかなる家を求め自前の披露を致すとて旦那より御覽あれば纔の賀金我身に取ては此上なきお慈悲、本の露末の半、生涯御恩にこそ被候はめと泣ながらに請ければ濱村は屬魂惚たる女ではあり金に不自由なき豪家の旦那そは最易き事なりと承知してければ久吉は有がたし忝なし案じるより生むは安いと心に諾き悅びたり

其年も暮て明くれば安政六年、正月中は濱村も年賀廻りに忙しく久吉が自前の話も無かりしが二月に入りて吉川の亭主吉兵衛、濱村の委託により伊勢屋へ交渉したり。伊勢屋では一枚看板の久吉、叩分を七三にしても今少し稼いで貰ひたき望なれども當人の爲になる良き話、否やは申さず貸金の殘り其他呉服屋小間物屋等の諸拂立替に二百兩賜はらば此方は可しとの挨拶を吉兵衛より濱村に話したれば濱村は二百兩の外に五十兩は自前披露の入費なりと吉兵衛に預け猶その他に家屋諸道具の代として百兩を與へ殘る方なく行屆きたる手當に久吉は大に悅び急に家を搜すやら配り物を誂へるやら心忙しき儘に仙壽との密會も少し遠のきたり。幸ひ同朋町に藝者の住ひたる明家のあるを買受

け修繕造作をなし諸道具を買入れ二月十七日は久吉に最上吉日なればとて其家に引移り新伊勢屋と記したる提灯を下げ花やかに自前の披露をぞなしたる

今までは叩分にもせよ抱の身分、主人が厳しいので持たが病の浮氣も少しは慎みて居たりけるが我天下の自前となりては旦那の外に誰も恐るゝ者なしと心の横着に憚りも無き仙蔣との密會はては我家へ引込で痴態を盡す快樂は箱屋を薙て束の間の果なき逢瀬を娛みし抱の時に幾層倍、愈〻熱くなるまゝに仙蔣が足も自から繁き人目に時折觸れ忽ち土地の噂となり誰知らぬ者なかりしが知らぬは濱村一人なり

一夜仙蔣は久吉の家に泊り鴛鴦の衾に枕を双べ娛しき夢に寐過して明る朝豊前の豆腐屋が來る頃に起出で寐衣姿のしどけ無き形にて取膳の差向ひ朝食の最中に表より入來りしは旦那の濱村、供をも連ず只一人つッと通り仙蔣を尻目に懸けて其儘二階に上りたり但し寐床は既に下女が上げたる後なれば是ばかりは責てもの事なりしが拔差ならぬは昨夜脱捨たる仙蔣が衣服。濱村は益〻怒氣の彌增して樣こそあらめと坐りたり。久吉はどきつく胸を自から抑へ帶引締ながら思案を定め仙蔣に呼き示して二階に上り何氣なき體にて常の如くに挨拶すれば濱村の聲鋭く『下に居たのは何處の俳優だ……フムあれが仙蔣と云ふのか中々好男だ』と有繋露骨ならねども薄氣味わるき詞の裏。久吉は此

處ぞ大事の瀬戸際と度胸を据ゑて『旦那にまだお話は致しませんでしたがアレは私の腹違ひの兄、幼い時に別れた限り何處に居るとも知れ無かつたを今は役者に成つて是々と漸との事で聞出してッイ此間兄妹が久し振で名乘合ひ、昨夜はお客で此方へ來て夜が更たので此處へ泊り今しがた起きた所へ旦那のお出、幸ひの折からゆゑ一寸會つてお遣り下さいましな』と即座工夫の眞赤な僞り詞巧に言廻したり

濱村は常からしての自惚によもやと思ふ迷ひから浮と久吉の口車に乘せられ『ムゝさうか夫ならさうと早く云へば好に……』と小言ながらに疑ひ霽れ仙蔣を呼びて面會せり。仙蔣は妹が一方ならぬ御世話に相なり何と御禮を申さうやら其詞をさへ知らずと額づき謝したる其體いかに舞臺慣たりとて取ても附かぬ贋造狂言、黑人で無くとも直に怪しいと見て取り此奴烏亂の曲者めと半帖を打込む所なれど其が眼の鼻んだ濱村、久吉が云へる如く全くの兄妹と思ひ信じたるこを笑止なれ

久吉は斯も巧に濱村を言ぐるめてより相變らず仙蔣を我家に引入れ娛み居たり。其年七月末盆替りの狂言を打上て仙蔣も暫く休みなれば久吉の家に入浸りなり。折柄濱村は商業用にて宇都宮へ旅行したりければ久吉は待設けたる好機會、一夜泊にて近頃開港になりたる横濱を見物して來るべしと仙蔣と同道にて七月二十九日の朝、江戸を出發したりけり、

第九回

憂かりける夏の暑さも漸く去り袂涼しき秋風に惚た同士の旅出立、一際目だつ風俗に道ゆく人が振返り見るを自慢の通し駕、急がぬ途に際取りて神奈川に着きたるは其日の中下りなり。是より横濱へ往くには一里の海上を渡船に乘るか一里半の陸路を廻るか何れにしても明日の事よと其夜は神奈川の青木町なる桝村屋へ一泊したり見晴し良き濱手の座敷には湯上の一酌アレが異國船アソコに見ゆるが横濱の新開町ならんと指點しながら指つ指れつ供に連たるは仙蔣が弟子の仙佳とて男衆兼勤の馬の脚『今夜は卿に敵娼を騎つて上るから其代り明日横濱見物に行た時に掛合の人たちに目つから無いやうに氣を附ておくれよ何の彼のと噂をされると煩さいからね』『ヘエ姉さんそりやァ仰しやらなくッても承知して居ります其所に抜りは御座いません』『餘まりさうでもあるまいぜ汝の舞臺の頓間さ加減では覺束ないものだよ』『師匠そりや可愛想ですよ舞臺は頓間でも外の事に掛ちやァ剛氣な者でごぜェますぜ』『その剛氣が半分藝にあると汝も好女優に成るがねェ』『さうは往ないから可笑しいねェ……』笑ながらに酒を汲かはし更ゆくまゝに眺むれば漁火の影波を燒き霧たる空に星煌けり久吉は手摺に寄り空を眺めて『明日も良お天氣だよ』と云へば仙佳は側から口を出し

て『テモ今夜は後になるときつと雨で御座いますぜ』『なぜだェ』『なぜだか私ァ知りやせんが、そりや貴嬢と師匠が御存知で御座いませう』『エヽ憎らしい口だねェ』『さうよ人を馬鹿にして居やがるぜ』と風流も無き一座の話、理もたはひも無かりけり。明くる朝も緩り宿を立ちて渡船に乘り横濱へ上りたるは正午前なり仙佳は氣を利かせて辨天通りの伊勢傳と云へる旅宿に入りて宿を定め其家の若い者に案内させ外國人の居留地より本町通り其外所々の見物で其日を暮したり。

凡そ女形の役者の酒を嗜まぬは稀なるが其中には醉に乘じて狂暴を極むる輩も往々あり仙蔣は夫程にはあらねども一升酒を飲み夫から夫と浮るゝ梯子上戸なれば『此處まで踏出したからは序に金澤から鎌倉江之島を廻つて歸らうぢや無いか』と水を向くれば久吉も心は動きたれども猶正氣を失はず『そりや娯みだらうが餘り長くなると可ないからねェ……』『ダッて一晩泊りで歸る筈が二晩になつたもの五分切られるも一寸切られるも一ッぢやァ無いか』と切りに促して杯の數を重ねたり。

久吉は常の外容は内氣の樣なれども酒に醉へば根性が顯はれて大膽になり世に云ふ酒亂の質なれば次第に醉を發しては後の禍を顧るの料見も無くなりてエヽ儘よ、どんな騒ぎが起らうと如何にかなるだらう出たを幸ひ思ふさま遊んで歸らうと仙蔣が勸に同意して尚も杯の交換に醉が嵩じて其儘に仙蔣が膝を假枕、横に倒るゝ、横濱の旅寐の宿のうす蒲團、輕薄心の仇し夢、道ならぬ戀路をぞ益

益迷ひ踏入たる。明くれば駕を命じて横濱を出立し金澤に着きて世に名高き八景を眺めたるが素より野鄙に育ちたる久吉仙藤『へエ是が金澤八景かえ是位なら花の時分の向島の方が遙に上だエ、詰ら無いなァ』と吃きつゝ東屋に宿を求め持出す膳部に打向ひ『ム、成ほど金澤ほど有て魚が新しくッて滅法に甘いや是で金澤に來た甲斐があると云ふものだ』と飽まで飲つ食ひつして夜を深し其翌日は鎌倉見物『イヤお寺なんかは眞平御免だ是から見りや淺草の奥山がどれ程面白いか知れや仕ないよ、サア早く江の島へ往かうぢやァ無いか』とそこ〳〵に打過ぎ由比が濱に出て『コレデ氣が清清して好景色だ』と賞たるも可笑し『マアお待よお祖師樣は私も信心だからね一寸お詣りを仕ようよ』と何を祈るか片瀬の祖師堂に參詣し仇しあだ浪寄せては返す濱邊づたひに手を取合ひ餘所の見る眼も羨しげに江の島に辿り着き辨財天に詣で二人が緣の長からん事を祈り海士の兒が取る鮑の貝を見ては片思ひを氣に掛けながら『成程名高い程あつて江の島は實に好所だ是でこそ江戸を出て來ただけの直段が有るぜ』と大に興じて見物なし其日もやがて暮近ければ惠美壽屋に泊り酒を呼びて對酌し生辨天の久吉が醉菩薩に顯じて白面尊者に凭れ掛り寐覺がちなる旅枕に誰憚からぬ睦言は實に樂しみの色慾界なり

第十回

話頭變りて濱村篤之丞は八月朔日江戸に歸り翌日柳橋の久吉が家に赴き見れば下女と三毛猫が居るのみなれば『久吉はどうした』と尋ねたり下女は少し躊躇ひて『姉さんはお留守で御座います』『留守は知れて居るが何處へ往つたのだ……出先が知れて居るだらう余が來たと使で知らせて遣れ』と云ふに下女は愈〳〵答に苦みたり

篤之丞は大家に育ちし旦那の氣質癇癖筋を額に顯して『久吉はどう仕たのだ』と勵しき語勢に下女は恐怖して『主姐は今日でモウ三日お家へは歸つてお在なさいません』と惧る〳〵告ければ篤之丞は意外にも打笑ひて『又何處ぞを遊び歩いて居るのだらう久吉が歸つて來たら留守に余が來たと云つてくれい……三日も家を明るは第一不用心だと余が云つたとさう言が宜い』と立掛りて又坐り『イヤ一筆書て置かう硯箱を持つて來い』と命じたれば下女は久吉が常用の硯箱の埃を掃きて出したり篤之丞は蓋を取り墨を摺り卷紙やあると抽斗を開けたれば引裂目に口紅の痕殘りたる卷紙の下より見ゆる手跡知れざる男の文、折も折とて疑ひの雲は早くも心に浮び若しやと手に取り見れば拙き手跡に嬌きたる文言、奥には金の無心を認め主の名は無けれども久吉さまお許へとしたりけり篤

之丞はヒシと胸に思ひ中り文殻を懐中し下女が怪む程に顔の色急に悪くなりて『イヤ手紙を書くのは止に仕よう』と言捨て其儘立出たれば下女は唯呆然たるばかりなり

篤之丞は其足で船宿の吉川へ寄りたれば吉兵衛夫婦は宇都宮へ御旅行と承りつるがお早きお歸りと大盡の入來に世辭たら〳〵槌で庭掃く接待ぶり座敷へ案内してソレ久吉さんを呼びに遣れ可中にも早く知らせよと立騒ぐを篤之丞は押止めて『イヤ今日は遊んで居る際は無い酒も飲たく無い……時に吉兵衛、唎に鑑定をして貰ふ物がある』『ヘエ私に日利の出來るものは何で御座えます』と頭を傾けて不審顔、篤之丞は懐中よりカノ艶書を半に裂きたる口の方ばかりを出して『今途中で如此ものを拾つたが何れ情夫から遣した手紙だらうが何にも心憎い文言、あひにくと名前が知れぬのが殘念だ尤も是を落した藝者には少し心當りが有るから此書人を鑑定してくれい、夫が知れゝば趣向をして遊ぶ積りだ』と他事に託して云ひければ神ならぬ身の吉兵衛は、目前久吉へ情夫より送りし手紙と思はねば繰返し見て小首を傾け『どうも解りませんが……ナニ一兩日お待ち下さいましたら屹度當りを附てお知らせ申上ます』と請合ひたり此吉兵衛は其頃高名なる探偵の錦鶴と云へる者と兄弟の交を結び常に往來したるなれば篤之丞も是を知りて斯く艶書の探索方を委任し匆々に歸りたり。吉兵衛は一途に篤之丞が好奇心より出たる事なりと思ひ信じたれば探索の手掛りを頼みたる

に錦鶴は篤と見て早くも文言の様子にては俳優なるべしと察し直ちに其道の者に就き聞合せるに漸くして是こそ嵐仙壽の手蹟なれと見知りたる者の有けるにぞ其由を吉兵衛に報知したり。

吉兵衛は兼て久吉と仙壽との情交を薄々聞知りたるが大事のお客の濱村の吩咐と云ひ特には其馴初こそ關係は無けれ其後久吉との會合、久吉が自前の事まで取計ひたる船宿の事にしあれば大に心配し取敢ず久吉が家を訪れたるに久吉は今日で七日になれど未だ歸らずとの事愈〻思ひ屈したる處へ藏前の誰袖より濱村の使來り直に參る樣にとの口上、委細承知仕ると使を返し誰袖へ往き座敷へ通れば濱村は待兼たる樣子にて女中を遠ざけて『時にアノ艶書の鑑定は附たかえ』と尋ねたり吉兵衛は口籠りて頓には答も出でざりけるが愁に久吉を庇ひて濱村の疑念を受け機嫌を損じては一大事なりと思ひ『漸々の事で分りました』と懐中せる手紙の半を出して『こりやァ市村座に出て居ます嵐仙壽と云ふ女形の手に能く似て居ると云ふ者が御座いましたが併し夫も當にはなりません』と云へば濱村は是を聞き怒り心頭に徹し『そりや誰に聞て誰が調べてさう云ふのだ……ナニ錦鶴が調べた上は間違ひは有るまい』と紙入に納ひたる半分の手紙を出して『相手の藝者は是だ』と突附て見すれば吉兵衛は手紙の奥を見て『コリャア頓でも無エ話、久吉にも似合ねエ料見違エ……ナァニ魔が魅たので御座エませう』『いづれ這般事だらうよ、どうせ浮氣を看板の藝者だから情夫の一人位

あらうとは思つて居たが彼奴旅烏の分際で久吉と言合せ江戸兒の余を盲人扱ひに仕たとは怪しからぬ奴だ』と去頃久吉が仙蔣を異腹の兄にして濱村に引合せたる大概を咄して『其僞が知れて見りやアいくら旦那の余だつて宜い心持が仕ないよ夫も内々で逐つて居る事なら見ぬ振も仕ようが五六日も家を明け浮れ歩いて居るからは定めし仙蔣も一緒だらうが癪でも枯ても濱村篤之丞だ世話して居る藝者と河原者に馬鹿にされ此面に泥を塗られちやア默つては居られ無い、併し路銀の支度をして往た樣子も無いから遠ッ走を仕たのでは有まい高が成田か江の島だらうよ、卿御苦勞だが直に手分をして久吉を搜し見つけ次第引張て來てくれい』と退引ならぬ濱村が依賴に吉兵衛は委細承知の旨を答へたり。濱村は『如才は無からうが成たけパッと仕ないやうに賴むよ』と言含め吉兵衛が辭むを強て若干の金子を路用として與へたり

吉兵衛は誰袖を出で其足で猿若町へ往き懇意の顏役に就て役者新道の仙蔣の家の動靜を探り貰ひたるに仙蔣は去月二十九日の早朝に家を出た限り未だ歸らずと聞き直に柳橋へ歸り成田の方へ往くべき者を別に極め己は蔦頭の熊藏と共に江の島へ向ふ事になし翌七日の早朝に二組の人は東西へ分れ久吉を搜索に出立したり。吉兵衛等は此事を極めて秘したれども誰とは無しに言觸し土地一ぱいの噂となれりけり

吉藏熊藏の兩人は途すがら行遇ふ人に心を着け其日の未刻頃に六鄕の渡頭に至りて向ふを見れば此方へ來る渡し船の中に尋ぬる久吉は仙蔣および門弟の仙佳と俱に乘込み居たり兩人は大に悅びて此奴占たと待つ所に船は汀へ着きたりけり斯と見るより久吉は胸にぎつくり驚きたるが其はしれもの度胸を極て『オヤ親方、頭も御一緒で那方へ大師樣でエすか』と先に聲掛れば『そんな呑氣な事ぢやァ無エや卿を搜しに兩人で來たのだ』『オヤさうでエすか』と何氣なき體には云へども胸には疑惧の波ぞ打ちける。吉兵衛は仙蔣を顧みて『オ、大和屋の太夫東海道の道行はいくら何でも大仰だらうぜ』『イエ親方さう云ふ理ぢやァ御座いませんよッイ今の間アノ鶴見の立場で……』と辯解せんとするを熊藏が横合より遮りて『エ、卿の言譯なんか此で聞か無ッても宜や今に改めて聞く時があらァ何にしても久吉さんが目ッかりさへすりや此方のものだ』『さうだとも事に寄たら江の島鎌倉箱根までも往にやァなら無エかと思つて居たよ』と云ふに久吉は愈〻心安からず『モシ親方どんな用だか聞かしてお呉んなさいな』『イヤ此處ぢやァ話は出來無エからマア大森の山本まで往と仕ようよ』と吉兵衛は久吉仙蔣等を伴ひ引返して大森の山本に來り久吉を別室へ連ゆきて『どうした

ものだエ久吉さん卿の仕方にも困るぢやァ無エか旦那は二日に柳橋へお出なすッて卿が二三日家を明たと聞いて御冠が大曲り四五日は待つて居なすッたが夫でも卿が歸ら無エところから吉兵衛、汝さがしに往て見附次第連て來いと恐ろしい御立腹だぜ』と云へば久吉は無明の酒の醉さめて面の色さへ忽ち變り『エッ夫ぢや旦那はモウ宇都宮からお歸りなすッたのでエすか』『お歸りなすッた段かい、卿今日で幾日になると思ふモウ八日になるぜちやんと極つて旦那の有る藝者が七日も八日も役者を連て旅他國を浮れ歩く奴があるものか夫を知ら無エ卿では無からうに……』『イヽエそりや親方お前さんの邪推、實は横濱に身寄の叔母さんが居るので夫を尋ねて往た所が生憎の病氣、介抱の仕手も無いので五六日引止められやッと今日歸る途中で仙壽さんと鶴見で落合つたのですワ、夫を一緒に浮れて居た樣に思はれては……』と言瞞めんとすれば吉兵衛は笑ひに打消して『ハヽヽヽバヽ卿と仙壽との中は柳橋中誰一人知ら無エものは無いよ今更眞目に辯疏でも無からうぜ』『そりや私だッて斯成つて言譯をする理ぢや有ませんが……』『サァさうで無けりやァ何にも言はずに余れと一緒に歸んなせエ惡い樣にやァ仕ねエからよ』と腹の底まで見拔く吉兵衛が星を指したる詞に久吉は爭ひ兼て『夫ぢや親方と一緒に歸ると仕ませうが、シタガとんだ御迷惑を懸けて濟ませんでしたねエ』と會釋に及びたり。吉兵衛は久吉との話を畢へたれば共に一室を出で『イヤ色話が長く成

てお待遠で御座エましたサァ一服遣つたら出掛ようぜ……久吉さんの方は迎し駕だらうの……諾諾』と高輪までの駕を二挺命じたり此間に久吉は熊藏に會釋をなし仙壽は吉兵衛に諄々と言譯をなしたるが吉兵衛は宜き程に受流して『サァ其な事はどうでも宜や……』と冷笑ひたり。其中に駕が出來たりとの知らせに一同は乘移り山本の女中等が喧しき世詞を後に聞流して行先を急がせたり斯て品川を打過ぎて高輪に來ればハヤ點燈頃なり吉兵衛は一同の駕を懸意の茶屋の前に停めさせて店先に下り『オイ仙壽さん貴君は是から陸を駕で歸るとするが宜ぜ此方の連中は舟で柳橋へ歸る積り陸と水を別れて行く事に仕ようぜ野崎の趣向で好いだらう』と打笑ひたれば久吉は有繋に塞ぎ居たり仙壽は『夫ぢやァ親方、頭、勝手ですが私は是でお暇を致しますよ……久吉さん大きに失禮を致しました御免なせエまし』と無量の情を含みたる會釋に久吉は吉兵衛等が手前を憚りて『ア、御免なさいよ』と手輕き挨拶はいとゞ思ぞ深かりける。此方の三人は舟の支度宜しとの知らせに立出て舟に乘りたるが吉兵衛が注意の夕飯は船中に用意してありけり高輪を乘出してお濱沖に來れば七日の月は淡く空に懸り沖吹く風は未だ膚に寒からず常ならば面白き夜景ながら是はさる場合にあらず沈みがちにて船中の夜食に飢を凌ぎ柳橋に着きたるは戌刻頃なり。吉兵衛等は久吉を其家に送り屆けたるに下女のみなりければ熊藏を跡に殘して一旦我家に歸り使を濱村へ走らせて久吉歸宅の由

を内々にて通知なし再び久吉が家に來り懇に熊藏を勞ひて歸したり。

心の底はどうだか知れねど表面は久吉特の外に打萎れて『親方、貴君には誠に濟ませんがひよんな機で心が狂ひ我を忘れて浮れ歩きとんだ御心配を懸けました切望堪忍しておくんなさいまし……夫にしても不思議なのは濱村の旦那どうして私が仙蔣さんと妙な中に成て居るのを御存知で御座いますね旦那に知れる理は無いのですが……』と訝り問へば吉兵衛は煙管をポンと叩きて『夫が卿の淺果と云ふものだ卿の了簡ぢやァ余が旦那に告口でも仕たやうに疑ぐつてるだらうが夫やァ大違エだぜ余よりか旦那の耳へ先に入つたのだから始末が悪いや、と云ふ理は仙蔣から卿の所へよこした手紙が旦那の手に入り遁れぬ證據に成てるぜ』と濱村より聞得たる次第を初めて明せば、さすがの久吉も忽ち面の色を變て差俯き言出す樣も無かりけり久吉が心中にては假ひ濱村が何程立腹して居て吉も我が辯舌にて眞實らしき口實を設けて巧に言瞞めたらんには原々通りになすは難しき事にあらずと今迄は多寡を括りて居たりけるが今、吉兵衛が話にて退引ならぬ證據の手紙が先の手に入り是まで濱村を欺きし僞の全く露顯と知れたるからは何に寛大な濱村とて今度と云ふ今度は取返しはよも附くまじと案に相違の當惑に思はず太息を吐きたりけり

第十二回

吉兵衛は苦り切て『旦那も最初は仙蔣の手紙だか誰の文だか御存知は無かつたのだ此時分に余へ御談が有りやァ余の口頭で揉消してしまひ斯した大火事にや仕なかつたのだが何を云ふにも余は夢にも夫とは知らず旦那の手で内々芝居町へ探りを入れ仙蔣の手蹟と知れた上で余を呼んで證據を突附け是々だとお話なすッた卿の不始末、尤も旦那と卿と馴染の初は知ら無エが夫から後は余が家で始終の出會、自前に成て此家に入ッたまでも卿の身の上に附ちやァ何事に寄らず懇合の有る余だものへエさうで御座エますかと通り一遍の挨拶で開を乘て觀て居る理にやァ往ねエや、又卿も卿だ是程懇合のある余に仙蔣の一件をヘシ隱しに隱して居て余にまで目脂を喰せるのは酷いぢやァ無エか』『ナァニ貴君に目脂を喰せるの隱立をして居たのと云ふ理ぢや有ませんが今も云つた通り全くは私しが心の迷ひ只望勘辨をしてお呉なさいまし他に縋る所も有ませんから關合つたが親方の不承、是からはきつと浮氣を謹みますから只望旦那へお詫をしてお呉なさいまし親方後生ですよ』と空涙を翻し吉兵衛までも擒にして此失敗を今一度もり返さんと巧みたり。吉兵衛はさるもの爭で其手に乘るべきや頭を打掉りて『其相談は氣の毒だが斷りませうよ余も吉川の吉兵衛だ、藝者のお陰で家業

は仕ねエ永年お出入の旦那のお顔の立つやうに卿の方をきつぱりと附て上にやァなら無エ、先づ一旦さうした上でお詫をするなら其上の事よ』と語氣次第に高まれば負ぬ氣象の久吉も破れかぶれの癇癖聲『それぢや親方どうすりや宜のですか』『知れた事よ余が口を利て請判を仕て買つた此家明日の朝までに綺麗に明渡して看板を外して貰エませう外土地で商賣を爲なさるのは卿の勝手だが此柳橋の土地だけは余の方で構ふから其積で居てくんな』と言放ちたり。久吉は常は優しき柳の眉を上げて目に角を立て『アヽ明渡せならいつ何時でも明渡しますよ何だね如此蟲籠見たやうなけちな家の一ツ二ツ汝に呉ると云ひなすつても有がたう御座いますと悅ぶ樣な私ぢやァ憚りながら有ませんよ又廣い世界に濱村さん一人が旦那ぢや無しナンノ如彼氣障通人に一生涯世話に成て堪るものかね場所を構ふとお云ひなら勝手に構つておくんなせエまし、だが親方江戸は廣いよ柳橋ばかりに日は照ら無いからね藝者を仕ようと思ふなら馥町下谷日本橋どこへ往ても左褄で商賣は出來ますよ』と腹立まぎれに口から出まかせの太平樂。吉兵衛も愈〻激して『まう分た長エ短けエ言にや及ばねエ明日の朝鳥がカァと啼くを相圖にきつと此家を明渡しなよ余ァ受取に來るから其場に成て泣ッ面アしても追付ねエぜ併し衣服諸道具は旦那が卿に下さると仰しやるから禮を言て持て往なせエ夫から先は四ッ谷板橋小塚ッ原どこで成とも勝手に商賣するが宜や併し江戸中ぢやァ船宿仲間料理茶屋

おれが差をきつと突から日の懸手は有りやァ仕ねエぜ其氣で褄でも裾でも取なせエ』と言捨て立上り格子戸荒らかに開て跡はピッシャリ駒下駄ふみ鳴して出去たりもう斯なつたら破れ冠れだと久吉は己れが過失は棚に上て湯呑に次だる燒酒を續けざまに七八杯呷りたれば活と發した悪酔に忽ち起つた例の酒亂胸のもやくや愈〻高じて『エヽ思へば思ふほど癪に障らァ吉川のチョン〳〵野郎め濱村の奴さんを煽り込でおれに赤ッ恥を搔する氣で狂言を書やがつたな、どうするか覺えて居ろ』と吃きながら帶〆直し血相かへて立上れば下女は驚きて『主如、今時分どこへお出なさいますね』と引止れば久吉は『ナーニそんなに氣を揉む事ァ無いよ私やァ一寸橋向の藤岡まで往て女將に相談して來るから汝すこし留守番を仕て居てくんな』と言捨て我が家を飛出したるが何思ひけん柳橋は渡らで却て右に曲り足早に兩國橋を越え左に折れて百本杭を過ぎ左ながら夢中の如くにて大河の岸を彼方へと逍遙ひたり。素より是と目指して相談に往く先とてもあらざれば更ゆく儘に夜風は身に沁み酒の醉は漸く醒むるにつけ熟〻我身の上を考ふれば藝者は素より浮氣商賣よしや極つた旦那が有つて其世話に成て居るとて夫や良人と云ふでは無し言はゞ向ふも慰みもの此方だつて其だもの辛い勤の憂さ霧しに情夫の一人や二人あるのは藝者の身では當然たまに隱れて遊んだからッて何も不思議は無い理窟それをば野暮に根を掘て詮索立する旦那も旦那だが其吩咐を眞に受て旅から旅へ追掛

て情人の前で面恥か、せ引戻した其上で那程までに詫るも聞かぬ無法の掛合餘りと云へば情を知らぬ人で無し夫に先刻の樣子では明日夜が明ると彼奇生サア家を明渡せと呶鳴込で來るに違ひは無い土地中への恥さらし再び人中へ面出がなりや仕ない賣詞に買詞で柳橋ばかり日は照らぬと廣言は吐たもの、出る先々で差を突かれては馥町深川日本橋どこへ往ても稼業はならず、さればと云て柳橋の久吉とも言れたものが宿場藝者や田舍稼ぎどの顏さげて出來ようか、ト云て今更また根岸の繼母の所へ辱ねて往き折角切れた親子の緣それを此方から態々繫ぎ彼惡黨の老婆が二度の食物にされるのは死でも否だし夫と云て外に便る先は無しコリヤどうしたら宜だらう……ア、いやな犬の鳴聲だ夜の更るのにウロ〳〵歩いて居ても仕方が無いが……』と進退谷まり思案に暮けるが『ア、斯なつて路頭に迷ふも彼奴らのお蔭、エ、いつその事面當に死で遣れ、早かれ晩かれどうせ一度死ぬる命死で後で思ふさま難儀を懸るが此方の腹癒』と決心なし前後の思案のあらばこそ足にまかせて東橋に走り掛れば折しも往來の人足絶え丑滿つぐる鐘の聲水に響きて物凄く常には夫とも思はねど今は左ながら無常をば告ぐるが如くに聞ゆれば久吉は悔し紛れの無分別はや死神に誘はれたる心地して南無阿彌陀佛と云ひながら下駄脫棄て橋の欄干に手を掛けアワヤ身を躍らせて大河に飛入らんと仕たりけり

東橋の東詰なる馥寶張の小蔭に忍びて最前より久吉が擧動をば覗ひ居たる一人の男顯はれ出で久吉が背後より緊と抱き止て『待た待なせエ、どう云ふ理か知ら無エが死うとは惡い了簡だ』と止むれば久吉は恟り仕ながら振返りて『生ては居られぬ理あつて今此で死ぬる私し後生だから見遁してお くんなさい』と云へど男はいつかな離さず『そりやァ何れ理が有だらうが死ぬのは止にお仕なせエ通り合せて見附たも何かの因緣どうして見殺しにされるものか』と夜目にも夫れと久吉が姿に眤と目を着て心に諾づき『私の家はツイ其處の中の鄕、遠慮は無エから兎も角も私の家まで來なせエな詳しい理を聞た上死なねば成らぬと云ふ事なら無理には止も仕ますめエ斯いふ時にやァ膝とも談合また良分別も有らうから……』と慰むれば久吉も一旦の腹立まぎれと悔しいと身の振方が無いとにてエ、死で了へと思つたもの、又考ふれば諺にも死ぬ者貧乏と云へる如く此方で思つた面當が先の身に取て面當に成るやら成らぬやら覺束ないと思ひ直して『夫ぢや貴君の御意見に附まして……』『ア、さうしなせエ、ナニ下駄が知れねエ……待なせエよ今搜して上げるから』と男は手搜りて下駄を搜して久吉に穿かせ信切に痛はれば久吉は厚く悅び男の後に附きて東橋をまた本所へ立戻り中

て情人の前で面恥かゝせ引戻した北上で那程までに詫るも聞かぬ無法の掛合餘りと云へば情を知らぬ人で無し夫に先刻の樣子では明日夜が明ると彼奢生サア家を明渡せと喚鳴込で來るに違ひは無い土地中への恥さらし再び人中へ面出がなりや仕ない寶詞に買詞で柳橋ばかり日は照らぬと虞言は吐たもの、出る先々で差を突かれては馥町深川日本橋どこへ往ても稼業はならず、さればと云て柳橋の久吉とも言れたものが宿場藝者や田舍稼ぎどの顏さげて出來ようか、ト云て今更また根岸の繼母の所へ辱ねて往き折角切れた親子の緣それを此方から態々繋ぎ彼惡黨の老婆が二度の食物にされるのは死でも否だし夫と云て外に便る先は無しコリヤどうしたら宜だらう……ア、いやな犬の鳴聲だ夜の更るのにウロ〳〵歩いて居ても仕方が無いが……』と進退谷まり思案に暮けるが『ア、斯なつて路頭に迷ふも彼奴らのお蔭、エ、いつその事面當に死で遣れ、早かれ晩かれどうせ一度死ぬる命死で後で思ふさま難儀を懸るが此方の腹癒』と決心なし前後の思案のあらばこそ足にまかせて東橋に走り掛れば折しも往來の人足絶え丑滿つぐる鐘の聲水に響きて物凄く常には夫とも思はねど今は左ながら無常をば告ぐるが如くに聞ゆれば久吉は悔し紛れの無分別はや死神に誘はれたる心地して南無阿彌陀佛と云ひながら下駄脱棄て橋の欄干に手を掛けアワヤ身を躍らせて大河に飛入らんと仕たりけり

東橋の東詰なる馥寶張の小蔭に忍びて最前より久吉が擧動をば覗ひ居たる一人の男認はれ出で久吉が背後より緊と抱き止て『待た待なせエ、どう云ふ理か知ら無エが死うとは惡い了簡だ』と止むれば久吉は恟り仕ながら振返りて『生ては居られぬ理あつて今此で死ぬる私し後生だから見逃しておくんなさい』と云へど男はいつかな離さず『そりやァ何れ理が有だらうが死ぬのは止にお仕なせエ通り合せて見附たも何かの因緣どうして見殺しにされるものか』と夜目にも夫れと久吉が姿に眤と目を着て心に諾づき『私の家はッイ其處の中の鄕、遠慮は無エから兎も角も私の家まで來なせエな詳しい理を聞た上死なねば成らぬと云ふ事なら無理には止も仕ますめエ斯いふ時にやァ膝とも談合また良分別も有らうから……』と慰むれば久吉も一旦の腹立まぎれと悔しいと身の振方が無いとにてエ、死で了へと思つたもの、又考ふれば諺にも死ぬ者貧乏と云へる如く此方で思つた面當が先の身に取て面當に成るやら成らぬやら覺束ないと思ひ直して『夫ぢや貴君の御意見に附まして……』『ア、さうしなせエ、ナニ下駄が知れねエ……待なせエよ今搜して上げるから』と男は手搜りて下駄を搜して久吉に穿かせ信切に痛はれば久吉は厚く悅び男の後に附きて東橋をまた本所へ立戻り中

の郷へと辿りゆく。抑この男を誰かと云ふに是なん前編に顯はれたる清吉にてぞありける

扨も清吉は去年大阪にて文龍を殺し江戸へ逃歸りて淺草邊に潜伏し博徒の群に立交り良からぬ事に日を送りけるが素より世才に惡がしこき漢なれば或仕事にて思はぬ儲を得たるを幸ひに本所中の郷へ世帶を持ち表面は堅氣の町人と見せかけ其實は矢張賽の目の一六勝負あるひは强談欺騙を業とせり今夜も堂前の博徒某が賭場より歸る途中東橋にて討らずも久吉を救ひて見れば夜目にも知るき藝者姿、好奇貨が手に入たりと心中窃に悅び信切轉しに我家へ連來れり。

中の郷の新道に近頃建たる一棟の長家その二軒目の門口に彳みたる清吉『サア尊姐、此が私の家だ内にや聖の飯炊婆一人だから遠慮は些とも御座エませんよ』と引寄せたる戸を開けて先に入れば久吉は會釋しながら後に從ひたり、主人の歸りに聖の老婆が出來りて『今お歸りかエ……ウムにや何方もお出なさりや仕ませんよ』『さうか……オイ大きなものに水を一杯もつて來て早く此尊姐に上てくんねエ』『何を掛ろッて……ムム水かへ……分りましたよ』と老婆は勝手元より急ぎ小丼に水を次ぎて持來り『サァお上んなさいまし』と差出せば久吉は請取りてぐッと呑乾て『大きに有り難う』と挨拶するに『どう致しまして』と答へつゝ、老婆は久吉の姿をジロリと見てオヤ家の野郎どのが乙な女を引ぱり込で來たなァと云はぬ許りの樣子にて老の皺面をニヤ〳〵させ勝手の方へわざと

外したり

清吉は火鉢を中に久吉と差對ひになり鐵瓶を提て見て『こりやァ全で水だ、お待なせエ直に沸してお茶を淹れるから』と炭を次ぎ『マア一服お上りなさい』と煙草入を出し行燈の光につくぐゝと久吉の顏を打見れば這はそも何に去年大阪にて現在己が手に掛け殺したる文龍に容姿なら年齢ならそつくり其まゝ生寫コリヤ文龍が生還りて來たるかと思はれて衿頸より冷水を浴せられたる如く總身ぞつとして身の毛も强立ち胸の動悸は俄に高まりたり。久吉は斯と心着かざれば煙草入を返して『貴君のお蔭で命拾ひをいたしました今に成て考へて見るとゾッとする樣で御座いますよ』と云ふ聲までが文龍に其まゝなれば清吉は愈〻怖氣立たるが原より大膽不敵の曲者ナンノ他人の猿似は間間あろこと强ちに驚くべきに非ずと直に心を取直し平氣に成て『いづれ大事の命を捨ようと覺悟しなすつたには一通りや二通りの譯では無からうが一體尊姐は何處の藝者衆で何屋の何と云ひなさるね』と尋ねたり久吉は包むべきにあらねば柳橋の新伊勢屋久吉と名乘りたれば清吉は頷づきて『さうですか其柳橋で全盛の尊姐がどうして死ぬ氣に成なすつたか理を話してお聞かせなせエ袖振合ふも他生の緣及ばずながら相談相手に成ませう……ナーニ尊姐が內證を明したからと云て其を種に惡企謀をする樣な私ぢやァ御座エません見掛は吝な男でも家業は堅氣の炭薪問屋その組合の帳面をそ

つくり預り慰定を通ひ勤の美濃屋清吉、人の難儀を見た日にや假ひ見す〳〵損と知れても捨て置かれぬが私の氣象、惡い樣には仕ねエから心配無に其理を私に話してお聞かせなせエ』と表面を粧ふ質信切に久吉は女心の淺果にも賴もしき人と思ひて『夫ぢやァお咄し申しますが實は斯云ふ理でエす』と濱村篤之丞の世話に成り吉川の吉兵衛が口を利きて自前となりたる事、仙蔣との情交を旦那に悟られ遁れぬ證據を上げられ仙蔣と二人で江の島詣の戻り道を吉兵衛に押へられ連戻されて明日は家を明渡し柳橋にも居られぬ仕儀となり進退きはまりて投身と覺悟したるまでの一伍一什を我身勝手に理窟を附て物語りたり

清吉は始終の話を聞て『ハヽァさう云ふ理でごぜエましたか素人衆なら知らねエ事其しきの事は藝者衆には珍らしくも無エ話それ位エの事で死なうとするのは失禮ながら不了簡だ一二を爭ふ尊姐にも似合ねエ氣が狹すぎると云ふものだ、ナンノ情夫の尻が割れてお客を失敗る其度毎に死んで見なせエ命の掛替が幾等有つても足りやァ仕ねエ……マア宜ごぜエます外に宜い思案が有らうから、さう案じるにァ及ば無いよ何にしろ今夜はモウ遲いから明日の事にして如此穢エ狹い家で氣にやァ入るまいが寬くりと此でお休みなせエましな……ソリヤァさうと尊姐さぞお腹が空なすつたらう……ナァニどうせ私も喰るのだから』と雇婆アに雜炊を拵へさせ主客は其を食し、相談は明日の事と長火鉢を片隅に寄せ狹き所に寢床を並べ枕に就きたるは八ッ半頃（午前三時）にてありけり。清吉は心中ひそかに思ふやう斯して信切ごかしに恩を被せ此方の物にして了へば殺さうと生さうと余が腕一ッだ縱多少の資本を投込でも纏まつて儲かる代物コリヤ請目に成て來たぜと獨り笑て何時しか夢に入りたりけり。

翌朝主客は漸く五ッ半（九時）過に起出で互ひに會釋して顏を洗ひ火鉢に對ひ合つて坐り老婆が氣を利して拵へたる豆腐の汁にて朝飯を濟せて後に清吉は『所で久吉さん、どう分別を附なすつたい』と尋ねたり久吉は一時は死うとまでに激昂したりけるが一夜を過して醉も全く覺め心も靜まりて昨夜の擧動を心中に後悔したりければ首を俯向け悄然として『幾ら考て見てもどうして宜やら實の所が分別も何も附きませんよ』『ナーニ附くも附かねエも無エ夫程大仰な話ぢや無からうと私やァ思ひますね併し夫も尊姐の了簡一つだ、先づ早エ所がかうだ尊姐が是つきりどうあつても柳橋へ歸ら無エ積りなら葭町でも日本橋でも構ふ事は無え好な所へ出なさるが宜い及ばずながら私が屹度請合て話を附け吉川なんかに差を突かせる樣な事ァ仕ますめエ併し長しく柳橋へ戻り濱村さんとか仰しやるお客に詫をして原の鞘に納める積なら尊姐こゝは一番思ひ切て仙蔣と綺麗さつぱり手を切らなくッちやァ成ら無エが尊姐どつちに身を振らうと思ひなせエますね』と問掛て其心底を搜るに久吉

は此時心中既に思ひ決する所ありしが態と夫をば詞に發せず『サアどつちに仕たが宜やら自分にも分りませんがどうしたが宜しうございませうね』と反問したり清吉は打諾いて『人様の事だから迂闊にやァ言へねェが打毀す事ァいつでも出來るが毀れたのを原の通りに纏めるには骨が折れるもの物の例で私がもし尊姐なら此は否でも辛抱して濱村さんに誤り何でも詫言をして原の通りに成りますね、氣に喰なけりやァどうでも仕やァがれと柳橋に砂を蹴懸て他場所へ出るのは威勢は宜やうだが好く考へて見りやァ尊姐の損だらうよ』と說諭せば久吉も素より其氣『サア私もさう仕たいと思ひますが甘くさう成りませうかね『其處が此方の懸合よう一ッ、旦那は兎も角も吉川の吉兵衛は私も知つて居るが分つた男だけに欺しの利ねェ爺だ間に合せの手づまぢやァ追附ねェよ尊姐も大和屋の太夫とは死なうと迄ほれ合た死殺の中だ夫を思切と云ふのは生木を割やうなものだが長え事は無エ少しの間の我慢だ一旦は本統に手を切て扨是々で御座いますと證據を見せて詫言の趣意を立て無い中は此方が幾ら頭を下げ兩手を合して拜んでも承知をする氣遣エは有りませんぜ吉川が不承知なら旦那だつて矢張ウンと云ひなさる氣遣エは無からうから此火氣が冷さいすりや後では又好仲になつても構はねェ此は一旦仙蔣と別れて了はねば迚も話は纏るまいと思ひますね』と說付れば久吉も兒す〳〵仙蔣に別るゝは何より辛き思なれど脊に腹は替られず差當ての身の振方夫さへ附ば成程清

吉の言ふ通り後はどうとも又たなる事と其は浮氣の本性を顯して『ナンの貴君の仰しやる樣に死程惚て居る中ぢや無し別れ話にするのは承知でエすが外見はあんな優しい顏でも心の底は却々だから野暮に出られては困りますね』と屈託顏、清吉は意に介せず『仙蔣の噂は聞て居るがイザ壇の浦となりやァ此方の出よう一ッで存外話が早く分るだらうよ』と事も無げなる其口振度胸の程も自づと見えて却々に賴もし氣なる人物なれば久吉は深く信じて何事も宜しきやうにと賴みたり清吉は仕濟したりと愈〻心に悅びて『お家でもさぞ昨夜から心配をして居なさるだらうから是から直に柳橋へ往き吉川に會て話に掛ると仕ようが所で尊如は不自由でも此一件の方が附くまでは此に落着ておを在なせェ……、ナーニ四五日の辛抱だ遠慮も氣の毒もありやァ仕ねェよ』と久吉に言含め雇婆へも吩咐けて出ゆきたり

第十四回

話替りて柳橋の久吉が家にては藤岡へ相談にゆくとて久吉が出たる限り歸り來らねば下女は睡りも遣らで氣を揉み遂に堪へ兼て表の戸を引寄せ藤岡へ往きて尋ねたるに久吉は來らずと聞き不審をなして立歸り心配ながらに一夜を明して翌朝未明に吉川へ往き斯と告げたるに吉兵衛も前夜言爭ひて

別れたる事なれば大に驚き心當りを聞合せたれば一人の箱屋が昨夜四ッ半頃向 兩國の青柳の前で出合頭に久吉さんに逢ひましたから聲を掛けようと思ふ中に久吉さんは駈出して百本杭の方へお出なさいました』との話に若しや逆上せて身でも投げはせぬかと愈〻案じて俄に人を集め手分をなして忍び〳〵に大河の兩岸を搜させ一方には使を濱村へ走らせて密に斯と告げ吉川の家は上を下へと騒ぎけり

斯る所へ『御免なせエまし』と會釋して入來れるは見覺ある清吉なり、先年清吉が叔父德三郎の家に在りける頃、時々吉川も來て遊びたる事あれば吉兵衛も女房も今に其俤を覺え居て『ヤ是はお久しう御座エます』と久濶の挨拶をなせば清吉『親方悦んでお呉なせエ私も近頃は身持を堅くして本所の薪炭問屋の組合の帳場を預かり美濃屋清吉と云つて中の郷に住居をして居ますよ……時に親方、今日上つたのは他ぢやァ無が昨夜吾妻橋で身を投げやうとする女を助け名所を聞けば柳橋の新伊勢屋久吉と云つたから私の家へ連れて歸り慥かに止めて置きましたぜ』と云へば吉兵衛は打驚ろきて『イヤ其久吉が出たッ限り歸りが無いので今手を分けて搜して居る所、よくお止置き下せエました』と二度に及びたり。清吉は左こそと打頷きて『乃で昨夜段々當人の話しを聞て見りやァ濱村の旦那や親方へ合せる顔が無いに由て死で申譯をする外ァありませんと涙ながらの懺悔話、聞いて

見りやァ捨ても置かれず親方を知て居るを幸ひに御相談に上ッたのでエす』と膝を前に進めたり。吉兵衛も清吉が如何なる事をや語り出づると耳を傾むくれば清吉は語を次ぎて『今お咄した通り當人も能々自分の行ひが悪いと後悔したればこそ命を捨て申譯と云までに思ひ詰たので夫が本心に立返つて見りやァ一旦の了簡違ひは憎いに違ひは無いが實は不憫な者でエすぜ、乃で私が段々と當人の心底を聞た所が今度と云ふ今度は綺麗さつぱりと仙濟と手を切り夫を趣意にしてお詫が致し度と達ての願み旦那だつて元々憎くつて世話をなすつた理ぢやァ無し又親方とても旦那への義理で表面は敵役と見せ掛ても何も是で敵の末ぢや有りますめエ腹の底ぢや氣の毒だと思つてお居なさるで御座エませう、エ、親方こゝが人一人の命を助ける所どうかモ一度元の鞘へ納まるやうに旦那へ執成をしてお遣んなせエませんか私も倶々お願え申上ます』との話に吉兵衛は首肯きて『仰しやる通り私とてもどうにか心配をして丸く納まるやうに仕度と思つて居たが肝腎の久吉の鼻息が荒いので賣詞に買詞破壞話で別れたもの、實の處は今にも泣を入れて來るかと思つて居たのでエす容姿はよし氣前は面白し酒と浮氣せエ慎みやァ如此間違エにやァ成ら無エのですが……』『サア其酒も向後は屹と慎みますると當人が心底からの後悔シタが當人の云ふ通りに仙濟と手を切らせ立派にお詫の趣意を立てさせた所で元の鞘へ納まらねエ日にやァ當人だつて蚯蚓取らずに成て可哀想だが親方

貴君の見込はどうで御座エますね』『そいつァ私にも分らねェが能く物の分つた旦那だから筋道を立て謝まつたら夫でも可無いと仰しやる事ァ無からうと思ひますよ、併し其御挨拶は旦那の御心底を聞た上での事兎も角、久吉の家へ御一緒に往きませう』と我家の者にも久吉が安全なる由を告げ知らせ捜しに出たる者を呼戻すやうに諸事の取計ひを女房に吩咐け置き清吉を伴ひて久吉が家へ往き斯と下女に告げたれば下女は漸く愁眉を開き安堵の胸を撫下したり

此に濱村は吉兵衛よりの知らせに打驚きて急ぎ吉川まで出掛て來りければ吉兵衛は清吉を連て再び我家に戻り濱村に對ひ『先きに一寸お知らせ申ました通りの譯がらゆゑ必定久吉が昨夜投身を仕たらうと思込み今朝つから手分して捜して居ました所へ美濃屋清吉と云ふ人が來まして久吉が昨夜吾妻橋から身を投やうとした所を助けて家へ連歸り話を聞けば是々と其身の前非を後悔して旦那への申譯に命を捨る覺悟を極た懺悔話、そりや何にも可哀想だと段々の譯を聞た上で久吉が仙濤と綺麗に手を切り夫をお詫の廉にして御勘辨を願ひ度と心底から大後悔それで今度の所は御勘辨を下さるまいかと清吉の口上、私も聞て見りやァ尤ともと存じますが旦那の思召はどうで御座エます』と云へば濱村も元來憎からぬ久吉なれば心の怒りも大に解けて『本統に後悔したと有らば勘辨しまいものでも無いが兎も角その清吉とやら云ふ人に會つて見て篤と話を聞た上の事に仕よう』と云へば吉

兵衛は『旦那失禮では御座いますがそりやァ宜しう御座いますまい清吉にお會ひに成ならすッぱりと勘辨をしてお遣りなせエまし、然うで無けりやァ頭でお會ひなさら無い方が宜う御座いませうぜ』と詞を返したり濱村は實に尤もと默頭きて『夫ぢやァ仙濤と手を切て趣意を立てたなら折角の賴みだから勘辨を仕て遣ると極て其清吉を是へ呼ぶが宜い』と云ふに吉兵衛は階下に下り行き清吉に斯と告げ二階に連つ來りて『是が今お噂した美濃屋清吉君で御座エます』と濱村に引合せたり濱村は初對面の口誼を簡短になして『委細は吉兵衛から聞ましたが久吉が事に附て一方ならぬ御心配で段々の御信切あり難う御座います』と謝すれば清吉は『其御挨拶ぢやァ恐入りまする此家の親方からお聞でも御座いましたらうが誰しも死うと覺悟をするには能々の事で未塵も嘘僞りの無い所これが誠の眞實心、察して見りやァ可哀想なもので御座います……如此事を旦那に申上るのは釋迦に說法、餘計な事で御座いますが一旦の御立腹は御立腹として命を捨るとまで覺悟を仕たものなり其心底を察して罪過を許してお遣り成さいますのが本統の苦勞人、駈出しのお客にやァ出來無い業で御座いまする其替りに當人は仙濤と綺麗に手を切つて向後寄せ附る事ぢやァ御座エません』と才辯を奮ひて詞巧に說たりけり濱村はさしも激昂したる怒も全く解けて『折角の御心配ゆゑ仰しやる通り廉を立て詫りや今一度元の通りに世話をして遣りませう』と云ふにぞ清吉は大に悅こび『旦那が

さう仰つて下さいますれば私の顔も立て誠に有がたう御座います是と云ふのも親方のお取成しで御座エます』と悅びを述べ又もや濱村が御意の變らぬ中にと煙草入を腰に差して『善は急げだ直にお暇をして久吉さんに此樣子を聞かせて安心を致させ一件の方は立派に話を付け些とも後腐の無い樣に仕て夫から改めてお詫をさせる事に致しませう』と云へば濱村は『どうかさう仕て下さいまし……御如才は有まいが夫迄は久吉に此方の奥根を明さ無いで……』と言掛けたるを清吉は皆まで聞かず『そりやァ心得て居ます……どうして〳〵當人にやァ旦那の方のお詫は却々六かしい樣だと言て向後の慎みを十分に押て置かにやァ成りませんト（吉兵衛に向ひて）所で親方、此一埒の方が附くまでは久吉さんを私が確に預かつて置ますが夫で宜う御座エますか』と念を入れ濱村が兎も角一杯傾けてと云ふを『有がたうは御座いますが大切の代物を預かつて居ますれば一刻も早くお暇を致しませう』と强て斷り匆々に吉川を立出たり

清吉は我家に歸りて『久吉さん嘸退屈で御座エましたらう』と云へば久吉は會釋を爲して『オヤお歸りなさいましたか、ナァニ少しも退屈な事は有や仕ませんお婆アさんを相手にトンチンカンな話を仕て居てどんなにお腹を撚ましたよ……時に吉川の親方にお會なさいましたかエ』と氣遣しげに尋ねたり清吉は『好鹽梅に會つて話を仕たが彼の吉川の吉兵衛は理窟も能く分る癖に大の一酷もの

で兎や角と言たを私が種々に說附けて漸との事で納得させ俱々旦那にお詫をする事に相談を仕て居る處へ宜い都合に濱村さんが來なすつたので尊姐が命を捨て申譯を仕ようとした一伍一什を甘く話し仙壽と綺麗に手を切つたら御勘辨下せエますかと段々に咄し込んだ所が乃は尊姐に未練のある濱村さん筋道さへ立て來りやァ勘辨を仕て遣らう併し尊姐には底意を明さずに置て呉いと流石は旦那衆、人柄の宜い返詞私も感心してへエ宜う御座エます屹度庫を立た上で改めお詫に出ませうと云て引下つて來ました』と打明けて語りければ久吉は胸を撫下して『其處まで話の屆いたのは全く貴君のお蔭仇おろそかには思ひませんよ併し仙壽さんの方が直に話が附きませうかね『そりや尊姐が其氣に成りやァどうでも話の附ようもあるが詰る所が空手ぢやァ追着まいよ何程か出して趣意を立にやァ先だつて承知は仕めエて』『そりや夫に違ひはありますまいが實の所は散々浮氣を仕た後ゆゑ十兩の工面だつてお恥しいが直には出來ぬ私の身體、どうせ旦那に泣附て出してお貰ひ申すより外は有ません』と屈託顔に清吉は兼て野心の坪に陷つたりと心中に諾いて『そりやァ濱村さんに理を咄して賴んだら否だと云ひなさる氣遣エは有まいが詫言をする矢先に情夫の手切の金の無心は不味からうぜ……宜う御座エます私がどうにか算段を仕ませう』『エッ夫ぢや貴君が其お金までも……』『男が請合つたからにやァ決して御心配にや及びません是も乘掛つた船だ何事も私に委せてお

置きなせエ』と心の企謀を押隠し表面を粧ふ信切を久吉は深く悦びて『夫ぢや貴君宜いやうにお願ひ申ますよ』と金の算段、仙蔣への懸合萬端は清吉に依頼したりけり、清吉は快く引受け事の落着まで久吉を我家に止宿させ己は金の算段に奔走したるが早くも三日を過したり此間夜は臥床を並べ朝は一つ膳に向ひ打明けての親身話に自と二人の間には心通ひ怪しき中と云ふまでには至らざりしが其下心は已に打解けて居たりけり。清吉は漸くに五兩一分天引き月縛りと云ふ其頃では涙の出るやうな高利の金を借入れ之を懐中して猿若町に隣れる聖天町の新道なる仙蔣が家を訪れたり

第十五回

仙蔣は先に高輪にて久吉に別れてより絶えて音沙汰なければ密に送りの寅吉に言含め家の様子を探らせたるに久吉は江の島より歸りたる夜我家を飛出したる限り歸り來らず大騒ぎを爲て捜した所が久吉は吾妻橋の上より身を投ようと仕た所を通り掛りの人に助られ其人の手で旦那へ詫言最中なりと寅吉が歸りて唱しけるを聞き夫にしても我方へ音信の無きは仔細ぞ有らんと不審り居たりけり仙蔣が不審をなしたる折柄清吉が來訪に何の用とは知れねども取敢ず面會して來意を尋ねたるに清吉は仙蔣を高が女形の役者と見侮り頭より呑で掛りたる手切話し『私ァ美濃屋清吉と云て貴君と深

エ中で居た久吉の兄で御座エますが、ちやうど四日後の夜中でエ、したが久吉が突然に私の家へ遣て來て時に兄さん私や頓だ了簡違をしてお前も知ての通り歴とした旦那のお世話に成て居ながら仙蔣さんと云ふ女形と忍び合ひ夫が嵩じて是々の始末その一件がすつかり知れて旦那の腹立船宿衆の大怒り辻も柳橋には居られませぬ、夫に仙蔣さんと浮れたので金は入り其上に五兩十兩と何十度か仙蔣さんの無心それを才覺して貸したので首も廻らぬ程の借金、旦那に見放されちやァ立瀬が無いから寧そ身を投て死る覺悟切羽詰つた此場の仕誼不孝の罪は堪忍して下さいましと思ひ詰た久吉の覺悟。イヤ夫りや不了簡だ卿に死れちやァ第一に余が困るマア死のは少し待てくれいどうにか分別があるだらうからと漸々に說嫌して落着かせ夫から翌日柳橋に出向て船宿衆の吉川に話して見た處が旦那への詫言が出來ぬばかりか久吉が住で居た柳橋の家は旦那のもの其上に吉川が判を突て久吉が借た金耳を揃へてたつた今返せと酷い掛合ひ餘り人情の無エ男だとは思つたが理の當然にや敵はずに歸つて來て久吉と兄弟二人が差詰つた身の難儀。私も以前の通りの身の上ならナァニたつた一人の眞身の妹借金ぐれエは拂つて遣て好な男と連添して遣りますが五年前から商賣の損が嵩み身代を無なして今ぢやァ妹久吉の厄介どうにも算段の出來ぬ身體。エ、太夫さんどうしたもので御座エませう私一人ぢやァ分別が附ねエに由て御相談に上りました』と狂言書て述たるに仙蔣は扨はと早

くも悟れど素知らぬ顔にて『ハァさうで御座りまするか夫やァお困りなすつた事で御座りませう尤も久吉さんと御懇意に成たに附ちやァ橋掛をした人もあり種々入込だ理もありますが其な事はどうでも宜と後廻しの話にして清吉さん差向た所でお前さんの御注文はどう云ふので御座いますね』と反問に及びたり『サァどうと云て別に分別も無エがお見受け申した所が幸ひお前さんにやァ未だ細君も無い樣だからお前さんが久吉の借金を綺麗に拂つて久吉を女房にして私と私の家に居る久吉の叔母とを立養に仕ておくんなさるのが一番の望さね』『ムゝ成ほどソリヤ一番のお望でありませうが夫が出來ずば』『夫が出來ずば私の手で久吉を馆町なり日本橋なり他場所へ出勤させるから借財の話を附るのと廣め其外の入用をお前さん大儀だらうが算段しておくんなせエ』『よく分りました。したが夫が出來ずば』『夫が出來ずば仕方が無エ夫も是も災難に遇たと思つて私ども兄妹が身を苦しめて工夫を仕ようから太夫さんお氣の毒だが貴て久吉が是までチョクゝお前さんに見繼だ金の中を何程か趣意に出して呉て綺麗さつぱりと手切に仕ておくんなせエ何も私が初めてお前さんに逢て野暮を言度ことも無エが有樣は久吉が身の振方に困つたゆゑ詮方なしの御相談、それに當時日の出の立お山大和屋の太夫さんが是々と評判されちやァ當人がどこへ出勤しても札付に成て商賣も出來ねエ仕誼だ當人ばかりか私に叔母との三人を見殺にするのが愛嬌を賣る役者衆の外聞でも御

座エますめエ此は一番太夫さん其積りで理を立ておくんなせエましお願ひで御座エますから』と詞和らかき中に凄味を見せて說出したり

仙藤は始終を打聞きて『成程さう聞て見りやァお前さんの仰しやる處も御尤もそれぢやァ久吉だけは私の方へ引取りませうがお前さんや叔母さんとやらは掛合の無い事だからどうとも勝手に成せエまし私の知つた事ぢやァ御座いません』と言放てば清吉は故と面色を變て『オイ太夫、戯談を云ちやァ可ねエぜ久吉を引取るからにやァ跡の二人も一緒に引取ッて立養ひにして呉るのは當然だ夫が否なら今云た通り久吉を他場所で稼がせるに出て貴て弘めの入用だけでも算段して出しなせエ何方も否だと云なさりやァ私の方にも了簡があるぜ』と云ふ顔を仙藤はジロリと見てフゝゝムと冷笑つて『オイ清吉さんとやら幾ら口が横に裂て居るからつて怖面臺詞の出たら目にも程があるぜ夫に微懼つくやうな男だと思ひなさりやァ的が違ふぜ役者商賣をして眉を刷り女の眞以はして居ても東海道から中山道奥州路まで股に掛け何所の親分誰の身内と肩書付の長脇差その連中と附合て怖い出入の賭場中をいさくさ言はれず渡りを付け通つて歩く旅雀少しやァ名前も知られた男、失禮な事を云ふ樣だが内會を突當たり女子供をいぢめ散し些ばかりの掠を取り夫を渡世にするやうな遊人とは理が違ふぜ、お前さんは御存知もあるまいが第一久吉に兄妹は有りませんぜ雜物話りに聞て置た久

吉が身の上咄し藥の上から他人に貰はれ未だ小阿魔ッちよの時分から奥山の矢場に出され夫から十四の春に成り養母の慾張から柳橋の伊勢屋へ三十兩で抱に遣られ今ぢやァ親子の縁切て養母は根岸に居ますぜ夫に久吉は此春自前に成つたとき旦那から金を出して貰ひ綺麗に借金濟を仕た女、貯へと云ちやァ無らうがお前さんの云ひなさるやうな酷い世話場で無エ事は誰より私が知て居ますよ又お前さんが吉川へ往て濱村の旦那に會ひ久吉の詫も内々濟んで居る事まで私やァちやんと知て居るぜ夫が嘘と云ふならば是から一緒に柳橋へ往き吉川の親方に逢て聞て見ても宜う御座エます……エェ清吉さんお氣の毒だが面を洗つて出直してお出でなせエな』と思ひの外に手強き返答、素性を見せたる一個の悪徒、其上に一々圖星を指たる灸所の手詰に清吉はハット思ひしが其所はさる者、這は出損じたりと急に打て變りて『こりやァ私が悪かつたさうとは知らず尋常の俳優と思つてお前さんを見損つたは私の不念、御免なすつておくんなせエハ、、、ハ』と打笑へば仙蔕も點頭きて『お前さんの方でサウ碎て出なさりやァ私だつて野暮は言ねエ理を立てお呉なさりや隨ぶん綺麗に手を切て遣りませう』と云ふに清吉は『ム、流石は太夫だ話やァ早エが宜い、そこで有やうは金の一本ぐらゐ都合をして上げ度のだが此矢先で算段も出來ねエから太夫、少なからうが我慢をして其半分で勘辨をしてお呉なせエ是とても私の手で工面をした涙の出るやうな金、不足だらうが其を趣意に

綺麗さつぱりと他人に成てお呉なせエ』と切出したる手切の金高を、仙蔕は思つたよりも上首尾と心に悅び『實は纏つた金ならと思つて居るが宜う御座エますお前さんの顏を立て何にも云ずに其で手切と致しませう』と綺麗なる承諾に清吉は財布より二十五兩包を二つ取出して『念の爲だ太夫一筆書ておくんなせエ』と云へば仙蔕は心得て硯箱を持來り半紙を延べ筆を執りて『そこで此書付へは金高を何程と書きますね御注文があらうから仰しやいましな』と尋ねたり清吉は思はず膝を打ち『ム、有繋は大和屋の太夫、恐入つた夫ぢやァ百兩と書ておくんなせエ』『ナニ百兩だエ、……五十兩の上前は隨分酷いねエ』と笑ひながら百兩請取たる積にて手切の一札を認め金子と引替に清吉に渡したり清吉はヤァ有がたう御座エましたさつぱりと話が付た何れ其中に又緩くりお話に上りませう』と暇を告げて立出でたり

第十六回

久吉は清吉がどんな掛合をするか仙蔕が何なる挨拶をするか役者でも一通りで無い男甘く話が纏まれば宜がと氣遣ひ居たる所に清吉は歸りて『マァ宜い鹽梅にやつと話が附ました御安心なせエ』と云ふにぞ胸の痞が一度に下りたる心地して『オヤ夫はマァ有難う……よく先で承知しましたねエ夫

で氣が霧々としましたよ』『餘まりさうでも有まいが斯う云ふ絶に成りやァ仕方が無いと諦めるさ』『ナァニ私や其んなに未練が殘つてるのぢや有ませんよ併し先ぢや定めて勝手な文句を並べた で御座いませうね』『そりやァ仙蔣もふて腐れで最初は兎やかう理窟を言たもの、遂にはお定まりで金に轉んだ手切咄しに望み通り百兩と云ふ金耳を揃へてずらりと渡し後に煩エの無いやうに一筆書せて來ましたのさ』と仙蔣に認めさせたる書付を久吉に示したり久吉は之れを見て『此の手切の百兩は直にお返し申さねば成らないのでエすが誠に濟ま無い事ですが今と云ては私もてつきり算段に……』と言掛けて困じたるを見て取り清吉は『ナーニそれやァ今で無くとも宜う御座エまさァ御都合の宜い時にお貰ひ申ませう……時に善は急げだ私ァ是から吉川へ往つて此書附を吉兵衛に見せ何でもお前さんを元の鞘に納まるやうに話を附て來ませうよ』と證文を懐中なし再び柳橋へと赴きたり

斯て清吉は吉川の吉兵衛に會ひ彼一札を見て『私が成エ中で漸と百兩算段して此通仙蔣と手を切せました附ては兼ての話通り是を庫に濱村の旦那へ表面のお詫を親方、お前さんからお賴み申ます』と依賴に及べば吉兵衛も清吉が俠氣ある行ひを賞讃へて取敢ず使の者を濱村へ走らせたり使の者は歸りて今に出向けば清吉君には暫時お待下さるやうにと濱村の口上を傳へたり依て清吉は濱村を待

ながら吉兵衛との雜談に時を移しけるがやがて篤之丞も吉川へ來り清吉吉兵衛の兩人が改めて久吉の詫事を爲すを聞きて『勘辨の成惡い所だが兩人の顏に免じて今度だけは許して遣らう』と承諾をぞ仕たりける是から酒食を命じ藝者を呼びて清吉を饗應し數日來の氣鬱を發散して興には入れる樣なれど濱村が心には肝腎の久吉が此席に居合せねば何か物足らぬ樣にぞ見えたりける清吉はさこそと察し程合を計りて暇を告げ座を立てば吉兵衛は明日改めて久吉の迎ひに參るべしと告げ諸事を打合せて中の鄕へは歸りたりその翌日吉兵衛は駕を吊せ手土產を用意して清吉が家を訪ひたりければ久吉は『親方お前さんに會せる顏は有ませんが清吉君からお話した通りの理ゆゑ只望勘辨を仕ておくんなさいまし』と心底より誤まり入たるは常にも似ずして神妙なり吉兵衛は『ナーニ其樣に誤るにやァ及ば無エ併し清吉君に委しい話を聞くまでは何樣に心配を仕たか知れねエよ』と云ひつゝ手土產を清吉の前に出して『こりやァほんの今日出た驗で御座エます何れお禮には改めて出ます』と口誼を述れば清吉は一禮なして受納し『夫ぢやァ親方萬事のお話しは後にして久吉さんをお引渡し申ますぜ』『エヽ確に受取ました』と久吉を駕に乘せ暇を告て柳橋へぞ歸りたる久吉は先づ吉川家に入りて女房を初め船頭女中一同へ心配を掛て騷がせたる非を謝し居たる所に槇町の旦那のお出と報知の聲に久吉は身體中に響き渡る如き思を爲し胸に動悸の波を打たせたるが家は狹し隱るゝに

處は無し詮方なければ小さくなりて中の間の火鉢の側にすくみ居たりけり濱村は尻目にじろりと打見やり何にも言はずに二階へ上りたれば吉兵衛は頓て久吉を連て前に出でたり久吉は只『幾重にも御勘辨を……』と繰返して述べつゝ首を壁に附たる許りにて外に言出る詞も無し濱村も此體を見て忽に不憫の念を起し『エヽ久吉是からは氣を注て余の顏に泥を塗ら無エ樣にするが宜ぜ』と物柔かに云ひたる簡短の一言は久吉が耳には千百の雷が一度に落たる樣に徹へたり其後は吉兵衛が眞綿で首の意見總身はびッしより汗に成りヤッとの事で詫が濟み勘當御免と成たれば有繋の久吉も是に懲々して此上は役者狂ひは愚かな事平井權八に附文をされようが大工の六三に口說かれようが弗つり浮氣は仕まいと深く慎み貝管濱村が寵愛を恢復せんものと腕限りに勤めたり

清吉は久吉が危難を救ひたる命の親ではあり殊に仙蔣を說得して手を切らせ其金まで立替たる恩誼はあり三日に上ず久吉が家に來り諸事に心添して信切を面に見せたりけり。最初の程こそ清吉は現在我手に掛たる文龍に生寫しの久吉なれば顏を見る每に何となく怖氣も立たるなれ元來好色の漢なれば恐怖の念も何時しか消失せて久吉が艶容に屬魂惚込み煩惱の犬は逐へども去らず意の駒は繫げども猶狂ひて我と我心を苦しめぬ。されども久吉は仙蔣に懲り成田の不動尊に立願して酒と浮氣を封じ箍め旦那を後生大事と守り以前に打て變て眞目に成たれば乘ずべき隙間も無く徒に心を惱ま

すのみにて窃に機を待たりけり。或日黄濱頃に清吉は久吉の家を訪ひて『久吉さんはお家でエすかいと』音信へば久吉は出迎へて『オヤお出なさいましマア此方へ……』と常に變らぬ如才なき接待ぶり清吉は『いま横山町まで用が有て來たのだが空模樣が變つて今にも降出しさうに成たから傘を一本お借り申して歸らうと思つて……』『さうでエすか夫はお安い御用……だが御膳前でせうから夜食を上つて往らッしやいな』『ナーニ飯は家へ歸つて喰から宜う御座エます』『デモ今鰻を言て遣た所だから一膳お附合なさいましな』『ア、さう爲さいよ……婆アや氣の毒だが酌儀に往て急て來てお儀無し御馳走に成ると仕ようか』『ア、さう爲さいよ……婆アや氣の毒だが酌儀に往て急て來てくれな』と命ずる折しも『ヘエお誂でございます大きに遲く成りました』と岡持の中より蒲燒の箱に土瓶と香の物を添て差置たり。下女が持出す膳を兩人が中に据て久吉は火鉢に掛たる鐵瓶にて酒の燗をなして『少し微溫かも知れませんよ』と猪口を佈むれば清吉は飲干て『ちやうど好いお燗だ』と久吉に指し互に受けつ指つして差向ひの小酒宴、久吉は微醉に成りて『サア清さん遠慮なしに多量上つて下さいな……私アモウお酒は可ませんよ此上戴くと又貴君の御厄介になるやうな氣でも出ちやァ大變ですからよ……夫に附ちや貴君に立替て頂いた百兩のお金永引て濟ませんが近々の中には屹度都合をしてお返し申ますからどうぞモ少しの所を……』と言掛けたるを清吉は打消して『ナ

ーニ改まつて言譯にやァ及ば無エよ何時でも都合の宜い時に返しておくんなさりやァ結構だ……其な事はどうでも宜が尊姐も斯して居ちやァ氣樂な樣だが實は詰ら無いね好な酒を飲て旦那の機嫌氣褄を取て別に是と云ふ見掛た山が無ッちやァ氣の利か無エ話だね』と心に一物ソロ〳〵水を向れば久吉は『でも仕方が有ませんよ旦那に捨られた日にやァ又吾妻橋ですもの』と微笑を含める答の詞に清吉は眞面目になり『ダカラサ私が悪智恵を附るぢやァ無エがいつ何時お拂箱を喰ても驚か無エやうな覺悟を不斷から仕てお置なせエな』『其樣甘い工風を仕ようにも信身に私の相談相手に成て呉る人は無し私一人の女の智恵では所詮出來やァ仕ませんやね』『愈〳〵尊姐に出來無けりやァ及ばずながら私が相談相手に成て上ようか』『甘くお言だね愈〳〵と成たら御免とお言ひなさる癖に』『ナニそんな事があるものか眞實頼まれりやァ身に引受て』『本統に貴君が其工風を……』『本統も嘘も有るものか……其工風と云ふのはマア斯だ、旦那に金を出させて船宿の株を買つて貰ふか又は小料理屋を出して貰つて尊姐が其主婦に成るのだ其上で旦那を失敗らうと失敗まいとこつちに根城が出來て居りやァ少しも驚く所はありやァ仕ねエ……エ、久吉さん是は女子の覺悟と云ふものだよ』と說明すれば久吉は小首を傾けて『そりや好工風に違ひは有ませんが漸と勘當が赦た所で其んな話を仕たからッて大丈夫旦那がお金を出してくりやァ仕ませんよ』『所が大違エ旦的に金を出さ

せるにやァ今が一番好潮時だぜ併し其にやァ又話の仕向に色々傳授の有る事でッィかうと言へるものぢや無よ……オヤ〳〵酷く降出して來たぜ』と耳を欹つれば軒の雨だれ瀧なして風さへ少し吹出て窓うつ音ぞ次第に激しく成り增りたる

清吉は態と困じたる體にて『こりや酷い天氣に成て來た此風雨ぢやァ傘も何も堪たものぢやァ無エ辻も本所の河岸ッ端を歩行めエ……久吉さん氣の毒だが今夜は此へ泊てお呉なせエな』と云ふに久吉は旦那の手前宜しからずとは思ひたれども盆を傾くるが如き大雨の中をお歸りなさいと素氣なくも言れず如何せんと躊躇ひけるがどうせ今夜は濱村が來る氣遣は無し清吉を一泊させたればとて知れる事も有まじ縱や知れたりとて此方に曇りが無ければ疑はるゝ筋も無しと思ひ決して『アゝ宜う御座いますとも狹くて宜ければお泊りなさいましな』と承知したれば清吉は思ふ坪と心に笑て『そりやァ有難エどうして此風ぢやァ我慢にも外は歩けやァ仕ねエ……サアも一ッお交杯と仕ようぢやァ無エか……ナァニ一ッや二ッ過したからつて大丈夫だね……乃で今の話だが私が何も勸めるぢやァ無いが尊姐がさうと決心が附たら些とも早エ方が宜いぜ』と云へば久吉は『夫にしても貴君が旦那に口を切てお呉なさいますかエ』清吉は點頭て『さうさね他に人も無らうから悪い役だが私が口を切て話し出して上ようが所で旦那は何時此へ來なさるね』『さうでェすね何時と言て確な事は知

れませんが明後日あたりは入ッしやるだらうと思ひますよ』『夫ぢやァ明後日正午過から來て見よう……ナンの巧く話をして先の胸にはまりせエすりやァ何だつて金は差支は無エのだからきつと出來るに違エ無エ、幸ひ船宿の株が賣物に出て居るから……』とハヤ我手に入つたるやうに請合へば久吉は『何分お賴み申しますどうぞ巧く遣ておくんなさい』と只管依賴したりけり

第十七回

雨は小止なく降しきり風は次第に加はり夜も漸く更ゆけば久吉は二階に床を敷かせて是を清吉の臥戶と定め己れは下なる中の間に今夜は打臥す積に支度を爲し『サア二階に往てお休みなさいまし』と清吉を案内し諸事世話を爲し猶も四方山の話に移りたるに清吉は情慾の燄を我と制し難く久吉の手を取りて引寄せ平素は深く慎みたれども良き機なれば心底を包み隱さず申すなり卿が粹な艶姿に心迷ひて我ながら怪しき迄に戀焦れ今時不似合の言草なれど畫は幻夜は夢寐覺がちなる秋の夜を明し兼たる煩惱の募る思を流石に斯とも言出し兼て悟れよがしと振舞へど何時も卿が素知らぬ樣なる舉動こそ恨みなれ下世話にも魚心あれば水心は卿が心一つにて善惡二つの岐路可愛さ餘つて憎さが百倍と云ふ事は卿も知らぬには餘もあらじ心を定めて色よき返事を仕たまへと熱心見えて口說き

たり久吉は取れし手を其儘にて私のやうな女を夫程までに思ふて下さる御心は嬉しけれど若し此事が旦那の耳に入る時は折角の目算も水の泡悔で返らぬ失敗は御存知通りあるものを二度くり返すは愚なり事成就の其上では此身は卿の心まかせ否やは言じ岩清水の苔の下ゆく心をば卿も少しは汲ねかしと色氣を持せた斷りに清吉は頭を掉りて其甘き詞に浮つかり欺さるゝ清吉ならず卿が爲に盡したる實意は今更云ずもがな此後とても一通りの骨折にては成るべき事ならず狗骨折りて鷹とやら何なる鷹が何處より羽を伸して來ようも知れず末の約束を當てにしたは江戶が武藏野と云ひたる昔の事ぞかし殊に此男が仙濤ほどの美男なれば旦那の疑ひも有るべきが見らるゝ通りの醜男たとへ喰が立つとても眞實と思はれぬが是醜男の德なれば何の恐れの有るべきぞ斯て否と言張らば此方にも了簡ありと利害を說きて返事如何にと迫りたり久吉も是まで受たる恩誼は有り賴むべき大事は目前に控へたり宜しとは心に思はねど拒み難き事情に搦まれて引るゝ儘に身を寄せて仇なる夢をぞ結びたり

夜も明け雨も歇たれば清吉は何氣無き體にて暇を告て久吉の家を立出たり。久吉は下女に小遣を與へて『清さんが泊つた事は必ず人に言では無いよ』と堅く口止を爲したれど猶心の中には安からずや思ひけん遂ぞ例の無き朝詣り藥研堀の不動尊の前に叩首て、あはれ此事人の耳に聞えぬ樣に守ら

せ玉へと祈誓を凝したるぞ可笑き。一日置て濱村は久吉が家に來れり疵持つ足の久吉は何時もよりは一層心を用ゐ媚を盡して待遇したり兼て牒じ合せたる事なれば清吉は近所まで川邊に來りたればその序に立寄りたる體にて入來り『旦那がお在とあれば丁度好い幸ひ、ちよつとお目に掛つてお話申上たい事が御座いますれば……』と久吉を以て取次せたれば濱村は『それは宜い所で有つたサアサア此方へ』と隔意なき挨拶に久吉は安堵して清吉を伴ひ出だり。濱村は一揖して『ヤア美濃屋さん此間中は久吉が一方ならぬ御厄介になつたさうで未だ私からはしみ〴〵お禮も申さず御不沙汰を致して居ります』と挨拶を述ぶれば清吉も叮嚀に時儀をなして『其お詞では恐入りまする又此間は吉兵衛を以て手厚いお禮に預り有難う御座エます』と會釋に及びたるが是は久吉の詐言が濟だる後、吉川の亭主が濱村の指圖を受けて清吉へ謝禮の金品を贈りたる其禮なりとは知られたり。濱村は少し四方山の話をしたる後『時に美濃屋さんお急ぎで無けりやア一酌上たいが代地の巴屋まで私と一緒にお出なすつてはどうだね』と誘へば清吉は渡りに船と心中にては思ひたれど顏色に出さず『誠に有難うは御座エますが私ども風情が旦那のお供を致して巴屋なんかへ參りましては如何かと存じまして……』と態と遠慮の體を見すれば濱村は『ナーニサ貴君が忙がしい用が有て駈廻つて居なさる所を邪魔しては好ないが私へ遠慮なら決して其な斟酌には及ばぬ事ヤア一緒にお出なさいな』『夫ぢやア御遠慮無しにお供を仕りますで御座りませう大きに有がたい事に御座ります』と遠くもあらぬ橋向ふ濱村と打連て清吉は巴屋に赴きたり。それ槇町樣のお出と巴屋にては女中等が座敷に案内して下へも置かぬ接待に濱村が平素の全盛も知られたり。濱村は酒肴を命じ清吉と差向の小酒宴如才無き清吉が口前、酒の相手の浮世話にいとゞ興をぞ添たりける清吉は徐ら膝を進めて『旦那の前ぢやア御座エますが私も是まで多くの旦那衆にお附合を致しましたが貴君の樣な大氣なお方は少う御座エますよ實に今度の久吉さんの一件に附ましちやア生利な事を申す樣ですが恐入つて居りまする……どうして〴〵お世詞どころか全くの事で御座エます乃で私も久吉さんにあんなもの事の分つた意氣なお方は江戸廣しと雖も恐らく二人とは有りやア仕ねエ夫を假初にも疎略に思つた日には冥理は盡るから大切にお仕なさり無エと天道樣の罰が當るぜと吳々も意見を致しましたれば久吉さんも涙を流して旦那の優しいお心に愧入て私もスツカリと了簡を改めました只望長い目で見て居てお吳なさい附ては浮氣渡世の藝者をして居のはモウ否で〴〵ならぬと眞底からの身の上咄し成程ア、云ふ風に浮れ藝が離れた日にやア氣の拔た酒見た樣でお座敷も勤め悪し否な事をお客に言れ程よく接つて斷るのは當人も辛いで御座エませう併し其樣子が旦那のお目には知れませんで御座エますか』と意あり氣に裏問へば濱村は『そりやア貴君の言なさる通りであらうと私も推察を仕

て居るが當人は私に藝妓を引せて貰ひ度と言て居るのでエすかエ』『イエ當人はお詫早々そんな鐵面皮いお願ひは旦那に出來ないと諦めて居るやうで御座エます……さうは申しますもの、貴君は久吉さんを行末まで世話をしてお遣り爲さる思召で御座エますかお隱しなさるにやァ及びません私だけには内々でお聞かせ下さいまし』と尋ぬれば濱村は微笑ながら『そりやァ久吉の料見次第さ今度のやうな不始末を仕出來さ無けりやァ此方は生涯世話をして遣る積りだね』と答へたり。清吉は殊更感心したる體にて『承はれば承はる程涙が出る位な御信切久吉さんも此後は心得違をする樣な事は決して有ますまいが私も及ばずながら時々は意見も致しまするに由てどうぞ御不悶を願ひまする』とさも實着を見せて述ければ濱村は『サア今も云ふ通り私は生涯見捨てぬ氣だけれど彼女も根が隨分浮氣ッぽい藝者だもの此先またどんな事があるか知れやァ仕ないよ其時は仕方が無い止してしまふ迄の事さ』と淡泊なる語氣に清吉は眞目腐つて『サア其處で御座エます仰しやる通り大勢のお客を相手の藝者たとひ當人に其氣は御座エませずとも何な機で何な間違エを仕まいものでも御座エません其事が旦那の御耳に入り御勘氣を受た日にやア柳橋は素より廏町日本橋、旦那のお名前を知つた土地で商賣は出來ません據なく宿場藝者に成て稼ぐより外は御座エませんサアさう成た日にや彼は濱村の旦那が世話を爲すつた柳橋の久吉の成

の果だと第一に旦那のお名前が先に出て失禮ながら御外聞にも關はる話そればかりで濟めば宜う御座エますが惡虫でも附て御覽じませどんな事を目論で旦那のお宅へ上り込み恥も外聞も構はずに否な無心を申すかも知れませんぜ久吉さんの事だから豈夫そんな事も無らうとは思ひますが怜悧なやうでも女子は女子浮かり人の煽動に乘ら無いとも申されません……とは餘計な取越し苦勞それも折角旦那の御信切を仇にさせまいと思ふからで御座エます生涯世話をして遣ろお心で御座いますなら迚もの事に藝者を止させ當人の身が固まり安心が出來ますやうな事に仕てお遣り爲エましては如何で御座エます』と露骨に夫と云ねども自と知れる久吉が廢業の嘆願、濱村は大に尤なりと思ひて『貴君の云ひなさる趣意は分つて居るが今久吉を落籍せて表向に妾宅を拵へ住はせて置と云ふ理には成兼るよ』と云ふを清吉は皆まで聞かず『夫や仰しやる迄も無く表向き妾宅と申しては御稼業がらと云ひ御親類方への御遠慮も御座エませうが世間へ知れさへ仕なけりやァ宜しいでは御座エませんか『所がさう云ふ理に往ないから困るよ』『イエ大可で御座エます失禮ながらお金にお不自由の無い旦那の事船宿か待合の株でも買てお遣りなせエまして表向は久さんが名前主で其實は旦那のお家と云ふ事にして置けば大丈夫世間へぱつとする氣遣は御座エません』『サア其船宿か待合の株が有れば宜いが』と乘出したる話に清吉は占めたと思へど色にも出さず『何の無い事は御座エますま

い此間もチラと聞込ましたには米澤町の水野屋が家と船を商賣道具一切附で賣物に出て居るとの噂詳しい話は聞きませんが屋根が二艘に小舟が四艘有て何もかもでは八百兩に賣たいとの事で御座エます尤も言値は八百兩ゆゑ愈〳〵と云ふ話になりやァ少しは負るで御座エませう』『イヤ八百兩が九百兩でも宜いが其で久吉の了簡が固まらうかね』『そりやァ固ります段か彼女の事ですから丸で人が變つた樣な長しい質に成るのは請合で御座エます現に貴君、今戸の金波樓を御覽なさいまし清住町の旦那のお世話であの通り仕上て立派に遣て居るぢや御座エませんか男は當つて碎けろで御座エます旦那マァ欺されたと思つて私が申す所をお聞なすつて水野屋を買て久吉さんに遣らせて見ちやアどうで御座エますね』と說付れば『では先づさうするとしてお前さんから其事を久吉へも話し吉川の吉兵衛へも相談して當人の心底を篤と極させてお呉なさい金は入るだけ私が出して遣りませう』と有繋は立派な紳士として綺麗に承諾したりければ清吉は大に悅びて『私の樣な者が申上た事をお聞濟下すつて有難う存じまする』と慇懃に禮を述べたるは人の氣受を取るに拔目の無き曲者なり濱村は深く清吉を信じ上機嫌にて其日は巴屋より駕を命じて歸りければ清吉は其足にて久吉が家に寄りたりけり。

第十八回

久吉は清吉が顏を見るより『首尾はどうでした』と尋ぬれば清吉はニッコと笑て『マァ話は後にして何か奢るが宜や』『オヤさう夫ぢや話は上出來の方でエすかエ』『まァそんなものよ』『エ、本統に上出來なんでエすか……奢りは後にしてどんな話に成つたか早く聞せてお呉なさいな』と大悅にて急立つを清吉は誇り顏に濱村への懸合を倍徒にして話したり委細を聞て久吉は飛上るばかりに悅びて『實の所は幾ら氣前の宜い旦那でも大金の入る相談ゆゑ尋常一通りの話ぢや承知を仕まいと思つて居ましたが夫が唯た一度で如此に宜い都合に往たのは全く貴君の話の向方が甘かつたからでエすよ』と感謝すれば清吉は打笑ひて『强氣と油を掛けるぢやァ無エか何にしろ私ァ是から吉川へ往て吉兵衛を甘く說付て來ようよ下手ァして彼奴に邪魔をされちやァ大變だからね』と云ひつゝ立出るを久吉は送り出で『歸りに寄てお呉なさるだらうね』と情を籠たる詞に清吉は振返りて『それは都合に仕ようよ』と故と氣を持せて立出で吉川に至り吉兵衛に會ひて『時に吉兵衛さん今日久吉の家で圖らずも濱村の旦那とお目に掛り巴屋へお伴をした所が旦那の仰しやるには久吉も彼以來は生れ變つたやうに眞目に成た樣子だから船宿の株でも買て足を洗せて遣り度とのお話、丁度水野屋

が賣物に出て居ると聞込んだを幸ひに旦那にお話をした所が安けりや買て遣らうとお許が出たのだが前々から久吉の事ぢやァお世話に成た貴君を差置て私が勝手に世話をすると云ふ理にやァ可ねエ殊に船宿商賣にやァ丸ッきしの素人だから萬事貴君の智恵をお借り申さにやァ成ねエ事ゆゑ御相談に來ました』と事實を僞りたる體よき話に惡氣無き吉兵衛は少しも疑はず『そりやァ結構な話だ久吉さんの爲になることなら私も重疊だ斟酌なしに世話をして遣てお呉なせエ尤も水野屋の掛合は貴君の都合次第で私が口を利て上ても宜う御座エんす』と隔意なき挨拶。清吉は占たと心に領きて『夫ぢやァ水野屋への方は貴君から話して見てお呉なせエ』と依頼し尚も彼此の相談に時を移し吉兵衛を甘く同意の味方に付けて立出て再び久吉が家に來れば久吉は酒の支度をして待居たり兩人は對酌の微醉機嫌に嬌きたる密々話『……今でこそ其樣な程の宜い事を云つて居るが大願成就の曉にやァ大きに御苦勞お茶でも上れを極る積だらう』『アラ止て下さいよ其樣な不實な私なら東橋から投身をする氣にや成ませんよ斯人と思ひ込だら石にかぶり附ても離れる事の出來ないのが私の病だよ』『デもあるまいぜ彼仙蒔はどう仕たものだえ』『ありや貴君最初つから此人だと思込んだので無かつたのだもの』『ぢやァ當座の慰み食だつたね』『マァそんなものさ』『デは余も矢つぱり其お仲間にされるのだね』『戯談お言で無いよ……是くらゐ心を明し合た中で貴君も餘つ程疑り深いねエ』と流目に清吉を打見やりたり

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吉兵衛は清吉が依頼により早速米澤町の船宿水野屋の方を掛合ひたるに先方にても顔の良き吉兵衛が直の話ゆゑ八百兩の内を五十兩負け手取七百五十兩ならば賣渡すべしとの返答に吉兵衛より斯と清吉に通知し且つ其ならば安き物なりと保證したり。依て清吉は濱村に對ひ吉兵衛を以て懸合せたるに水野屋では七百五十兩にて賣るとの事にて吉兵衛も格外に安いと申す事なりと有の儘に話したるに濱村は已に吉川より其事を聞居りて全く符合したりければ益〻清吉を信じ然らばとて七百五十兩の外に久吉が落籍の祝ひ船宿の名變り弘め其餘の入費として二百五十兩都合千兩を出し與ふる事に成りたり清吉は此間に奔走して幾許の利を占め猶久吉が家を賣せて立替金の百兩を受取り造化宜しと悅びけり斯て九月に至りて久吉は花やかに藝者を引きて船宿を開業し水野屋お秀と名乘り濱村が懇意の者を水野屋の客に引付け清吉の權次は通ひ番頭の如くにて帳場を預り居たりけり

第十九回

此に住吉町の新道に山彦綱子となん呼べる河東節の師匠あり其頃世に名高き江戸太夫河東の三味線

彈山彦源四郎の門人藝は差たる上手にはあらねども人を外さぬ調子の好と酒席の上の取廻しの巧とにて繁昌し或は風流紳士成は時好藝者などに若干の弟子ありて宅稽古もすれば出稽古にも歩きたり齢は四十路を越えて二ッ三ッにも成けん額に寄する皺の波は人生幾多の酸苦の嵐に遇ひたるを顯し大きらかなる眼の緣の少し黑ずみて鼻筋の一入高く見えたるは愛嬌よりも凄味の方ぞ多かりける但し見立ほどに垢が拔けて姿のスッキリとして意氣なるに至りては昔の名殘の偲ばれてそれ者の果と知られたり抑此女を誰とかなす是なん其昔し深川にては富本豐綱大阪にては江戸師匠お綱が化身にてぞ有ける、お綱は前編に述たるが如く文龍が横死に大阪の世帶を疊みて江戸に歸りたるが此頃富本は既に廢れ清元替りて流行を極めたれば一時は家内太夫の門人になり　清元延綱と名乘り師匠なしたれども思はしからぬより源四郎に附きて河東節の三味線を習ひ山彦綱子とは名乘れるなり

一日お綱は或る客に招かれ大阪町の百尺の樓にて河東節の三味線を二三段彈きて暇を玉はりイザ歸らんとて座敷を下り帳場に來りて女將に挨拶すれば女將は如才なく愛なして『マァお師匠さん話てお在なさいよ』と引止め四方山の世間話、折から是も同じ座敷で呼れたる馴町の小三が小川を達して帳場の側を通り掛りたるがお綱を見て『お師匠さん今日の常陸帶のお三味線は格別に面白う御座いましたよ』『どう致しまして私なんぞのはホンノ河東の眞似事とても皆さんの前でお聞に入れる

藝では御座いませんよ』『イエ本統に結構で御座いましたよ……アリャ全體狂氣の女が子を尋ねて居ると云ふ淨瑠璃なんでエすか……昔も今も人情に替りは有ませんね』と何氣なき小三が話にお綱は藥の上より他人に遣りたる我子のお秀が事を想ひ出だされて思はず胸に徹へたり。女將は斯とも知らず『親子と云へば何時ぞはお師匠さんに聞て見ようと思つて居たが柳橋の久吉さんは貴婦のお身内で御座いますかエ』と唐突に尋ぬれはお綱は變な顏をなして『イヽエ其樣な藝者衆は存じませんよ』『オヤ夫ぢや他人の猿似とやらでエせうかお師匠さんに能く似て居ますよ、ネエ小三さん……』『さうで御座いますねお師匠さんと久吉さんとは親子のやうでエすね』『だから私ァお師匠さんの身内ぢや無いかと思つてお聞申したのさ』と兩人の話にお綱は若や夫かと思ふ心を深く包みて『其樣に私に似て居る藝者衆なら一度顏が見たう御座いますね』と云ふ後を小三が引取りて『久吉さんは近い中に藝者を引て船宿を初めると云ふ噂をチラと聞ましたよ』『オヤさうかエ夫ぢやいづれ祝ひに往て遣らざァ成るまいから其時お師匠さんを一緒にお連申してお近付に仕ようぢやァ無いか』と相談したるは兼て懇意の間柄と見えたりけりお綱は悅びて『是非その節は御一緒に願ます』と吳々頼み聞え『夫ぢやお婦人御免なさいまし、小三さん左樣なら……』と暇を告げて立出たり是久吉が水野屋に移る前の話とは知られたり

其後半月ばかり過てお綱の許へ百尺の女將より愈〻久吉が柳橋を引き船宿水野屋の後を引受けたればば今日祝ひに往く積なり御都合次第で御一緒に參るべしと言越したり。お綱は待設けたる事なれば承知の旨を答へ支度も匆々に少しの手土産を携へ百尺を訪れたりやがて女將も同道にて遠くもあらぬ米澤町の水野屋へ赴きたるに恰も好し久吉のお秀は居合せて『オヤお婦人お出なさいましサア此方へ……』と如才無き待遇に百尺の女將は携へたる祝の品を出して『コリヤはざつッとお店開きのお祝だよ』と特別の心附にお秀が禮の詞をソコ〳〵に聞流して女將はお綱を指さして（久吉さん……オヤもう久吉さんぢやァあるまいねエ何と名をお替なすッたね……さうかへお秀さんと……そりやァ好お名だね、それぢやお秀さんのお上さん此方は河東節のお師匠さんで山彦綱子さんと云つて私とは極仲よしだからお前さんもお心安くして是からは最屓にして上てお呉んなさいな』と引合せたればお秀は『オヤさうでエすか只望お心安く願ひます』と隔なき初對面の挨拶畢りて茶よ菓子よと饗應したりお綱は熟〻お秀の顏を見るに眼鼻立口元は素より容姿音聲までも死したる文龍に生寫し若し是を大阪の藝子風に扮粧たせ死したる文龍を活して並び立たせたらんには孰れか眞の文龍なるか分ち難き程にて似たりや似たり花菖蒲燕子花と云へる芝居の臺詞も是には愧らずと思ふばかりなり孫ならでは爭で是程に似たる者の又と世に有るべきと只だ呆然と守り居たりけり殊には今この

女がお秀と名乘る由を聞きて扨は我兒に違ひ無しと心は飛立つやうなれど他人の前での初對面に遠慮は有り迂闊に尋ね問ふべきにあらずと思ひ直して浮世話に移り手厚き馳走に成りて其日は歸りけり。其後お綱は二三度水野屋を訪れたるが女子同士は打解け易き習ひ何時しか隔て無く語り合ふ程の懇意にはなりたりけり

一日お綱は今日こそは平素心に積りたる話を爲すべしと思ひ定めて水野屋を訪ひたるに折宜く此日はお秀の外に他聞を憚る人も居ざりければ幸ひなりと心に頷きて『何時ぞはお聞申さうと思つて居ましたが斯う見た所が阿母さんや嚴父らしいお方もお見受け申ませんが如何なすつたのでエすか』と遠廻しに尋ねたり。お秀は包み隱さず『義理ある阿母さんが先頃までありましたが餘り阿漕な事をするので親子の緣を切て了ひ今ぢや只た一人ぼつち樹から落た猿とは本統に私の事ですよ』『それぢや姉妹衆も……』『有ませんのさ、ダカラ如此に暢氣にして居るもの、考へて見ると心細う御座いますよ』と有繋女氣の打沈みて語りたり

お綱はお秀を慰めて『今ッから其樣な氣の弱い事を云てどうなるものかね私を御覽な一人身で大阪三界まで往て散ざつばら苦勞を仕て今ぢや生れ故郷の江戸へ歸り皆樣のお蔭でどうにか斯にか遣つて居るぢやァ無いかナンノ親類や身寄が無いからッて心細い事ァ有ませんよ』と云ふにお秀は『へ

エ夫ぢやお師匠さんも矢ッぱりお獨身ですかエ』『イヽエ私ァ若い時分に女の双兒を産で二人とも生涯音信不通の約束で養女に遣て了つたがね夫でも親子の緣は盡ないもので大阪で鬪らず廻り合ひヤレ嬉しやと思ふ間も無く實は其娘がとんだ災難に遭て敢無い最期を仕たのでよく〳〵の因果と諦めて江戸へ歸つて來たのさ』『そりやァァお氣の毒な頓だ事でエしたね……さうしてモ一人の娘さんは……』『サァ其娘は何所にどうして居るやら養親に連られて田舍へでも往て居るか夫とも江戸に居るのかサッパリ知れませんシタガ親子の情愛と云ふものは仕方が無いもので雨に附け風に附け無事息災で暮して居るか病煩ひは仕ないかと思は無い日は有ませんよ』と打濕りて物語ればお秀も共に常には似ず打沈める聲にて『そんなに親の情は深いものでエすかね』と怪しむ如くに云ひたりけり是も理にてお秀は藥の上より酷薄一途の養母の手に育てられ箸の上下しにも打叩かれまだ肩揚を取らぬ内より矢場に出され夫より藝者に賣られ辛き憂目に逢ひたる身なれば生の親の厚き慈悲と云ふ事は知らでありけるなればお綱が子を思へる詞を聞くに付け我身の不幸を悲み兩眼に涙を泛べて『さう仰しやりァ唄や淨瑠璃の文句にも燒野の雉子夜の鶴鳥類でさへ子を思ふに況していはんや人間に子を思ぬが有るべきやとありますが本統にさうでエすかね……私のやうな者でも生の慈母の身に成て見りやお師匠さんの樣に矢ッぱり案じて居るだらうと思ふと會ひたう御座いますよ』と

心の誠を顯せばお綱は『さうしてお前さん慈母さんの名を御存知でエすかエ』『夫は守袋の臍の緒書に書て有たので知て居すよ』お綱は扨と膝を押進め『何と書て有ましたエ』『サァ其には深川仲丁富本豐綱と有升たから私の慈母は其昔し私を生だ時には深川の歌妓であつたらうと思ますよ』と物語たればお綱も今は其へ兼て其豐綱は……と既に口まで出たる所へ入來れるは旦那の濱村なりお秀は話を中止して『お師匠さん御免なさいよ』と會釋も匆々に出迎ふればお綱は可惜話の腰を折られ木意無げに見たり。濱村はお綱を見て二階に上りけるが頓てお秀と對坐の淺酌にお綱も其席に招かれたり流石は深川以來の古兵のお綱調子を合せて巧に座興を添へたれば濱村は其技倆に感心して『失禮ながら斯う見た所がモウ四十を越して居なさる樣だが流石は老巧定めし話しに聞た深川仕込だらうね』と話掛ればお綱は打笑ひて『モウ貴公こんな婆ァさんに成ちや老巧は通り越して耄碌の方で何所仕込も有りや仕ません京唄の山姥ぢやァ無いがァラ恥しの我姿むかしに變る俤にて御座いますよ』との挨拶。濱村は愈々感じて『イヤ師匠にはまでが又格別だァ、際が有つたら今の若い藝者を多勢寄て置て師匠の深川ばなしを聞せて遣り度な私が施主に就ても宜ぜ』『イエどう致しまして今時の柳橋の藝者衆に比べて見ると深川の歌妓なんか唯馬鹿意地が張てるばかりで容姿でも言ふ事でも野暮なもので御座いましたよ私なんぞは其時分

にやァ意氣だと思つて居ましたが其頃流行た潮來をけふ日に聞て御覽なさいまし頓間な節で可笑いぢやァ御座いませんか』『流行唄などはさうでも有らうが歌妓の意氣な姿は迚も今時に眞似の出來無エ所が有たと見えて其が爲に身代を傾けた人が澤山有たとの話だ現に私の身内にも仲町の何とか云ふ歌妓に身代を入上げ揚句の果には汐入堤で非業な死やうを仕た者が有つたと子供の時分に聞て居たよ』と何氣なく語り出でたり

お綱は身に覺ある古疵に若や夫かと胸安からねども怖きもの見たしと云ふなる好奇心に驅られて『私も其當時そんな話を聞た事が御座いましたが失禮ながら其お方と仰しやりまするは……』と尋ぬれば濱村は師匠も聞たと有りやァ隱すにも及ばぬ事、實は山田屋德次郎と言つて私の伯父に當る人だよ』と言ふにお綱はぞつとして思はず面色を變へたるが悟られまじと差俯き要でも無き事を聞たりと心中に悔たりけり。抑この濱村篤之丞は發端に記したる如く富本豐綱に入れ揚て身を果した る山田屋德次郎が廢嫡の後に家督を相續せる同人の弟德次郎の二男なるが都合に依り幼少の頃より母の里方なる濱村の祖母に引取られ成長して濱村の養子になりたるなり故に德次郎は伯父に當り其子清吉とは從兄弟同士なれども篤之丞は濱村の相續人となりて槇町に住居ひ清吉は二十歳に成らぬ前に逃亡したれば篤之丞が五六歳の頃よりして互に顏を合せたる事も無く其上に清吉は逃亡の後は勘當の身と成りて山田屋へ寄附く事も成らざりければ篤之丞が濱村の養子となりたる事も曾て知らざりけるなり

お綱は話を他へ外らせ成たけ平氣を粧ひたれど心の影は自から言語に顯はれて何と無う心地よからねば好き程に暇を告げ濱村が與へたる過分の纏頭に仕合よしと立出で我家へ歸る途すがら思ひけるは濱村が德次郎と伯父甥の間柄と聞ては滅多に我素性をお秀に明されず若し浮かり明す時は汐入堤の一件が露見なし如何なる禍あらんも知れず危險々々先々親子の名乘遲ての事と深く舊惡を恐れ逸る心を自ら制し密に折をぞ待たりける

第二十回

十月三日は水野屋が名前替になりて初めての勘定日なれば清吉の權次は帳場に坐りて『コラ源公、岡崎屋へ往ての伊勢屋の書付の玉が違つて居るから瀧藏に來いと言て來な夫から其序に梅川へ寄て槇町樣の御勘定が疾に下つて居ますから直に請取に來てお呉なせエ片附ねエで困りますと言て來るのだ……オイ寅公、横山町の吉野屋さんの御勘定は下つたかエ……ナニまだ〻と困るぢやァ無エか平儿帳面の船賃まで立替させられちやァ船宿渡世が成ねエや……』と一人で帳場を受持て仕拂の勘

定に働き見する夕まぐれ入來れるはお綱なり『矢の倉へお稽古に上つたので寄ました』と言つゝ、打通る途端に清吉と顔見合せ互にハッと愕きて顔を背けたり。お秀は斯とも知らずお綱を一室に通して曳せばお綱は聲を潜めて『帳場に居る人はお前さんに何樣な由緣のある人ですか』と尋ねたり。お秀は打頷きて『アノ人は美濃屋權次と云ふ堅氣の町人斯々云々の緣により』と身を投んとしたる所へ通り合せて助けられたる一條より濱村への詫言水野屋の開業に盡力の功有りける概略を咄して『……斯云ふ理ゆゑ此の帳場をして貰つて居るのでエす』と答ふればお綱は『さうかへ夫ぢやお前さんも義理が有だらうが彼人は思ひ切て斷つておしまひな私も理が有て濱々は知て居るが始終はお前さんの爲めにならぬ無い人だから寄附ないやうにお仕なさるが宜よ』と忠告したるにお秀は不審いや增して『どうしてお師匠さんはアノ人の良く無い事を御存知ですか』と問返せどもお綱は『其譯はチト話し惡いが何にしても彼人を近附ては始終の爲に宜く無からうと思ふからさ』と切りに意見を加へたり。お秀も合點はゆかねどお綱が詞に清吉を何となく薄氣味わるく思ひたれば『サア今急に斷ると云ふ理にも往ませんが段々に寄附け無いやうな事に仕ませうよ』と答へたり。お綱は漸く安心して『それで私も胸の痞が下りました必ず共に今言た事をお忘で無いよ』と念を押し後は雜談に移りけるが頃て『思はず話に實が入つてツイ長ッ尻を仕ました』と煙管煙草入を懷にすればお秀

は『マア宜ぢや有ませんかモ少しお話なさいましな今に御馳走を仕ますからさ』『イエ今日はお預けに仕て置きませう』と止むるを辭して立出る足音に清吉は帳場を外して避たりけり。お綱が歸り去つたる後。清吉は帳合を終ひてお秀の傍近く來り『お上さん今の綱子とやら云ふ師匠は合しか此家で見掛ねエ顔だが古い懇意かね』と尋ねにお秀は『ナーニ古い馴染では無いが此間百尺のお上さんが初めて連て來て夫から一二度來たッきりだが慥だ信切さうな人だよ』と言ふを清吉は打消して『所が大違エ優しい口は利て居るが强慾で邪慳で不實でアワよくは人の骨まで舐らうと云ふソレハソレハ油斷の成ねエ狼婆アさ『オヤ夫ぢやお前さんアノ人を知て居るのかエ』『濱々知て居るが今言たやうな惡婆以來は必ず寄附無いやうにお仕なせエ』と蛇蝎と一般口を極めて排斥したり。お秀は『お前さんにも似合ない事を言ふぢや無いかね、どうせ藝人だもの慾も乾かうし不實でも有らうさ夫を怖れて寄附ないと云た日にや此商賣は出來ないよ』と冷笑すれば清吉は眞目になりて『イヤ彼婦人ばかりは些仔細があるのだから慥よく斷つて了ふとも、先で來ないやうに仕向けるとも決して此家へ足踏させ無エが宜ぜ、彼を寄附けると始終はお前の爲に宜く無いぜ』と說勸めたり。お秀は猶も『理があるとはどんな理かね』と尋ぬれば清吉は返答に躊躇ひて『サア其理と云ふのは……今は些と話惡い』と包み隱したるはお綱が清吉を嫌ふ理由を明さゞりしと符節を合すが如し。お

秀は必定これには仔細の有る事ならんと思ひて『夫ぢや追々に寄附ないやうに仕やうよ』と口頭ばかりの返詞と知らねば清吉は『追々なんのと言ねェで直に斷つて了ふが宜ぜ、ナンノ理の無エ事だ』と執念くも說たりけるが。お秀は愈〻心に怪しみを爲し何れが正か何れが邪か其境は知らねど薄氣味惡さに清吉を却て疎んずる氣にはなりぬ。お秀は素より清吉に惚て契りし中には非ず恩誼と權謀によりて、據なく身を任せたる果なき情交なるに清吉はさうとも知らず壓くこと無き情慾を滿さんとて其後とても屢々お秀を挑むにぞお秀は煩き事に思ひ次第に否氣になりたる所へお綱が忠告に愈〻厭ふ心になりて疾に色の褪たる戀中を清吉は更に覺らず一杯機嫌に萠したる煩惱心を抑へ兼てお秀が手を取り無理に引寄すれば、お秀は『アラ可ないんだよ』と膠なき返詞と共に取られし手を振放す清吉の權次はムッとして『オイお秀さんモウ余等に要が無エからと言て然う素氣無かアしねェもんだぜ』と怨を言へばお秀は『アラさう云ふ理ぢや無いが實は少し理が有て……』『オイ其言譯は止に仕て否なら否に成たと立派に云ふが宜や』『さうお前の樣に氣の短かいことを言ても困ぢや無いかね一通り理を聞た上で何なとお言なさいな……實は心願が有て……と計りぢやお前に分まいがアノ何さ……私の爲には只た一人の叔母さんが跡の月から大病で九死一生と聞き只望モ一度快して遣度いと成田の不動さまへ百日の間は假令旦那でも男に肌は觸ませんと心願を籠たばかり

……ナンノお前に嘘を吐く私ぢや無いよ斯云ふ理だから惡く思ずに勘辨しておくんなさい』と口より出まかせの嘘僞り清吉も是を眞實と信ずる男ならねど强てとも迫り兼て『何だか辻褄の合ねェ言譯だがァァ宜や夫ぢやァ夫で置かうよ……』と冷笑なして止たりけり

第廿一回

清吉の權次はお秀が情なき擧動に疑念を生じて心の苦悶一方ならずカノお秀は持て生れた浮氣の病いかなる名醫の匙先にも治療しがたき水性なれば何時か熱せし心の炎も消え果て外に增りし情夫を拵へ隱し喰の娛みに余を突出す心と狙んだ的はよも外れじ諸々その情夫を搜出し一泡吹せ目に物見せてくれんずと打て變りし色敵に人知れず其の詮索をぞ爲したりける。此に野澤吉作と呼べる義太夫の三味線彈あり數年前に上方より來り岡太夫の三味線を彈きたるが岡太夫は濱村篤之丞の最負を受けたれば吉作も隨つて濱村の世話になり玄治店に世帶を持ち或は席亭に出で或は宅稽古をなし可なりに繁昌したりけり。久吉のお秀水野屋に移りてより常に出入なしたるが阪方調子の優男如才なき口前にお秀を悅ばせたり。權次は早くも吉作に目を附けたるが別に怪むべき擧動も見えず、お秀も深く愼み居たれば或は我が僻目かと思ひ直しても猶疑ひは霽やらず自から兩人の間に一條の緣糸

を引きたる如くに見えたれば吉作が相生太夫の三味線を彈きて藥師の地内の席亭に出て居たるを幸ひに一夜ぶらりと宮松へ出掛け樂屋へ遣物をぞなしたる。吉作の弟子兼帶の男衆松造と云へるは權次が轉附居たる頃に見知つたる男なれば密に呼びて『今夜蹴たら大阪町の萬久までお前一人で來てくんな久し振で一杯やらうぜ』と言て己まづ萬久へ往き酒食を命じて待ち居たり。頓て松造も來りて猪口の交換に漸く醉の廻りたる頃を計りて權次は『お前の師匠も中々色男だが水野屋のお秀と好い中に成て居るのは宜く無エぜ』と鎌を掛けたれば松造は愕きて『ナーニそんな事ア有やしねエ夫やお前さんの思ひ遣エだ』と言消したり權次は目早く松造が顏色を見て取り打笑ひて『ハヽヽハ隱したつて可ねエ余等ァちやんと知て居るのだ』『デモそんな事ア皆くれ有やァ仕ませんよ』『ナニ無エ事があるものか夫ともお前が師匠を庇ひヘシ隱しに隱す氣なら余ァ此事を横町の旦那にぶちまけて言つて了ふぜさう成りやァお前の師匠は旦那を失敗つた上に此江戸にやァ居られ無エぜ……ナニ夫ぢやァ困ると……だからよお前が知て居るだけを余等に打明けて咄しねへ、私ア夫を種に金に仕やうとも何とも云ふのぢやァ無エお秀に意見をしてお前の師匠と縁を切せ双方とも旦那を失敗らねエやうにさせ度エ料見だ夫でもお前は隱すのか』と詞巧に說たりけり

松造も心に一物あれば冷に微笑て『何と言なすツても丸ッきし形の無エ事をさうだと云ふ理には參

りません縱ば形が有たに仕ても只言へぢやァ無理でエすぜ、是が旅内を語つて一と晩何厘と云ふ割を貰ふのを悅んで居る只の追廻しなら知ら無エ事、遊人の蠅所で冷飯を喰て來た私にやァ知てる事でも貴君のお强に掛てお咄やァ出來ねエ、達て言へなら云へるやうな話にしておくんなせエな』と切て出でたる注文に清吉の權次は打頷きてイヤこりやァ余が出損ッた待ねエよ』と財布より金子を出し紙に包て『失禮だが取て置て吳な』と云ふに松造は包金の目方を引て見てへ……へと打笑ひ『こりやァマァお返し申ますよ』と突戾せば清吉は其顏を守りて『千疋ぢやァ足ねエのかイ』『どう仕まして足の足りねエのと云ふ理ぢやァ御座エませんが只金をお貰ひ申しちやァ濟ませんからね……『ムヽ夫ぢやァ何程欲いのだ』松造は煙管をポンと擊きて『大負に負けて十兩お吳なせエまし』『ナニ十兩だと……滅法界に高いぢやァ無エか』『ナーニ廉いものでエすぜお前さんの地獄耳に入エりやァ只遊しッこは有やァ仕ねエ何れ大金儲の種にする料簡だとア最初ッから睨んで置た、ナンの双方を意見して緣を切せ無事安泰で目出度い〳〵と幕を切るお前さんで無エことア失禮ながら見拔て居ますよ、夫に其十兩の中にや强氣な種も添て居るからまア私に欺されたと思ひ十兩お出しなせエまし』と相手の腹の底を見拔たる松造が詞に清吉も愕きたるがお秀との中を悟られぬがまだしもの事なりと思ひて『お前にさう見拔れた上は仕方が無エ乘掛つた船と諦めて十兩出さう』と

前の包金に七兩二分足して出したり。松造は莞爾に『有繋は水野屋のお帳場さんだ有がたう御座エます』と金子を受納むれば清吉は『サア造る物を造つたからにやァ是から肝腎の話だ全く余らが言つた通りだらうが』『イヤ序に掌と言度エところさ』と云ふに清吉は膝を進めて『乃で兩人は何時ごろから好い中に成て居るんだ』『サア私も抑も剛初はと言ふサワリの所までは能く知りませんがッイ此頃の事だらうと思ひますね』『さうして密會の場所は何處だい』『何處と言て極つちやァ居ねエ樣でエすが外神田の藤屋で二三度も會た事が御座エますッイ二三日前の正午過にも慥かに藤屋で會つたを知て居ます』『夫だのに如彼體の宜い嘘を吐きやァがつて……』と思はず口走りて心附き『……イヤ想ひも寄ら無エ方角違エの出會それには慥かな證據が有るかね』『エ、有るどころぢやァ御座エません是を御覽なせエ』と掛守より久吉のお秀が走り書にて藤屋へ來るやうにと認めて吉作へ送りたる手紙を取出せば清吉は一見して『お前どうして是を持て居たのだ』『イヤお前さんに然う聞かれちやァ面目無エが實の所は私もアワよくば金にする氣でくすねて置たのさ、夫をお前さんに先を越されて見りやァ寶の持腐れだ駄斗を附けてお前さんに上ますがどうです十兩ぢやァ廉いもんでごぜエませう』『ム、成程十兩だけの直打はあらァさう綺麗に出られりやァ余らだつて唯では取らねエ』と別に金子を松造に與へてカノ手紙を買取りたり斯て兩人は酒食に時を移し女中が火を落しまするが……と斷りたるに怕き萬久を立出で右と左に別れたり

第廿二回

久吉のお秀は屢〻述たる如く性來の浮氣女旦那の濱村のみを守り兼て野澤吉作の柔和調子と優形の男振に思ひ附き前の失敗に懲もせで又もや情を通じ劍の刄を渡るが如き危き密會を此上無き娛みとは爲したりけり尤も今度は愼重に愼重を加へたれば今迄は誰ありて知る者無りけるが遂に清吉に看破されたるは毒を以て毒を制する天の配剤とこそ云ふべけれ。お秀は斯と知らねば此五六日が程は清吉の權次が來らざるに安心なし十月十九日の夜吉作と心靜に密會せんと日の暮るゝを俟ち色めかして已に出でんと爲しける所へ入來れるは權次なり。權次はお秀が身成に目を附けて『大層艶飾して居るが今頃から何處へ往くのだエ』と尋ぬる詞の裡に自と凄味を持せたりお秀は磯と胸を打たれて『ナニ家のお客樣が百川から呼によこして下すつたから一寸顏を出して來る積りさお前用が無けりやゆつくり仕てお在な』と出たらめの嘘を云ひて立掛るを清吉は早くも悟りわざと引止めて『まア待なよ私も百川の傍に用が有るから一同に往かう、さうして待合せて又一同に歸ると仕やうぜ』と云ふにお秀は當惑し心は矢猛に早れども是非無く今夜の密會を思ひ切て『私ァ人に待て居られる

と氣が揉て成ら無いからお客様の方は斷はつて今夜は止に仕やうよ』と怫然としたる横顔を權次はジロリと見て『折角お前が出掛る支度まで仕たものを私が邪魔をして止めさせちやァ氣の毒だ』『ナーニ義理で越して下すつたのだから往なくッても宜よ』と口には易らかに言へど心の中は今にも破裂せんとする火山の上に立てる心地ぞ仕たりける斯る時には酒こそ宜けれと有合せの肴にて『お前も一つお上りな……イエ私ァ猪口より此湯呑が宜いよ』と權次と差向ひになりて呑初むれば清吉は稍々醉を帶びて『酒に醉て管を卷くぢやァ無エが此頃のお前の舉動が冷潜いとしか思はれ無いぜ』と傍に聞手の無きを幸ひに怨を云へば、お秀はあな煩さやと思ひながら『そりやお前の疑りさナンノ私がお前に冷潜い心を出して宜いものかね』と出たらめの慰籍を清吉は肯はず『それが本統の事なら今ま此で心の證據を見せて呉なせェ』『そりやお前無理だよ此間も理を話した通り百日の間は……』と言掛けたるを清吉は遮りて『そんな甘ちよろの辯疏を聞く耳は今日は持た無エ第一お前に叔母さんの無エ事は悉皆調べて知て居らァ夫とも有るが本統なら住居は何處で名は何と云ふのだ……ソレ見ねェ直に返詞の出來ねェが嘘の證據だ夫ばかりぢやァ無エ此頃お前に情夫が出來た事まで殘らず知つて居るぜ』と火蓋の口をぞ切たりける

久吉のお秀は權次に酷い急所を突かれハッと思ひたれど其處は場數に馴たる藝者上りじつと落付て

權次を睨むやうな眼元に愛嬌を含ませて『いくら私が浮氣ッぽいッて此忙しい中で情夫どころぢや無いよ夫に旦那は三日に上ずに來るし其間にはお前が見廻りに來るもの浮れて居る間は有りや仕ないよ』と尤もらしき辯解に清吉の權次は嘲笑ひて『でもお前その忙しい中で外神田の藤屋まで毎日の樣に往くぢやァ無エかッィ此間の正午過に往つて逢引した事までも知て居るぜ』『そりやお客に誘はれりや藤屋へでも何處へでも往かねば成らぬ船宿商賣お前のやうに夫まで疑ぐられりや此商賣は出來ないよ』と口には云へど心の中は早瀬川風に波立許りなり權次は愈〻苦り切つて『余だつて其位の事ァ知て居るがお客にも依けりだョお前を藤屋へ呼んでお客が三味線彈の野澤吉作でも抛擲ッては置かせ無エぜ』と内證を知たる權次の一言はお秀が胸に五寸釘されども酒の氣を借り大膽に『戯談も大概にお仕なァンナ氣障な上力蛇六に誰が惚るものかね』と詞淀まず言たれば權次は頭を左右に打掉りて『余の方にやァ何時幾日何處でお前が吉作に會てどんな話を仕た迄がそッくり種が上つてお帳に付て居らァ屏風と枕の其外にやァ誰も聞かねェ内證咄』權次がどうして知てるものかとお前は思つて居るさうだが其處は蛇の道余の手には慥かな證據が上つて居るぜ』と紙入より取出したる一通は是なんお秀が吉作へ送りたる手紙なり『是でもお前知らねェと言張るかい』と突附くればお秀は見るより忽ち面色を變へ今は包み隱すべき勇氣も拔けたるが騷ぐ心を押靜めて『ホ、、

ホ如此證據が上つて居ちや隠しても仕方が無いね斯なりやァ打まけて話さうよ酒の上とは云ひながら持たが病ひの浮れ性座敷の上のお世辭半分程が宜とか男が美とかッイ言出しが原の起りそこは相手の上方もの本氣に成て恐ろしい逆上やう否とも言悪い所から一寸と逢引は仕たもの、モウ好い加減に切上げやうと思つて居た所お前に見顯はされてまだ浮氣が止ないかと下視れちやァ實に面目無よ』と眞實虚事うち交て萎れ切たる有様は梨花一枝雨を含むに似たりけり。　權次は色情に深き痴漢なれども此に至りては悪徒の酷薄なる本性を顯はし冷なる調子にて『死ぬまで止ぬお前の浮氣それを止ろと云つた處が無駄な話だ吉作と浮れやうが仙濤と燒木杭にならうがお前の勝手にするが宜い其替りにやァ切れるやうにして余の手を切て呉ねへ』と切て出でたる手切話にお秀は是幸ひと思へども色に出さず『お前の方で切れて呉とお言なら別れまいものでも無いが如何いふ話にすりや宜のだエ』『さうさねえどうせ慾張つた事を云た所が迚も出來ない相談と知れて居るから大負に負て話を附ると仕た所で先づ斯だ此の家と舟と諸道具は余が口を利て濱村に金を出させて買つたのだから今此で七百五十兩お前から受取て綺麗に別れてやらう』と無法の懸合にお秀は呆れて『そりやお前餘まり阿漕すぎる何所をどう算段しても七百兩は愚な事三百兩も出來は仕ないよ高々百兩が關の山それも容易な事ではないが夫位でお前が承知をしてくれるならどうにか算段をするも夫も早急では

出來ないよ』と言へば權次は空を嘯き煙草の烟を輪に吹きたり。

第廿三回

清吉の權次は悪相の面に氷の如き冷心を顯はして『百や二百の金で手を切る情夫とは理が逆はァ第一お前が投身を助け仙濤の手を切り濱村へ詫をして其上に今も言た通り余の口先で千兩の大金を出させて藝者を引かせ此家を買はせた事をお前はもう忘れたかい余のお蔭で仕たいま、の浮氣をして居る命替りの七百五十兩厚いもんだぜ夫とも達て否だと云やァ余も亦料見が有らァ』と云ふにお秀は當惑の思案に暮てホッと太息を吐き『出來る事なら出しも仕やうが今も云つた通りだから鯱鉾立を仕ても出來ッこは無いよ、乃で出來なけりやァお前の了簡があるとお言だが、とうする氣だへ』と尋ねたり。　權次は打頷きて『金が出來ざァ仕方が無エお前が吉作へ送つた此手紙を持つて濱村の旦那の所へ往て……アノお秀は何をかお隠し申ませう實は私の女房で御座エますが旦那がお目を掛てお遣りなすつた三味線彈の吉作と密通して是々云々證據は此手紙で御座エますと見せる日にやァ幾らお心好の旦那でも一度ならず二度三度面へ泥を塗られちやァ黙つても居さつしやるめエ活と逆せた腹立に直に此家を召上げてお前はお拂箱さう成やァ否でも余が引取て年一杯叩き賣り宿場かせ

ぎの飯盛女中しつかり金にする積りだ併し女房を叩き賣るのも除まり出來た話ぢやァ無エから成らう事ならさう仕たく無エと思ふのだ』と悪徒の地金を顯はして女房呼はり否應云せぬ手詰の强談お秀は扨こそ權次が兼て張たる網に掛りけるよなと初めて悟りて切齒をなしけるが思へばお綱が意見と云ひ容易ならぬ大悪人その掌中に死活の運命を握られたる上からは所詮卯辰の上がる時は無しと望の綱を失ひて千仞の谷へ沈みたるは心がらとは云ひながら哀なりける次第なり。權次はお秀が窮迫を得たり賢しと心に笑み袋の如き眼を光らせて『今云た通り七百五十兩出して夫婦別れをすると も宿場女郎に成るとも二つに一つの返答を早く仕ろい』と責めたるは悪鬼羅刹の罪人を責さいなむが如くなり。お秀は苦しまぎれの茶碗酒、立附て五六杯を煽りホッと吐たる息は火焔の如く權次が面に吹附たれば權次は思はず顔を顰めて横向たり、お秀は嫣然と笑つて『宜いぢや無いかねエそんなに面を蹙め無いでも……お前も一つお上りな』と居ずまひを崩して酌をすれば權次は苦り切て酒どころぢやァ無エ今の話はどうするのだ』『どうでも宜やねお前に任せた私の身體だもの此家を賣らうと宿場を稼がせやうとお前の好自由にするが宜よ』とジッと見たる眼に無量の情をぞ籠めたりける流石の權次も此度胸に一杯くはされ其なまめきたる風情を見て俄に心欺らぎて又もや催す情慾にお秀が傍に寄添ひて『夫ぢやァ余の好にしても宜いのかい』『お前の女房だものどうなとお仕

な』と身を權次の膝に憑せ掛けて更にたはひは非ざりけり、權次は已に我を忘れてお秀の手を取りたればお秀はふと思ひ出したるが如く『ァァとんだ事をした今夜大橋の萬千まで往く川が有たを忘れて居た』と急に身を起したり權次は本意なげに『明日にすれば宜い』と云へどもお秀は『ダッテ旦那に言付つたお金を取て來るのだもの何でも今夜往なけりや成ら無いよ何ならお前も一所に往ておくれな』『ムゝさうか金を取りに往く川か夫ぢやァ余も一所に往てやらう』

清吉の權次は金と聞くより忽に浮み出たる非道の悪心仕宜に由ては其をも捲上んと早くも目論見て『往くなら少しでも早い方が宜ぜ』と促せば。お秀は『ちよいと支度をするから待つてお呉な』と帶〆直す折からに降出したる雨の音『オヤ降つて來たよ』と自ら雨傘を取に行きたる序に臺所の出刃庖刀手早く手拭に卷きて懐中したり夫とは知らで權次は店先にて水野屋の印ある提灯に明りを點して待ち居たり。お秀は火鉢の側に中腰に成り手酌にて茶碗酒を煽れば權次は『意地穢を仕ねエでも宜ぢやァ無エか飲たきやァ歸つて飲ねエなサァ〳〵大降りに成ねエ中に出掛やうぜ……サウダ余も一本持て往かう』『ナニ一本で宜よ……土手の相傘かた身替りの夕時雨……で半分づゝ濡るのも意氣で宜よ』と鼻唄交りに嬌かせば權次は打笑ひて『表面は相合傘の道行と見せて其實は傘を持たせる積りだらう是だもの油斷も隙もなりやァ仕ない』『フムお前ぢや有るまいし』と口說なが

らに家を出で米澤町より河岸へ出で右に曲りたり。頃しも十月十九日の夜空も四邊も暗黑に沈んで聞ゆる四つの鐘、風がもて來る吹掛を横なす傘にて凌ぎつゝ、往來絶たる河岸通り權次は提灯の火を風に奪れじと心を用ゆる油斷を見澄してお秀は此ぞと懷中の出刄庖刀を取るより早く權次が右の脇腹を柄まで徹れと力に任かせ未練容赦もあらばこそ思ひの儘に突通す『アッ烏奴おれを殺しやがつたな』と重傷に屈せぬ氣丈の權次、傘おつ取り無二無三に打て掛るをお秀は右に避け左に替し暫しあしらひ居たりしが權次は痛手に氣も弱りて尻居にどうと倒るゝをすかさず切り込む左の肩先ウンと云ふまゝ虛空を摑みて死したりけり。お秀もホッと吐く息に心のゆるみ死骸の側にどうと居て胸の動氣に堪がたく堅唾を呑で居たりしがオゝさうよ人を殺した上からは生きては居られぬ此身の上と權次が死骸に打向ひて『權次さん堪忍しておくれよ私も後から冥土へ往き言譯するから待てお在よ』と出刄庖刀を取直し念佛二三遍唱へて已に自害と見えける所へ『マア〳〵待た』と聲を掛け樹蔭より立顯はれたるは山彦綱子お秀ははつと驚きて『さう言ふ聲はお師匠さん見逃しておくんなさいよ』と又取直す庖刀をお綱は奪ひ取りて『マア待なお前の家へ往かうと米澤町まで來て見ると印の提灯相合傘お前と權次の二人づれ河岸の方へ曲つたゆゑ罪とは知れど若い同士もしや變でも無からうかとそッと後を附て來たら思ひも寄らぬ此始末どうしてお前は權次を殺したのだエサア氣を落

着て話を仕な』とおのが差たる傘の手近にあるを引よせて滴たる雨をお秀の口に含ますれば。お秀はそれに咽を濕し心を靜めて『お師匠さん行がたう實は斯う云ふ譯で（と兼て權次と譯ありたる事今夜權次が來て無法の强談に及びたる始末を取摘んで物語り）サア其だから苦し紛れの自暴酒に性根を亂して殺したからは所詮生きては居られぬ私どうぞ死せて下さいまし』と今は酒の醉も醒め涙と共に語りたり。お綱は始終を聞畢りて『夫ぢやお前は死ぬるに及ば無いよ』『それでも私は人殺しゆゑ……』『イーエ其人殺しは他にあるよ』『ナニ他にあるとはエ』『オー權次を殺たのは……』と言さま庖刀を取直し乳の下へ突立て『……此お綱だよ』と云ふにお秀は愕き手負に取縋りて『こりやマアどう云ふ理で自害をなさんした』と尋ぬる聲も顫へたり

折しも雨は降止て雲間を出る月の影お綱はお秀の顏を見て苦しき息を吐きて『臨終の際にお前に話す一通り聞取り悪からうが聞ておくれ何を隱さうお前は私の實の娘で』『エゝそんならお前が深川仲町の富本豐綱……』と云ふも涙のおろ〳〵聲、お綱はお秀を引寄せて『イカにも私が其豐綱この間お前の素性を聞た時すでに名乘らうと思つた處へ旦那のお出その話を聞けば山田屋に由緣の有るお人とやら夫ゆゑ今まで包み隱して居たが其にも長い理のある事……』と二十一年前にお秀の爲には實父の辰五郎が山田屋德次郎を汐入堤にて殺したる一伍一什を咄して『……と云ふ理ゆゑ昔の悪

事の露顯を恐れて名乘を仕なかつたが其後お前の家で此權次に會つて恂り是が今咄した德次郎の倅清吉とてお前には姉妹の敵……』と云ふにお秀は愈〻驚きて『そんなら私に姉妹が有りますか』『サアお前と孖の其一人は大阪で島の内の藝者になり文龍と云て居たが去年の十月十九日この權次に殺されて非業の最期其時死骸の側に落て有た庖刀の今印はお前の父さんが德次郎を殺した時の庖刀と同じ印不思議と思つたが今又文龍の殺された同じ月日にお前が權次を殺して文龍の怨を霽したも不思議の因緣サア權次を殺したは此豐綱自害をすれば後に難儀は罹らぬ』と子を思ふ親は夜の鶴哀れなりける次第なり

却說この夜濱村德之丞は大橋向ふの某亭にて客を饗應し一同を歸したる後お傍去ずの都可中、古池庵蛙鳴および手代等を連て柳橋へ往かんと雨の歇みたるを幸ひに河岸通りを笑ひ興じて來掛りたるが濱村は前の方を透し見て『人が倒れて居るやうだぜ』と云へば可中も『突俯して居るのは女らしいぢやァ御座いませんか』と怪むに古池庵は『ナーニ人間ぢやァけエせん拙の見る所では犬でけすな』『ナンのあんな犬が有るものか』『イヽヤ盛りの附た犬に違ひは無い』と可中と鳴蛙が爭ひながら近づき寄り提灯の火影にお秀が顏を見て大に驚き『ヤァ水野屋のお上さん』と聲を掛たるが臨終の際の手負と死體を見てアッと仰天し『旦那、大變でけエす』と叫びたり。濱村も傍に寄り血だらけの此體を見て『オヽお秀どう仕たのだ……ヤァお前さんは綱子さんコリヤ覺悟の自害と見えるがどう云ふ理だエ』と尋ぬれば。お綱は霜夜の虫の聲『權次を殺した言譯に此自害……』と言ふも苦しき斷末魔お秀を指さし合掌なして死したりけり濱村は權次の横死に益〻怪みたるが『先づ死骸の手續をせねば成らぬ』と可中を柳橋の吉川へ走らせ吉兵衛を呼に遣りお秀を勵まして理は如何にと尋ねたり。お秀は權次を手に掛たる始末、お綱が臨終の話の大要を咄したり。濱村は是を聞き廻る因果の惡緣に驚き手代に吩咐てお綱が手にしたる出刃庖刀を取らせ川水にて血汐を洗はせ提灯の明りに能く見れば是にも今の燒印あり不思議と云ふも愚なり濱村は悚然して身の毛彌立ちたる處へ吉川の吉兵衛は若者を連れ宙を飛んで駈來り此體を見て打驚き取敢ず濱村をしてお秀を伴ひ水野屋へ引上げさせ若者を殘して死骸の番をさせ己は衆て懇意の探偵錦鶴の許へ走ゆきて盡力を賴みたり斯て檢視も濟み二人の死骸は濱村が手代を出して水野屋へ引取らせて葬りたるが公邊は豐綱が權次を殺して自害したる事その權次は舊惡あるものなりと露顯したれば夫にて濟みたりけり。お綱の四十九日も濟みたればお秀は濱村の許しを得て剃髮して尼になりカノ庖刀は深川の靈岸寺に納め懇に供養をぞ爲したりける

廻る因果

終

女浪人

第一回

上を下へとの大混雜、これを制して

『是さ〳〵、さう騷ぐ事は無い、早う負傷の辨之丞を座敷へ入れて氣附の藥を飲せい。外科醫者は隣町の高島杏庵老を早く呼寄せ直に治療に取掛り、夫から大槻伊東へ使を出せ、一刻も猶豫せずに早く致せ。左仲、其方は月番御目附へ參り變事の次第を包み隱さずお屆いたせ……イヤ〳〵此方が當役を勤むるだけに後る、樣の事があつては相成らぬ。金助、其方は此始末を親類中に剪紙を以て報知を致せ、松川へも其趣を申遣さうぞ。……次郎、卿は御苦勞だが乘切で別手組頭取並びに大御番組頭へ參つて「兄辨之丞儀は今夜お茶の水に於て云々斯々の次第で深手を負ひ歸宅したで御座るが一命の程も覺束なう存じられます」と屆け致し先方にて世面と申さば卿相認めて差出す樣に致されい』と變事の中にて左迄に周章る景色も無く妻子家來に指揮を爲して負傷の介抱其外とも手落なく計へる此家の主人は四十八九歳の武士にて人品骨柄尋常ならず現在嫡子が途中にて深手を被

り戸板に乗せて送り屆けられたる變事に肝魂も消るばかりの念を爲せど斯も沈着て事を處せるも道理、此人は幕府の旗本中にても三河御譜代の名家の一に數へられたる笹野德之進とて代々上總國夷隅郡にて八百石の知行を領し江戸にては上三番町に邸宅を構へ用人、給人、徒士、中小性どもの老黨若黨を召使ひ、其身は昨年より御使番の御役を承はり勤むる布衣以上の御役人なり。文政、天保の泰平時代に生れ育ちたれども德川武士には似ずして文武の道に志厚き人なれば其子息の教育には殊に心を用ひ斯く外國と交際を開かるゝ時勢と成りては外國の事を知るこそ肝要なれと覺り、嫡男辨之丞、次男次郎をも俱に講武所および聖堂にて文武修行の餘暇を以て洋書調所に通學させ蘭學英學をば出精させたる程に、辨之丞は二十一歳にて大御番に揚られて二百俵を賜はり昨年の春より別手組に出役して外國奉行に屬し專ら外國公使護衛の任を承はりて其肝煎と成り今年即ち文久三年癸亥の歳には二十六歳の壯漢なり。さて其次男の次郎は當年廿四歳にて是は英書を善く讀むとの評判ありて開成所教授方手傳に出役して十人扶持の祿を賜はりぬ

この笹野辨之丞か如何して御茶の水にて深手を負たるかと云ふに。頃は文久三年三月時しも英國の軍艦十餘艘舳艫を並べて横濱に錨を投れ、去年九月生麥にて薩摩の武士に切殺され並に重傷輕傷を負はせられたる英國人の爲に十萬磅の損害を要償し若も幕府にて應諾なきに於ては戰端を開くべし

との懸合談判、今日にも明日にも砲擊に及ばんずる狀況、折しも將軍家に初度の御上洛とて此騷の中にて京都さして東海道を上らせ玉ひ、江戸にても有志と呼ばる、諸藩士浪士の間には攘夷論の烈しく行はれて、左なきだに外國人を讐に爲し横濱を燒拂はんと頻に相談ありと聞ゆる所に、却て彼方より仕向たる戰端、よし去ば望に應じて開くべしと言爲れば、武家も町家も家財を運び妻子を立退せて戰爭の覺悟を定むるに他事なく、江戸は宛然煙を見ざる火事場に異ならず。其中にて幕府は如何もして此談判の局を穩かに結ばんと苦心したりければ、辨之丞の勤向も隨つて忙はしくて已に三月十四日には別手組頭取の某が御城より退出して歸宅するをば辨之丞はじめ組の輩が集まりて神田明神下なる其宅に待受け二更過るまでも相談を凝し、其事果て後に左らば各〻自宅に引取らんとて歸路に就きたる途中にて辨之丞は本郷御茶の水の掘端にて思はずも刺客に出會て前後左右より斫附られ數多の重傷をば負ひたるなり

辨之丞の供を仕たる若黨、小者の兩人が申立るを聞て見れば

『ハイ可内(小者の名)がお提灯を持て若殿樣(辨之丞)のお先に立ち、惣助は(若黨の名)お後に附て明神下から聖堂前に掛つてお茶の水へ參りまするとと、突然に覆面した浪人が刀をヒラリと拔て提灯を切りましたので可内は恟りして早くお報知申さうと存じて雲を霞と駈出ました。夫で惣助は何事

が起つたかと足を留めて見ましたれば、何でも三人か四人で若殿様に切て掛りましたに山て、コリヤ大變、早くお援兵をお頼み申ませうと心附て取て返し、明神下の頭取様のお屋敷へ駈附まして御座りました』との申立。詰りは兩人とも其場を逃出したるなれば辨之丞が暗殺に會たる狀況は全く目にも留らなかつた次第にて、一期奉公の渡り侍、折介なればとて頼しからぬ擧動こそ扨々是非も無き事どもなれ

醫師は駈付け傷所を檢めたるに、左の肩先を深く切込たるが初太刀にて、右の横腹、左右の股その外合せて大小十二ケ所の負傷。尤も辨之丞も拔合せて防ぎ戰ひたりと見えて其佩刀には血を染て刀の切疵をも止めたり、斯て辨之丞は斫倒されて地上に伏したるを、暴徒は既に絶命したりとや思ひけん又は通行の人に見咎めらるゝを恐れや仕たりけん其儘に打捨て逃去れりと見えて、辨之丞は獨痛手に苦み片息して呻て居たり。是を聞付て近所の辻番より怖々ながらに出合ひ此狀を見て組合に告知らせたれば、組合の屋敷よりは人々出合て騷ぎ罵りたる所に。彼の若黨惣助の注進に打驚きて別手別組頭取某の家來は早馬にて駈付け來り、辻番組合の衆中に斷り立て駕籠を乞得て辨之丞を載せ、漸々にして舁き來れるなり

此重傷、とても療治は難けれども、先づ應急の手當を致さんとて高島杏庵が手術を施こせる所に、

伊東玄朴、大槻俊齋など其頃聞ゆる名醫も駈付て來り夫々の施術に及びたれば、辨之丞はヤット眼を開きて父德之進および弟の次郎が枕邊に座せるを見て片息ながらに

『殘念で御座りました』と發言したり。德之進は聲を勵まして

『切る切らるゝは武士の習ひ、相手は誰ぢや、趣意はどうぢや、覺えがあるなら言て置け』と耳を貫ぬく一言に。辨之丞は

『相手の人數は確に四人。……人は誰とも知れねども……新徵組の浪人と思はれた。……遺恨を受る覺えが無い……、狙はれたは開鎖の議論に意見の相違……』と虫の息にて詞も切々

斯る中に親類一族同僚朋輩みな報知に由り又は轉報に由りて追々に馳來りしかば、笹野の邸は表も奥も人の山にて滿々たり。川人の細井左仲は德之進の前に來りて

『ハア申上ます、本所の松川兵太夫様お嬢さま御同道にて御入來に御座ります』と報知れば。德之進は小首を傾けて

『其お嬢様と云のは、お信どの、事か』と尋ぬるに

『左様に御座ります、娘のぶ達てと願ひまするに由て是非なく召連まして御座りますとの御口上に御座ります』

『さうか、然らば中奥にお通し申せ、唯今お目に掛るであらう』

そも此松川兵太夫と云は上州甘樂郡にて二百石を知行する小身の旗本にて邸は本所相生町二丁目の住居なるが、代々の武人、この兵太夫も鎌寶藏院の槍術に達し、今は歩兵差圖役を勤め當年五十三歳。嫡男松川兵助これは二十五歳にて騎兵差圖役下役。長女お信十八歳。次女お時十六歳の男女あり。中にも此お信は讀書縫針を初め女一通の業に達し其上に外祖父谷源兵衛より靜流の長刀を授かりて其奥儀を究めたる達人、性質快活にて容貌また世に勝れ、本所界隈にては松川の雙玉と美人の譽れ高かりければ、媒妁の人ありて笹野辨之丞の妻と成る事に定まり、既に去年（文久二年）十一月十五日の良辰を以て結納の禮を行ひ婚姻は早春にとて其支度に及びつるに、當春世間の騒動に由り少し落着ての上にと待合せたる處に、辨之丞が不慮の難には及びたるなり

松川兵太夫は訪問の辭宜を了りて

『……扨それに附ても是なる愚女（お信を指て云ふ）未だ輿入前では御座りますが、既に結納までも取替せに相成たる中、殊には夫と定まつた辨之丞殿の不慮の災難、御一命にも掛る程の重傷、たとひ祝言は致さずとも妻女たる身が餘所外で見物を致すべき事で無い、夫故に辨之丞殿の御枕許に附添て介抱致し度と彼女が達ての望み、出過た樣では御座れども妻と定まつたる者には尤なる願ひ、

勿論拙者に於ても左樣いたさせ度と存じますれば、強て御差支で無き儀で御座らば何とぞ當人の願ひを御聞濟下されて辨之丞殿の御看病に彼女を御遣ひ成されます樣にと折入て相願ひます』との口上。お信は初めて會たる男の前、さすが女心の羞らひて、詞も極めて少けれども、心中の深き情は自と色に顯はれたり。笹野德之進は篤く松川父子の親切を悅びて

『誠に以て篤い御心底、德之進忝う存じまする、……何にもお信どのは拙者が嫁、辨之丞が妻、この不慮の場合と聞て當人が重傷の介抱しやうとは天晴の貞女、……卿さへ承知とあらば直に此儘當家へ居て看病して下さらうなら拙者が大慶、辨之丞が悅び……』とてお信が手を引て奥に入り辨之丞が看病をさせたりけり

辨之丞は、父の德之進より詞短にお信が介抱に參りたる由を聞たれども、答も碌々出來ず纔かに苦しき目を見開いてお信が顏を見てニコリと笑顏を仕たるのみ、次第に弱る急所の重傷に最はや此世の糧も絶果ぬと見えたるが、其翌朝に至り、お信が水を飲ませんとて傍に寄添ひたるに其手をシカと握りて

『殘念だ』との一言を殘して遂に落入たりけり、此一言こそお信が肝魂に浸込で一生の運命を定むる方針とは成たりけれ

辨之丞命絶たりしかば、お信は悲に堪かねて寧そ此儘自害をもして倶に冥土黄泉の伴侶に成らばやとまでに思ひしが、さる事の許さるべきにあらねば、人々の慰め勸むるに我と心を取直して氣を勵まし、甲斐々々しくも辨之丞の死骸を拭淨めて柩に收むる事ども己れ先立て取行ひ其野邊送り、新墓詣七日々々の追善法要、朝夕の香花燈明、何くれと無く人手に任せず皆自ら手を下して行ひたるは、十七八の嫁御寮には扨も行屆いたる事かなと德之進夫婦は更なり笹野一家一門の人々皆感じ合へりけり

三七日も瞬の中に過たりければ、お信は眞德之進および小男次郎より、辨之丞を唖打したる者共は新徵組の浪士なりと辨之丞が言殘したる由を傳へ聞て、いざ去ば其浪士は誰々なりや密に探盤を運らし妾が爲には夫の敵、次郎殿には兄上の仇、怨み一太刀報ふべき方略をこそ致したけれと切に望みたり、されども德之進は、其唖打の下手人とて新徵組とばかりにては目的も附かず、又その果して新徵組の者なりや否は辨之丞が推量に止まりて證據とても無し、殊に新徵組を集められたるは公儀に於て深き思召ありての御事、かつ當節は御上洛と云ひ外國の事と云ひ幕府にては內外御多端の折からなるに斯る私事を以て御老若がたの御配慮を累し奉るも恐あり旁々以て暫くの間は左樣の事を口外いたさぬこそ公儀へ對しての忠義なれと主張し、次郎も一門も皆これに同意なれば、お信

も詮術なく心中燃るが如き怨を堪忍びて居たりけり

斯て中陰も過ぎたるに、世の中の騒は鎭まるべしとも見えず、實父の松川兵太夫は此年五月と云ふに兵隊を率て上京する事と成り弟の兵助も亦同樣の命を蒙りければ、お信は笹野の家を去りて實家松川に歸り父兄の留守を預る事とは成りぬ

第二回

お信は本所なる松川の邸に歸りて妹のお時と倶に心細くも留守して居たりけるに、此年（文久三年）六月には將軍家にも御東歸に成り松川兵太夫兵助の父子も御供に候ひて歸宅し、左しも一時は物騒がしける江戸も今は少し落着て、其裏面は知らず、表面の所は稍々靜謐の體にぞ見えたりける

或日の事なりしが、兵太夫はお信を一間に招きて父子の密々話

『サア其事ぢやが、卿が一旦二世の夫と結納を取替せた笹野辨之丞が不慮の横死、その敵は新徵組であらうと辨之丞が臨終の一言、夫を當にして夫の敵を討度との望は尤も、小祿でも遠州御譜代松川兵太夫が娘ほどあつて天晴の心底ぢやと余も我女ながら感心いたして居るが、併し肝腎の男笹野德之進殿には卿も承知の如く荒立て敵の詮議とは公邊へ對して御厄介を掛るの憚りと余にも其通の

挨拶ゆゑ泣寢入に致す所存と相見える。それは後日の事として、今朝笹野より媒妁を以て改めての申入には「辨之丞すでに不慮の最期を遂たる上は、お信殿には幸ひ未だ婚姻いたしたと云ふでも無ければ結納を取戻し全く緣談取消の事に致度。次に笹野にては次郎を以て嫡子に致し家督を相續いたさせますれば、相成う事ならば更めてお信殿を次郎が妻に申受たい。但し其儀はお信殿竝びに貴殿に於て御不承知とあらば御次女のお時殿を次郎と娶せ一旦笹野松川兩家の間に結んだ緣組を全く致し度。然る上はお信殿には相當の御緣組を他に御結び成れ度、その儀は笹野德之進に於て異存ない計で無く、御相談に由ては德之進親許に相成り申度ほどの心底。この儀何分にもお賴み申す」との口上。……マア余が申す事を宜う聞てくれい。笹野德之進殿は性質至つて溫和な御仁だが、一通り武士道の心得もある言はゞ立派な御族本、その德之進殿が卿の志に感心して、どうかお信を笹野の婦に仕度と思ひ込だゆゑ次郎殿と夫婦にせんとの思ひ立、敢て不都合と云ふでも無ければ其諾否は卿の料簡次第、この父は勸めもせねば止も致さぬ、卿が母、とても同樣の所存ぢや。次に又笹野では、卿が次郎の妻に成るを否と申すならば夫として、早う卿が他へ緣付やうに致し度、自然卿が亡辨之丞へ義理を立て後家でも立て通さうと云ふ樣な事があつては甚だ以て心苦しく卿へ對して氣の毒な次第ぢやと眞實酷う氣遣て居らるゝと申す事。何さま德之進殿の心底さうで有る事は余も面

談して深く察して居るが、卿の所存はどうであるな。婆樣が（兵太夫の妻を指て云ふ）此に居ては女の口出し却て卿が所存を十分に述るに邪魔と存じて余一人で承はるぢや。何も遠慮會釋は無い、思ふ所を言て聞かせい』

お信は辨之丞が過去の横死を思ひ出して涙に暮れ哲し詞も無かりしが稍々あつて

『段々と厚い思召し有がたう存じまする。先づ次郎殿と緣組の咄、成ほど辨之丞殿とは結納だけで夫婦の契を結びませぬに由て差支は無い樣なもの、、手負介抱の折からお姉樣と云はれた私し、夫が一旦弟に仕た人に嫁入いたしまするは女の道で無いと存じますればお斷りを申上ます。尤も次郎殿は若いに似合ぬ長しい人、お時の亭主には誠に宜しからうと存じますれば、幸ひ私しの嫁入支度そッくり其儘でお時をお遣しに成たなら御雙方の御都合此上も無い事と悦ばしう御座ります。夫からして私しの一身は私しも少々思ひ入た事もありますれば夫は追ての事に致し「辨之丞殿横死より」まだ一周忌も立ちませねば、緣談の咄は信に於まして承はる理には參りません、併し信への御酌は必ずとも御無用に願ひます』と仰せ遣されのある樣に願しう存じます』

『ム、尤だ、此爺の分別も全く其通りだ、然らば卿が事は後廻にして得くりと相談しやう。お時の事は納得の返詞を致さうよ。お信、卿は感心の所存ぢや』と兵太夫は打悅び、夫よりして此旨を答

へ頓て次女のお時は笹野へ嫁入して次郎の妻とは成りぬ

* * * * * * *

斯てあさましかりける夏も過て秋も漸々夾に成り涼風の吹くに附ても、お信の心はいと〻哀ぞ勝りける。今日は珍らしく父の兵太夫は早う歸宅したるが、夜に入りてお信を近う招き寄て

『扨、卿は先つころ、辨之丞が一周忌を終るまでは緣談の事も聞たう無に由て猶豫してよと申したが、尤の次第と存ずるゆゑ、何にも其望み通り夫迄は緣談の事を申聞まいが、併し卿の心底は我等よう承知して居らねば相成らぬ。來年の春に至り一周忌も濟だらば、卿は相當の先へ緣附いたす所存であるか、但しは夫も否ぢやと云ふ料簡であるか、豫じめ其心底を篤と承はつて置う』といつも變らぬ親の慈悲。お信は兩手を突て

『思召の程は私し身に取り有がたう存じまする。豫て仰せられます通り辨之丞殿と婚禮したと云では無し、結納までの事ゆゑ、是が普通りの病氣か何かで死亡られましたのなら、一周忌も立ましたらば、他へ嫁入も致しませうが、夫と違つて不慮の喧打、臨終の際に私の手を握つて「殘念だ」と申された一言は、私しの五臟六腑に浸込で片時忘るゝ事は御座いません。此殘念だと申されたは、何とかして當の敵を尋ね搜し其者を討取て我修羅の妄執を霽してくれいと遺言の意「ハイ承知しました」と其時私しが返詞しましたは、叶はぬ迄も辨之丞殿の敵を打ふと云ふ誠の心底、それ故に此本望を達せねば夫に誓ふた詞に背く不義不貞な女に成りまする程に、緣談の事は一周忌は愚か三年七年立ましても御免を願ひ上まする、夫に附ても敵討の願ひお叶なされて下さりませ、一生のお願で御座りまする』

『ム、縱ひ契は結ばずとも結納すれば夫は夫、その夫の敵を討度とは神妙の心得、併し、お信、よう聞よ、其敵討の事は此兵太夫一度ならず二度三度、德之進殿幷びに弟の次郎へも申し促して見たれども、此節から公儀を憚り且は遺恨の仔細とても明白ならねば中立てぬと彼衆父子一家の決心シテ見れば何に卿が一人で敵討々々と申した所で其詮も無い事、況てや敵は新徵組の浪士等では無い乎と云ふ辨之丞が臨終の推量確に夫と云ふ證據も無し、縱また手掛りを得た所で相手は多人數しかも武士こなたは卿たゞ一人何して本望を達するか、助太刀は誰が致す、後見には誰が成る、螳螂の斧を以て龍車に向ふの喩へ、所詮達する望が無ければ、殘念ながら其望は唯今思ひ止るが宜い、此兵太夫惡い事は申さぬに由て、お信、左樣な事は思ひ切て、勘に任せ緣付いたし兩親その外一同へ安心させたが宜は無か……』と詞和かに言聞すれば

『成程笹野御一家の衆は仰しやる通りの御決心で御座りますが、私しは不束ながら辨之丞が約束の

妻、一旦かうと極たる覺悟變る事は致しませぬ、痩ても涸ても笹野辨之丞と云た御旗本の女房、夫の敵を打いでは此身ばかりか親兄のお顏までも汚す道理。また敵を搜し當て立會まする其場に成て討つ討たるゝは運次第それ氣遣ふては何で本望が遂せませう、石に箭の立つ例もあれば一心凝て敵を搜し返り討に會までも、心底少しも變ませぬ』と思ひ入たるお信が言條。兵太夫は顏色變て

『そりや是程に申聞ても其方は緣組を否み敵討の一念思ひ止まらぬと申すよな』

『ハイ左樣に御座りまする』

『親の詞を用ひぬ憎い女め、强て其儀をば申張らば七生までの勘當いたすぞ』

『たとひ御勘當を受ましても』

『心を變ぬと申し居か』

『不孝の罪は重々恐れ入ますれど、女の道を立まするには……』と覺悟を極たるお信が面體

兵太夫はじつと睨み詰たりしが、思はずも膝を擊て

『ムゝ出かした、夫でこそ兵太夫が娘だ』と意外の詞に、さしものお信も胸騷き父の顏を打守りて二の句を待たれば、兵太夫はやをら膝を進めて

『氣象は男に劣らぬが女と云ひ爾も若年、復讐の大望、見事に仕終せ得やうかと案じた故に唯今の

口上、卿が心底動かぬ所たしかに此兵太夫が見拔たれば、何にも卿が願に任せ辨之丞の敵打聞屆けた。笹野一家に遠慮は入らぬ、この父が助太刀いたすぞ』と日頃の義氣を顯はして面に朱をぞ洒いだる。お信は餘りの嬉しさに我を忘れて

『お父樣、そりや本統で御座りますか』と思はず聲も高かりければ

『コレ靜かに〳〵、復讐の大義は秘密の上の秘密、母へも兄へも浮とは未だ口外の成らぬ事、兎角は當分穩便が肝腎。夫に就ても卿に言聞する大事あり、近う寄て聞て置け。我等當夏御迎として上京の砌り許多の武士に交りて時勢の咄數々いたした其中に噂に出たは笹野辨之丞が横死の一件、勿論辨之丞が卿と緣組の約束あつた事は一座の輩も存ぜず我等も亦口外いたさず懸構も無い體にて承はつたが、御茶の水にて同人をば殺害したる者共は辨之丞が推量の通り新徵組の浪士らしく、縱やさうで無い迄も新徵組に氣脈を通じた奴原の所業らしく思はるゝ。扨また殺害の趣意に就ては取々の噂イヤ彼辨之丞なるものは堂々たる御旗本の身分を以て別手組に出役いたし夷狄の護衛を勤むる腰拔その上ならず常に夷狄を稱揚なし神國の掟を輕んずる奴輩、イヤ彼辨之丞は英夷より償金請求の節に和議を唱へて當路に說を進め攘夷の戰機を誤らせたる國賊、イヤ彼辨之丞は爾のみならず竊に志を英夷に通じ幕府の內情は申すに及ばず京都の模樣までも落なく英夷に漏したる曲者、夫故

に殺害されたは所謂天誅と趣意は夫と確ならぬが、私しの意恨とも思はれぬ。されば敵は攘夷家有志の中さば大敵、また其殺害も趣意ある業、中々以て普通の事で無い、尤も卿が只今も申した如く一心凝て成す時は石に箭の立つ例もあり陽氣の發する所は金石皆透る精神一たび到らば何事か成ざらん、近くは水戸の十七士雪櫻田と降る中に掃部殿をば討たる一事、それに比べて見る時は女なりとて卿が魂仕遂せぬ懸念は無い、況て此兵太夫が附添て後見いたす上からは新徴組とて浪士とて更に恐る、所なしじや、心丈夫に思ふが宜い、……』と力を添へたれば、お信は嬉し涙に詞も出ず唯あり難しと計にて掌を合せて父を伏拜み最早本望を遂得ごとき心地して天にも昇るの思ひを爲せり

兵太夫は斯もお信が心底を見極たりければ密に其由を妻のお牧(お信の母)へも語り長男の兵助へも告たるに、何れもお信の貞烈を感じ何とぞ本望を遂させ度との望み。然らば此儀は内密に致し時節の來るを俟べしとて語り合ひ、お信は夫よりして父兄に就き猶も心を勵まして劍道を學びたるに、幼少の頃より外祖父に就て靜流の長刀を習ひたる素養はあり、一刀流の劍術の上に寶藏院の槍術までも修業なし今は男子も容易うは敵し難き伎倆とは成りぬ

斯て此年の冬に至り將軍家には來春を以て再び御上洛あるべしとの御事に定まりければ、兵太夫は

二條御城のお固を兼て御先供として隊士を率る冬中に上京すべき山の命を得たり、扨また辨之丞を殺害したる者の手掛りは所詮江戸にては知れ難かるべし（是は新徴組の重立たる輩は新選組と成りて上京したる故なり）さらばお信には父兵太夫の上京を幸ひ其供人數に加はりて京都に赴き物色すべしとて、丈なる黑髪を取上て前髪の若衆姿に變へ衣服大小すべて男子の形に裝束ち名をも松川信次郎と呼せ兵太夫が次男と披露し供連に加りて上京したり

第三回

京都は幕士を初め諸藩の武士、有志の浪人等、我も〳〵と入込みて殊の外なる賑ひ。斯て文久三年も歳暮て、明れば元治元年甲子の春と改まりしかど世の人心は益々穩かならず攘夷の議論は口頭ばかりで無く今は長州にて實行の場合と成り、日本にて諸外國を敵に引受て戰爭に及ぶの時機ははや近まりぬ

扨もお信は父兵太夫に從ひて二條の御城に臨時の在番してありけるに、二月の央より兵太夫には風に冒されて假初の病にてありけるが、次第に病は重りて肺炎と成り生命の程も覺束なしと醫師の診察に、お信が心配は一方ならず晝夜その枕邊に附添て介抱に心を委ね所有る神佛に願を掛て全快を

祈り、醫藥の事ども殘る方なく手當に及びたれども、病は日に增し重りて今は賴少う成りけるに
ぞ、或日兵太夫はお信を招き重き枕を上て
『病氣の始より今日まで一方ならぬ卿の看病、孝心の介抱、肝に銘じて余が悅び、此儘に果るとも
思ひ置くこと更に無い、唯今にも命相果なば歩兵奉行の差圖に從ひ當所にて然るべく埋葬の事を取
計ひくれよ、江戸へ死骸を差送りても苦しからずと内意あるとも、無益の手數なれば其儀に及ばず
京都は假の旅路と申せども、江戸とても亦永き住家なりとも覺えねば、兎ても角ても身を埋むるに
事足なば夫にて十分と心得よ。扨また卿が大望の一條は其手掛とても今以て確ならず、辨之丞の切
殺に遇たるも國事に關りての事なりとの噂は卿も知れる如くなれば其仔細の知ざる中は浮とは手出
も成り難し。彼を思ひ是を考ふるに、我死亡たらば卿は家來ども引從がへて一旦まづ江戸へ歸り、
其上にて時機を見計ひて徐ろに復讐の事を謀ること萬全なれ。尤も其儀に就ては我に代りて卿の後
見たらん人は親類一族は勿論御旅本御家人の中に有べしとも思はれず、獨り此京都にて我と懇意を
結びたる會津の手代木五郎兵衛は世に賴もしき武士にて薄々は卿の事をも噂いたし置たる事あれば
我亡後は手代木に便て身の上を打明し賴み入よ、必定我に代りて卿を助くべき人なるぞ……』と苦
しき息の下より後々の事をも言置て三月十日と云ふに終に黄泉の旅に赴き返らぬ人の數には入たり

けり
お信は泣の涙にて父の死骸を歛め歩兵奉行の差圖に任せて相國寺の塔中なる某院に葬送の事を執
行ひ、七々日の追善供養法の如くにして日々の墓參を欠たる事なく心ばかりの法會を住持に賴み置
き、中陰の過るを俟て、墓前にぬかづきて
『左樣ならば仰せに從ひ家來ども召連て明日は當地を發足いたし江戸へ歸ると仕ります、江戸表に
て母上兄上へ御卒去の御樣子を委しう申上げ、又私し事に付ての仰せ置かれをも御物語いたし更め
てお暇を申上げ頓て再び是へ參り御機嫌をば窺ひまするで御座りませう、何とぞ草葉の蔭にて信が
身の上御守下さりませ……』と生る人に對ふが如く涙と俱に搔口說て暇申し、五月六日に京都を發
て江戸へ下りぬ
江戸にては母のお牧、兄の兵助はお信が歸りを待受て、聞もし語もして盡せぬものは涙ばかりなり
斯て百ケ日も過たりければお信は亡夫の敵の手掛りを尋ぬべしとて暇を乞ひたるに、母も兄も素よ
り承知の事にはあれど、女の身の一人旅さなきだに案じらるゝに京都の物騷いかなる變事あるやら
んと懇念せらるれば、責て好き道連のあるを待てよと止むるに、お信は心底すでに決しつれば一日
とて空しく斯てあらんは夫への不貞かつは父への不孝なりとて强て暇を告げ、六月上旬と云ふに

心太くも只ひとり江戸を發ち、矢はり若衆姿に裝束て編笠深く打冠り東海道にぞ掛りたる

裾短なる義經袴の下は、紺の脛巾、同じ色の足袋を穿ち武者草鞋の緒を締め、白地棒縞木綿の單物の上に、細見の割羽織に黑く三蓋松の紋つけたるを着、菖蒲革にて柄卷たる喰出鍔の短刀、黑色柄鐵鍔、溜塗鞘の刀を横たへ、着替の衣服を入たる風呂數包と旅の調度の小柳行李とを一寸幅の眞田もて結び合せたるを兩天にして肩の前後に掛け、編笠深々と打かつぎ、白柄の長刀の鐵金物の石突大きらかに欲たるに黑蠟色の鞘に立澤瀉の紋を三所に蒔絵したるを打かつぎ、六月の日の草も動がず照たるを非ともせず、悠々と海道を西へ上り來り、駿州吉原なる宿外の茶屋の前に立止り店先の體を一見して、やをら床几に腰うち掛て憩ひたり

最前より此茶屋の隣なる店に休息して酒食を命じ畫飯を認めたる武士兩人、然るべき身分の輩と見えて家來、小者あまた召連れ何れも駕籠を釣せたるが、今しも來れる薙刀武者を見て其容止に目を注け居たるに。薙刀武者は去氣なき體にて茶屋の小女を呼び低聲にて畫食を誂へ恒て編笠を脱ぎて腰なる手拭取出して額の汗を拭ひぬ、是を見れば年の齡は十七八ばかりなる大前髪の大若衆世にも稀なる美少年、婦人にせま欲しき風情なり、此大若衆は酒は飲もせで靜かに畫の食を畢り代物はらひて、原の如く荷物を肩にし編笠を冠り薙刀打かつぎて海道を西へと上りたり

後には彼の一群の武士兩人その姿を見送て

『時に半平殿、唯今の大若衆の薙刀武者、貴殿は何と御覽なされたな』

『サア貴公にも御鑑定の附かぬものを拙者ごときが見極は及ばぬ事、何れ唯者では御座るまいが、勝田氏、アリヤ何人でありませうな』

『されば さ、衣服は質素な獨旅ぢやが、女も及ばぬ美少年、しかも薙刀を携へての道中、武藝修業の若殿と相見ゆるが、夫にしても足の運の内股は婦人の樣にも思はれたが……』

『サア僕も其に眼を附ましたが、夫にしても持たる薙刀の拵は正しく靜流の打物、其上に立澤瀉の紋を鞘に附たるは、其以前靜流の師範と聞えたる小野寺彈正殿の家の紋その由緣の人では御座るまいか』

『さう聞て見れば、猶更ゆかしい彼若衆、後おつ附て連に成り、其身の素性を尋ぬると致さう』

『何さま、夫が宜しう御座らう』と兩人の武士は茶店を立出で大若衆の跡を慕うて上つたり

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此は興津の宿手前、ソレ口論よ喧嘩よと人人の群衆。此方は大若衆の薙刀武者只一人彼方は供人數多つれたる一群五人の歷然としたる武家。その一人は眼を怒らせハタと睨みて

『ム、重ねく無禮の口上、何故あつて制止の詞を聞入ず、下にも居らねば、編笠をも取り申さず緩怠至極の無作法は、公儀を疎末に致す曲もの、そも其方は何奴なるか』と幕府の威光を笠に着て刀に反打ち問掛れば

『アイヤお詞では御座りますれど、手前決して御無禮は致しませぬ。先拂の者が傍へ寄れ〳〵と申したゆゑ道端に寄て御手前様方の御通行を避ましたは即ち上へ對する禮儀。……サア是なる編笠を取りませなかつたは御手前様方には駕籠に召されて御座あれば會釋に及ばぬ互の自由、更に失禮の覺は無い、去ながら御川道中と仰の上は此通り編笠を脱ぎ薙刀を下に伏せ下座いたしてお詫申せば是にて御勘辨の下さるやう願はしう存じまする』と穏かに挨拶して下座の會釋に及びたり

武士は若衆と見て心に侮り、頭を横に振て

『イヤ成らぬく、勘辨すること相成らぬ、御直參の御旗本が御川の道中、それに對して會釋に及ばぬ無禮奴、宿役人に引渡し道中奉行へ進達しキット咎に及ばねば相成らぬ。シテ其方は何奴なるか誰の家來で何の藩中、姓名シカト相名乘れ』と高に掛つて罵つたり

大若衆は打詰きて

『斯樣に理を申上ても御聞入なくば夫迄の事、お引立なさらうとあらば夫も御隙意、事と宜とに出

ては致方が無い、隙分お相手にも成ませうが、手前とても御旗本の一人騎兵差圖役見習を相勤むる松川兵助の弟同苗信次郎と申すもの、父松川兵太夫には歩兵差圖役勤役中、當春京都にて死去いたし、其墓參として上京いたす途中、シテ御手前様方の御姓名はな』と尋ねたり

彼武士の一群は御旗本の松川信次郎なりと名乘られて案外の思を爲したるが、既に姓名を名乘られたる上は詮方なくて

『我々共は大御番組にて奥詰銃隊の梅原主水、岩見助六、藪坂吉内の三人。お手前には御旗本の厄介とあつても唯今の無禮、容赦は成らぬ。神妙に致して我等ども今夜の泊り蒲原まで參らば可し、否と申さば手込に致して引立るぞ』と猶も力身て威勢を見せたり

最前よりして群衆の中にて此體を見たりける二人の武士、即ち吉原の茶屋よりお信の後を追掛て來る二人は諸人を押分て出來り

『松川信次郎殿と御姓名唯今承はつた、斯申すは桑名の藩中にて勝田新藏、杉山半平と申して未だ御挨拶は致さねど過刻吉原の宿外にて御隣席を致したもの、御爭論は貴殿の御利運、拙者ども證據人と相成り申す、此上は一歩も引かず申分を御立あれ、御相手にて理不盡の手出なさらば不肖なれども我々兩人御助太刀を致し申さう』と刀の鯉口くつろげてスワと云はゞヤッと應ぜんと構へた

り

お信は一禮して

『御信切のお詞、忝うは存じまするが手前も御相手の方々も同じ徳川家の面々、聊の行違から口論には成ましたれど言はゞ内々の事。それに他藩の御方の助太刀は恐か御立入を受まするも此方の不本意、どうぞお控下さるやうに願ひまする。但し刄傷とも相成ましたならば御見分の證人には御不祥ながらお立下さりませ』と二人の武士に斷はり立て、更に梅原、岩見、藪坂の三士に對ひて

『是程に姓名名乘り理立て、御會釋いたしても、お聞入なくば最早これまで、此上の御詫言いたす理も無ければお泊まで引返す事も致さぬ。夫で御承知なくば此身の不運、お相手に罷成り、未熟なれども信次郎が薙刀の一手是非なく御覽に入ませうが。併し當時の御時節がら公儀に於ても御苦勞の多い中、それに御旗本御家人の御同樣が僅かの事で口論いたし御手數を掛まするは是ぞ誠に上への恐れ、貴君方でさへ別に御異存が無い事なら、事を好まぬ私しの心底唯この儘で穏かにお別れ申すが素より望。梅原さま其他の御方々いかゞで御座りますなァ』としとやかなる詞の中に凜としたる氣象は自から面に顯はれ殊には又侮り難き身の擇へ、スワと云はゞ打物の鞘を外して大勢を斬立もすべき風情の見えたれば、梅原等は初の擬勢に似もやらず十二分の恐れを爲して

『イヤ御手前が左樣に事を分て申さる、上は、此方にても申分はあるなれど、當節がらゆゑ勘辨いたし此儘にて相分る、と致すであらう、以後は屹度慎みなすつて宜しからう』と場面を繕ふ減ず口。いざ來い家來と威張散し同勢つれて去たりけり

杉山、勝田の兩士はお信が擧動に深く感じて

『扨々恐入たる松川殿の御應接、事を好まぬ穏便のお計ひ、失禮ながら御若年に似合ぬ落着と、我我共感心仕つて御座る。幸ひ御上京とあらば是よりの道中筋、御同伴の致し度御座ります

『是はく存じ寄らぬ御譽のお詞、お恥かしう存じまする、道中すがら御同道は致したう御座りまするが、外々へ立寄る所もありますれば、其儀は御免を蒙ります、御緣もあらば京地にてまた御目に掛りませう』と程よく挨拶して薙刀打かつぎて飄然と立出たり

第四回

日數つもりてお信の松川信次郎は漸くに京洛の都に着き、亡父の遺訓に從ひ會津藩の手代木に便りて其身の落着を賴みたるに手代木は豫て兵太夫よりお信が事を聞及び復讐の大望を懷ける事さへ知り居たれば、委細に賴を受込みてお信が身の上を引受け飽までも若衆の修行者なりと披露させて

介抱なし、折々其武藝を試したるに、思ふに勝つたるお信が伎倆、薙刀の妙伎は云ふも更なり、寶藏院の槍術、一刀流の劍術とも普通に秀で實も女性には惜き程の業まへ、其上に讀書も拙からずして常は溫和なる擧動に勇氣を包て面に顯はさず、中分の無き人物なれば、深く感じて敬ひ交り敢て疎略に扱はず、客人として遇しつゝ、陰かに其望を達させんと心を竭したり

斯て月日を送る中に京都にては此年の秋に當りて九門の騷動起りて、一時は戰爭の街と成りたりけるが、夫も程無く治まりて會津藩の勢力は益々熾に成りぬ、是に附ても幕府の機密を知るには自づと便も好かりけり

或日の事なりしが手代木は信次郎を近く招き聲うち潛めて

『扨信次郎殿、かの辨之丞を切害に及びたる一條その趣意は確と相分らぬが、當時新選組の頭取近藤勇が配下に屬せる浪士芹川鴨と申すもの一味と云ふこと不圖した筋より昨夜承り及んだれば内内にてお知せ申す。尤も其芹川と申す浪士は自分も兩三度近藤が許にて面會いたしたが、武藝に達して人物も敢て粗暴とは見受け申さぬ、何さま此切害には深き仔細のあつての事か、兎にも角にも我等なほ芹川にも遇ひ近藤をも探つて猶貴殿に御通知申せば、今暫く我家に潛み時節の來るをお待あれ』と告たれば。信次郎は躍り上りて大きに悅び

『夫は必定實で御座りまするか、どうぞ一日も早く其芹川をお問糺し下さりまして、妾の本望をば……』

『仰せが無とも疾より承知、まづ事情を精しう探る迄は何事も穩便に』

『心得まして御座ります』

斯て手代木は猶も手を竭して芹川が手掛りを求めたる處に、思ひ掛なくも芹川は犯せる罪の露顯して近藤に說諭せられ我と腹かき切て相果たり

是を聞て信次郎も手代木も大に望を失ひ、中にも信次郎は宛然掌中の珠を奪はれたる心地して元氣も減て病人のやうに成たれば手代木は大に憂ひ頻に力を添へ氣を勵まし

『假令芹川が切腹したればとて、御茶の水の一條は、近藤とて全で聞知らざる事は餘もあるまい、……マア急ずと我等にお任せあれ、事の次手に近藤を問ひ試み慥て手掛りお知せ申さう』と更に請合て信次郎を慰めたり義烈に厚き會津武士の一言果して違はず

『いかに信次郎殿、此程より近藤勇と數度面會に及び酒呑交せて打寛ぎ四方山の咄より芹川が事竝びに辨之丞殿暗殺の事に及びたるに、近藤が申すには「芹川は外に落度あつて切腹は致させたが彼は惜き武士、既に先年江戸表にて笹野辨之丞と申す幕府の奸物を天誅したも彼が働き、其辨之丞の

不義不忠は何は仕たりけん閣老方のお聽に達し其内命をば拙者に傳へられ、拙者より夫を芹川に傳達したるに忽に打果し國家の害を除いたは芹川の忠節、ァ、殘念な事をして勇士の末路を穢して御座つた」との述懷、シテ見れば愚察の通り近藤とても彼の切害仔細は承知と相見え申した』と語つたり

早まりては大事を仕損ずるの恐あり兎も角も近藤勇に面會なし懇意になりて後に辨之丞を暗殺に及びたる趣意を篤と尋ね其上にて再び志慮をも定め候べしと。お信の信次郎は達て乞ひ望みければ、手代木も強て否むべきに非ずとて懸念は仕ながらも信次郎を近藤が許に同道なして、是は幕府の松川兵太夫殿とて山ある御旗本の次男同苗信次郎殿と申す御仁、兵太夫殿には死亡られしが信次郎殿には武邊修行の爲にとて此京都へは此程中より參られて候へば、向後は御引立にも預らんとて拙者を頼み御邊へ御紹介を願はれて候ふなりと紹介に及びたり。近藤は素より濶達の勇士なれば信次郎を見て別に城府を設けず、未だ弱冠にも至らぬ若衆、婦人にも見まがう程の少年にて武邊修行の心掛こそ優しけれ、何事にまれ勇が力に及ばん程は御相談に與かり申すべしと一見舊の如く打語ひたり

お信の信次郎は心に深う存ずる旨のありければ更に面に顯はさず、此上とも篤く頼み參らする山を

申して暇を告たりけるが、是より屢々近藤が許を信音て四方山の話に及びたるに、近藤は信次郎が武邊修行の身の上と聞き折々は道場に出て仕合をも試み腕を磨かるゝこそ好けれと勸むれども、信次郎は有がたき山を申しつゝも其藝の未熟なれば猶少しく上達の上にて願ひ候はんと辭を左右に托して道場へも顔出せず、却つて茶湯誹諧の事など嗜む樣に見せたれば、近藤も扨こそ此少年思ふには似ぬ柔弱の性質なれと望を失ふの念を爲たるが、さるにても信次郎の進退應答の閑雅なると其眼の配りの何所やら常人に異なる所あるを見て思ひ捨て難き心に牽され、嗜好は全く異なれども好き話相手を得たる思して、其訪來る毎に我が居間に招じて心置なく打語ひたり。頃しも十月の初め、北山あたりの樹々の梢は初霜に紅葉して小春の日和の心地よきに明日は嵐山に遊び舟を泛べて此勝地の山水を眺ばやと近藤の思ひ立。その儀尤も面白う候ふべし信次郎その川意を承はり御先番して御待受いたし候はんと約して歸り、翌日は朝より嵐山に出向ひ小艇の乘船を用意し船中には酒行厨ども入れ置きて近藤の來るを待設けたり。已の刻ばかりに近藤は唯一人にて來り信次郎を見て

『ヤァ松川氏、早う參つて居られたな、我等も疾に出掛やうと支度いたして居た所に薩會の諸士が追々に尋ね參られて思はぬ用談に際取して心の外の遲參いたした……サァ同行せうと約束したは武井に杉岡、楢崎の三氏であつたが、是も昨夜からして俄の用事に今以て歸宅いたさぬが、歸宅次第

に追つけ是へ參る積りぢや……夫では貴公が折角のお心入、あれなる小舟にて紅葉見ながら上流に徐々と登ると致さうか……良々武井等が參つたら跡より參るやうに此茶屋へ言傳を賴んで置かう』と近藤は信次郎が勸むる儘に何の心も無く乘船して清き流を登りつゝ、話の間に目に留つたるは船中に横たへたる一振の薙刀、これにジッと眼を附けて

『卒爾ながら夫なる打物は、信次郎殿、貴公の得物で御座るか、どうして是へは御持參なされた』と問掛れば。信次郎は左あらぬ體にて打笑ひ

『イヤ御目に止つて恐入ます、そも此長刀は亡母の形見、里方男谷の家にては先祖傳來の打物、いま朝へ讓るに由て身を離さず大切に所持いたせと臨終の遺言、それ故に旅宿にては枕元に立て、他行の時には邪魔ながらも打擔で往來いたしまする、ソレで此へも例の如くに持參いたして御座ります』

『ムゝ成ほど、さうぢや、大前髪の薙刀武者とは貴公の事と我等も豫て聞及んだ、お見受申せば靜流の薙刀ぢやが、貴公にも、それ打擔いで往來の上は定めて奥意を極めて居らる、事で御座らう、實にも薙刀は大前髪に似合の武具、その中にお手並を拜見いたし度もの……』と打笑ひ信次郎が侑むる儘に、今を盛りと染出したる紅葉の艶なるを肴に數杯を傾け益々佳境に入り、いざやあれなる

岡に上りて景色を眺望せんとて船よりヒラリと飛上れば、信次郎も薙刀とつて岡の岩角に突附て是を便りに續いて上り、實に面白き眺で候ふと詞を取繕ひつゝ、足場を計りやをら薙刀の鞘を拂ひ莖短に持直て近藤に向ひ

『夫の敵近藤勇、尋常に立會て勝負せよ』と薙刀を八相に打振て切て掛る

近藤は飛鳥の如くに身を躍らせて烈しき薙刀を左右に外し、腰なる扇を取出して正眼に付け

『ヤア粗忽なり信次郎殿、この勇、敵と呼ばる、覺は無い、仔細を申せ遺恨を語れ』

『覺無いとは卑怯であらう、去年芦川鴨に申付け笹野辨之丞をば無悪にも御茶の水にて殺させたは其方の差圖、その辨之丞が許婚の妻の信女、夫の敵を討たんとて千々に思ひを碎きしが本望とぐる今月今日、恨の刀を受て見や』と又もや薙刀取直し水車に廻して切て掛る、女なれども手練の早業侮どり難き稀代の手並に、流石の近藤心に驚き、こは手剛き相手かな、扇にては叶はじと日頃の仗倆この時なりと神變自在に身を外し、つッと附入り薙刀の鍔端しッかと取て押へ

『早まられなお信どの、松川信次郎と名乘つて面會、初見參の其時より必定婦人の薙刀武者仔細ぞあらんと存じたが、笹野辨之丞の妻女とは今日の今迄承知しなかつた。何にも其辨之丞は此勇が差圖して芦川鴨等に申付け、徳川家の御爲に天誅には行はせた……サ、夫には勿論仔細のある事、心

を靜めて一ト通り此勇が申す事よう承はつて分別あれ……夫にても得心なくば、其上は是非に及ばぬ、討つ討たるゝは時の運、何にも立合ひ敵手に成て勝負を致さう……エヽ急ずと篤とお聽き召れ』と薙刀押へて膝に敷きどつかと坐れば武巧の大力、引ども押ども動かばこそ萬鈞の巖石を鎭に置たる如くなり

お信は兩手にて薙刀の柄を持たる儘に下に居て

『言はうとあらば聽も仕やうが、我夫の笹野辨之丞は德川御家譜代の武士、それを切たが御爲とは心得がたい逃口上』

『さう思ふは尤ながら、心を落付け好う聽れよ、女性ながらも物事の理非善惡を辨へて男も及ばぬ卿の發明、事の仔細を聽れなば、きつと得心參るであらう。凡そ亡人の惡事をば吹聽いたすは武士の不本意、況てや笹野辨之丞その心得の良からぬを表沙汰に爲す時は幕府の御不爲當人の大罪、それを恐れて故さらに暗殺なして其跡を掩ひ隱せし心盡し、夫を今更口外しては詮なき事とは存ずれど、卿の髭ひ弊さんため近藤勇心の秘密を打明け申すが、我討るゝとも此事は必ず他人へ語られな』

『その秘密は女なれども神佛に誓てきつと守らんが、シテ辨之丞殿の大罪とは』

『さればなり、お信どの、卿も豫て承知の如く、毛利、島津、兩池田、淺野、黑田、山内およそ十八國主の面々、外國和親の一條より恐多くも德川御家へ對し楯突き弓引く謀叛の心底、殊には京都へ入說なし禁裏の稜威を笠に着て幕府の威權を弱らする計略陰謀一方ならず、外國人を殺害なし外國船を砲擊し攘夷の實行いたすなど、世間へ向つて唱ふるも、皆是德川幕府をば倒さん爲の謀計、所詮は薩長其外とも尊王攘夷を唱ふる諸藩幕府に取ては油斷ならざる國家の大敵。然るに何ぞや笹野辨之丞、別手組を相勤め洋語に通じて外國人と懇意に致すを幸ひに薩州人と心を併せ幕府を倒す彼奴が惡計』

お信の信次郎は聞も果てず、聲甲走らせて詞鋭く

『ヤア卑怯で御座ります近藤どの、笹野辨之丞が異國人と懇意を幸ひ薩州人と心を併せ幕府を倒す惡計とは、當座遁の造り語、夫とも確な證據があつての事か』と問掛れば近藤勇は打諾いて

『證據の無い事、何で申さう』

『シテ其證據と仰しやるは』

『サア秘密に致す事なれど、卿が切なる心に愛て大事を明して語り聞さう、事長くとも心を鎭め、此勇が申すこと篤と聞て合點召れい』と膝を寛めて敷たる薙刀、お信に突戾し、些とも動ぜぬ勇士

の魂。お信も今は悪びれず、薙刀すつと脇に差遣り小膝をぢつと進ませて

『證據と仰しやる、辨之丞の悪計、サ、其證據を唯今此で聞ませう』

『ム、お語り申さう、お聞めされい、抑々薩摩長州その外にて尊王攘夷の大義を唱へ内にては朝廷を尊崇し、外にては異國をば討退くると言觸し、幕府に仇なす深き計略』

『計略とは仰しやれど、現在公儀に於せても京都を御大切また異國をば鎖港攘夷と度度のお觸』

『そりや卿の言はる、通り、併し夫には段段仔細のあること、サア落着てお聞なされい。其攘夷と申す事、長州藩はいざ知らず、薩州にては表面ばかり、既に一昨年生麥の一條よりして去春の騷ぎ横濱にての償金談判、遂には其夏英國の軍艦が薩摩へ廻つて鹿兒島砲擊、その一舉にて薩州が攘夷の議論を止めたるは、是ぞ正しく薩州が攘夷の國論なき證據』

『それを何で笹野辨之丞が存じて居ませう、辨之丞をばお殺あつたは横濱にて談判最中はるか砲擊以前の事』

『勿論々々其通り、但し事の起りは彼談判の始まる以前。薩州にては手寄を求め内々望む和睦の一儀、英國とても其如く表面では戰端を開かんなどと力身ても事を好まぬ彼奴が底意。然るに笹野辨之丞、英語に通じて護衛の役目、英國公使館高輪東禪寺に相詰て英國人と別懇いたし常に談話を致

すに由り、其底意を聞及び薩州邸の留守居の武士へ内々にて面會なし事無き中に和議せよと竊に薩摩へ說たるは一昨年十二月の事であつたぞ』

『それぞ正しく辨之丞、事穏に納まつて公儀に御苦勞ない樣と心を盡す忠義の功績』

『サア夫だけに止まらば何にも忠義と申さうが。扨も夫より辨之丞は薩摩の武士等と度々の密會、薩摩にて申すには「攘夷は天朝幕府の命令、我藩にては餘儀なくも其命令に從つて生麥の切害に攘夷の着手いたせしなれど素より藩の國論ならず、抑〻天朝と幕府とは兩立せざる國情なれば、天朝を助けて幕府を廢し國家の基礎を相固め其上にて外國に廣く交はる薩摩の藩論、その倒幕の計略に加擔して玉はらば、薩藩にては直さまに英國と和睦なし萬事打解け相談に及び申さん望なり」。この趣意をば書面に認め償金談判いまだ發らぬ其前に英國人に送つたを取次したは辨之丞』

『取次だ證據と云ふのは』

『辨之丞よりして薩摩の家來へ相送つたる返詞の手紙、ム、幸ひ我等懐中いたして罷居る（と懐中より一通を取出して）これ見られい、お信殿

御差越の一通は昨夜英國公使館書記官〇〇〇氏へ面會の上にて慥に相渡し猶御書面の趣意がら篤と口上にて辯明いたし候處委細公使へ申入れ其上にて御返事申上べしとの事に御座候累

代の主家たる徳川幕府の手より政權を取上これを朝廷へ歸し候儀は臣子たるもの、忍びざる所には候へども日本國の安危には替へ難く候へば拙者も斷然心を決し大義には親を滅するの覺悟を極め御周旋に及び候段まことに不得已次第に御座候尤も政權は取返され候ても朝敵に相成らざる限は徳川家を亡す儀は無論拙者に於て不同意の事これ兼々御承知の通りに候へば十分御諒知下さる可く候猶詳細の儀は御面唔に盡し申すべく此の段極内密にて申し上候草々

笹野辨之丞

二月三日

○○○○ 様

お信は此手紙を讀下して

『辨之丞の手跡は、私しは更に見覺え御座りませねば是が自筆やら贋筆やら、少しも鑑定は出來ませぬが、貴君にはどうして自筆と御極は成れましたか』

『サア我等とても辨之丞の手跡、兼て存知は致さぬが、其筋にては疾に辨之丞が舉動の異樣なるに目を注て其進退を伺はせたる折柄に、然も二月四日の朝怪しき體の小者一人東禪寺へ罷越し別手組の詰所へ參り辨之丞へ面會なし密々にて書面を請取り足早に斯出し三田の方へ赴かんと走つたるを途中にて引捕へ直に町奉行へ召連て詮議に及びしが、其小者の懷より出たる此手紙、扨こそ笹野辨之丞薩州に心を通じ幕府を倒す陰謀を企て居ると事露れ、三奉行、大小御目附一同より内々にて御老中へ申立て如何はせんと御密議と相成た。然るに其辨之丞、表面にて評定所へ呼出し吟味の上にて御仕置に相成るは易けれど、左ある時には此事パッと世間に顯れ噂に立つ其時は人心忽ち騷立ち却て公儀の御不爲更ても角ても辨之丞は遁れぬ命、寧そ人知れずに切害なし禍の根を絶に若ずと御川部屋(幕府の内閣)の御内決。その意を承て奉行より我等への御内沙汰。已を得ざる次第ゆゑ其趣意は語らねども、別手組笹野辨之丞こと心障りの儀もあれば人知れず討果せよとの御内命其分心得天誅を實行せよ、と我等より芹川鴨其外へ申付ての切害なれば、仔細と申すは斯の通り。夫にても卿には猶も我等を夫の敵と勝負をば望まるゝか』

『サア望む望まぬは後の事。初めて聞た辨之丞殿の横死の仔細。夫に附ても分らぬは御役筋の方々が人知れず辨之丞を討果せよと御差圖あつた御内沙汰、それを又貴君御承知あつて芹川等へお申付に成た御趣意。尤も女の身にて公儀の事は存じませぬが、まこと辨之丞が致方、御法を背くと露顯の上は、なぜ評定所へ呼出し御吟味の其上で、切腹死罪は愚かの事、獄門磔には成されませぬ。表立ては御不爲ゆゑとの理ならば奉行の御宅の内吟味、内分の切腹と申すこと、武家には隨分まゝある例し、夫に何ぞや一言一句のお尋も成らいで卑怯末練なだまし討、それが立派な武士のなされ

力で御座りまするか……御役筋の御差圖ゆゑとあるからは、貴君へ言ても詮ない事、かの芹川などは申すに及ばず、貴君とても同じ事、御役筋のお差圖で辨之丞をば殺したとのお計ひ、申さば太刀取り同樣、眞の敵で無い上は、敵とも存じませぬ。併し近藤君、貴君は葉武者と事變り新選組の隊長にて世にも名高い一個の豪傑、その豪傑の近藤勇殿、辨之丞が擧動を不忠不義ぢやとお考で御座りまするか』

『女でこそあれ、お信どの、男も及ばぬ智恵分別、信に勇も感服いたした。併し辨之丞が薩州と英國人の間をば通信させたは公儀へ對し後暗き取計ひ、假令道理があるにも致せ、奉行其他の差圖を俠たず御奉公人の身分として内々の取次は、是ぞ正しく公儀をば憚らざるの所爲では無いか』

『そりやァ近藤君、お詞とも存じませぬ。異國人とも勝手に交際いたして宜いとは四五年前の御觸達し、又諸大名の家來衆と御旗本御家人の方々がお交り召るゝも春岳君の御改革から京都江戸にて常にある事、現在貴君がたが其通り。シテ見れば辨之丞、江戸表にて薩摩の家來に屢々面會いたした上で國事の相談しましたが、何で公儀へ對しまして後暗う御座ります。其御返答聞ませう』

『卿の言はる、所は實も尤、何にも其通り、笹野辨之丞が國事に就て薩藩の者等と往復したは敢て後暗いと云では無けれど、其相談の趣意柄は恐多くも幕府を倒し萬機の政治を朝廷の御計ひに歸し奉らんとの恐しき陰謀、是ぞ即ち公儀へ對して謀叛の企圖……』と言はせも果ず膝すり寄て

『そりやお詞が違ひませう、近藤どの、笹野辨之丞が此手紙、貴君は何とお讀なされました、天下の政治は京都へ復し申さんが德川の御家に傷が附には同意せぬと明白に書て御座ります。夫に何ぞや幕府を倒す謀叛など、はあられも無い事。サ、夫で辨之丞をお殺し成れて御座りましたか』

『さう申すも一應の道理、併しお信どの、能う考て御覽あれ、德川御家は恐多くも東照宮以來御代は十四代、二百五十餘年の其間、征夷大將軍と御座あつて天下の政治は幕府の御沙汰、その政治をば朝廷へ御渡し申す其時は、幕府は直ちに跡を絶ち、德川の御家は假令御領は安穩たりとも、取も直さず倒幕とも相成る道理。合戰と相成て勝敗の上はいざ知ず、凡そ德川家の御恩澤を蒙つたる諸大小名御旗本御家人の面々、身命を擲ち飽までも幕府の御威勢これ迄どほり繋ぎ止るが即ち忠義、それに何ぞや諸藩に通じ尊王倒幕の陰謀いたすが何の忠節何の忠義。されば我等が辨之丞をば公儀へ對して不忠不義と相認め討果させたが誤りか、是でも勇を敵なりと達て勝負を望まるゝか、お信どの心を鎭めて返答召され』と理を分たる勇士の理解。

お信はジット眼を閉て暫し默然たりけるが、稍あつて口を開き

『成ほど笹野辨之丞をば德川の御家へ對し不忠不義ぢやと仰せあつたは、左樣かは存じませぬが、

但し辨之丞が所存の處、日本國へ對しても不忠で御座るか不義で御座るか、その御判斷を伺ひませう』と女に似氣なき議論の鋭さ、單刀直入にて問掛れば流石の近藤、胸に打、る五寸釘、思はず顏色打て變り、お信が顏を打眺め、我知らず嘆息して

『ム、其段の正邪理非、それぞ即ち國論の山て分る、所にて、輕忽には申されぬ。但し大儀には親を滅すと云ひ社稷を重しとし君を輕しと申すこと唐土の敎、我日本の武士は夢にも斯る心得は毛頭以て有まじき事、近藤勇が今日までも死までも心の誓は全く以て此所存。アッ德川家の御運命すでに二百五十餘年の長きに渉り今古に例なき泰平を保たせたる御事なれば御運もいつかは盡くべきに此十年以來は外國御處置に引續いたる御失策、其上に閣老參政諸役人いづれも凡俗庸愚の輩、國主外樣は言も更なり御家門御譜代の諸大名思は別々心は散々。此うら、かな小春日和に四方の梢は葉を染て二月の花よりも猶紅には見ゆれども、野分の風の吹來れば落葉狼藉明を待たぬ枯木に成り有爲轉變は嚴く中。それと心に知りつゝも一旦かうと思ひ籠み誓つた忠義を立通し命を捨るが即ち武士道、弓矢とる身のつれなさは、推量召れお信殿……』と述懷に鏡の如き兩眼に泛び出たる勇士の涙

折しも岸傳にて彼方より歩み來れる新選組の壯士四五人。斯と見るより近藤は

『連の者等が罷越した、お信どの、悟られては互の大事、得心ゆかずば明夕にも我等かたへ御入來あれ、夫迄は原の通りの松川信次郎殿……』と意を注れば、お信も實にもと心得て

『夫でば明夕近藤君』と氣を取直して原の若衆。壯士等は遙に見付て

『ヤア是に御座りましたか、思はぬ事にて餘程の遲刻、失敬御免下されませう』と挨拶して其日は終日紅葉狩して夕陽の傾くまで樂み暮したりけり

第五回

午後より降出したる時雨に風さへいとゞ吹荒みて夕まぐれ、近藤が居室にては主人の勇とお信の信次郎とが膝突合て最前よりの談合。信次郎は近藤の言へる所を打聽て

『成程、貴君が德川家の御爲ぢやと一途に思召しますのは御尤に存じまするが、併し辨之丞が思立ました所も日本の御爲、日本の御爲は取も直さず德川家の御爲、御爲と云ふ字に二ッは無いと心得まする、夫とも別々で御座りませうか』

『そりや變は御座るまい、詰る所は落れば同じ谷川の水で御爲と思へば即ち御爲。併し彼方で御爲と思ふ事も此方から見れば御不爲と存ずる事もあつて是が議論の分る、所。シテ見る時は今日の場

合では各々自分が御爲ぢやと信ずる所を目的として決心いたす外は無いぢや。是等の事は武士の覺悟、女性の卿へ申すべき事では無けれど前刻よりして種々の御議論その御心底のゆかしさに我等が所存を掻摘みお咄いたした迄の事。夫は格別、卿には我等をば笹野辨之丞の敵ぢやと執ねくも思ひ込み迄て勝負を望まるるか。アッ此勇とて長くもあらぬ此世の壽命、どうで刀の霜と成り骸を晒すは豫ての覺悟、卿が貞女の操にめで、殺さる、も惜くは無いが、德川家の御爲には萬金にも換がたき我命、氣の毒ながら當分は暗々と討る、こと罷り成らぬ。强てとあらば不便なれど大事には替へ難し、我等が腕の續くだけ卿と立合ひ鎬を削り返り討にも致さねば相成らぬ。それでも勝負を望まる、か』と決心見えて詰寄れば、信次郎は泰然として

『サア其勝負を望む程で御座るなら今夕かやうに私しが御尋は申しませぬ。辨之丞が斯々したならば德川家の御爲ぢやと思込で致した事も、公儀の衆から御寛あつては御不爲ぢやと思召し暗打にまで成された次第、貴君には申さば太刀取の差圖をば成れました迄の事、昨日も申した通り敵の末にも當らぬ道理。是を思へば辨之丞が臨終の際に殘念と申しました一言は其所存の通らぬを殘念と存じたこと唯今思ひ當りました。シテ見れば當の敵と狙ふにも是と目差す人は無し、目的の外た敵討は證ない事と存じますれば唯今スッパリと思切り其儀は止ました。此上は近藤君、貴君を始め御奉行衆御老中方どなたへ對し赤すゐとも、怨も無ければ遺恨も無い唯これ迄の因緣と諦めまして御座ります』と言拂つたる信次郎が詞。近藤は是ぞお信が心中に深くも決する所あつての事なりと早くも察して眉を顰め

『常大體の女性なら其諦も道理ぢやと、我等はッたと感心いたし然る上は斯々と猶所存をも述やうが、女でこそあれ壯士も及ばぬ卿の心底、一たび斯と思込れた上からは鐵石にも當り水火をも畏ざる剛膽勇氣、それが復讐を思切たと申さる、は、其上の分別、包まず隱さず御明しあれ、近藤勇耳を澄して承はらう』

『ム、天晴の御眼力、御尋なうても私しより申上やうと存じた所、左樣ならば心底を改めお聽に入ませうが、昨晩からして終宵投々思ひ考へましたが、笹野辨之丞の所存の程は、どう思ひ直しても日本の御爲また德川家の御爲にも道理至極と存まする、女の身すがら力も及ばぬ出過た望み役には決て立まいとは存じますが、私しも笹野辨之丞の妻、夫の所存を受繼で命を的に立廻り、德川の御家に傷さへ附ねば良として薩摩でも長州でも同志の人と心を合せ辨之丞の存念を貫いて修羅の妄執はらし度と疾に決心いたしました、それが德川家へ不忠不義とあるならば、近藤君、御斟酌は御座りませぬ、此場にて此信をお斫捨なさりませ、それとも怖いとあるならば夫と同樣欺し討になされ

うと更に怨は御座りませぬ。サア御返答承はり度ございます』と決心見えて述たるは、勇士も及ばぬ心の納り、近藤勇は感ずる餘りに嘆息して

『驚き入たる卿の御所存、諺にも申す如く田を往も畦を往も同じ道理、何れを計るも國家の御爲。去ながら徳川家の祿を食み、其恩波に浴する者が、假令いかなる理由のありとも、君家に弓引く思立この勇は許し申さぬ、見當り次第に引捕へ手向なさば斬て捨て害を除くが忠義の績し、誰彼の容赦は御座らぬ。但し卿は夫と異なつて夫も無れば父も無く其以前こそ徳川家の御旗本の一騎たる松川殿の息女なれ、今は實家を立去て、寄邊定めぬ泡沫の風に任する浮浪の身の上。何の遠慮も斟酌も誰に憚り御座らうや、勝手次第に奉動召され、勇は敢て異儀を申さぬ。併しながら、お信殿、笹野辨之丞は其企圖を行ふとも徳川の御家には傷を附ぬが其身の望、卿すでに其存念を受繼で天下の有志と心を併せ大義を謀ると云はる、上は、其儀は豫て承知であらうな……ム、夫さへ承知とあるならば勸もせねば止も致さぬ。徳川の御家に對して仇を成ざる限りには、趣意こそ變れ世にも稀なる女丈夫の卿、蔭ながら此勇、御身の上をば保護いたさう、尤も卿が舉動に此義に背く事あらば氣の毒なれども御一命申受ると思はれよ。心得られたか、お信殿』と敵味方とは變れども貞烈義氣を憐みて情も深き勇士の詞。お信は思はず首を下げ、猛き心も涙にくれて

『段々と情ある貴君のお詞、女の身がてら出過た決心、お恥しうは御座りまするが亡夫の存念を受繼まするも女の操、勿論仰する迄も無く夫辨之丞の所存の通り少しも違へぬ心得なれど其心得にて致す事もし徳川の御家の御不爲ぢやと思召す事の御座つたら、いつ何時でも御成敗貴君が成れませうとも無念は決て殘しませぬ。親夫に死別れ此世に一人の女浪人、死なば夫まで怠ある中は身體に似合ぬ思立、さう思ふて下さりませ』

『アッ大丈夫の肝魂、敵ながらも感じ入る。シテお信どの、卿には此後とても是まで通り男姿で立廻りを仕召るか』

『なんの恥かしい此姿、今迄は唯一途に夫の敵を一太刀と思ふた故に身にも似合ぬ大小長刀、かう決心しまするからは再び原の女に成て……』

『ム、良い分別、若衆姿は身の禍、我等も實は其事を卿に忠告いたさうと存じたにお心付は重疊重疊。併し卿の決心は人に漏さぬ一大事、現在卿が身を寄る手代木氏、是へは御明し召る、所存か』

『サア夫も實は何せうと思案に迷うて居りまするが、何と致して宜しう御座りませうやら、貴君の御智恵を拜借して』

『決するとの事ならば、打明すは無用々々。幕府の御爲一途にと臍を固むる會津武士、夫と聞たら

用捨は更に致すまい。大功は細瑾を顧ずとは此の事、只何事も秘密が肝腎』

『有がたう存じます、夫に付ても近藤君、無理と承知で一ッのお願……外の儀でも御座りませぬが常に此身を放さぬ薙刀それをば今日更めて貴君へお預け申上げ大小とても同様に致します、是ぞ女に立歸る心の誓、その代には昨日拜見いたしました辨之丞の手紙どうぞ私しへお預け成されて下さりませ』

『尤の所望、承知いたした大切なる御薙刀お預りを致す驗に此手紙いかにも卿へお預け申さう（と辨之丞の密書を渡して）扨お信どの手代木氏の力を立去り卿の生計の貯蓄は失禮ながら如何で御座るな、御遠慮なしに仰せあれ』と其懷中の事までも見拔たる注意の信切。お信は肉面明日よりは手代木力を立退て如何はせんと當惑に屈托は仕たれども夫とも有繋いひ兼て

『有がたうは御座りまするが、少々ばかりの貯蓄もまだ殘つて居りますれば』

『左樣で御座るか。時にお信殿、既に女に返るとあらば、其大小も申さば不用、失敬ながら拜見を……イヤ天晴の業物……無理のお願なれど我等に是非ともお讓下され。只管勇が所望いたす……然らば些少ながら大小の代物サア金子百兩御請取下されい』と強て渡した心の情それと言はねど悟らる、心の底こそゆかしかりけれ

第六回

其頃京都の賑ひは全盛を極め、中にも遊廓の繁昌は一方ならず、祇園町の名物ど第一に指を屈するは一力の高樓、その仲居ども數多ある中にて一際來客の目に付はお信と呼べる江戸生れの仲居、男たりとて關東者は此五六年前まで京都では稀しいと云ひたるに近年は關東の武家たちも入込み殊に將軍家御上洛このかたは關東よりも西國よりも御登樂で鼻を突ほどの事なれど、去とて女には未だ一人も無き所に、此半年ばかり前より住込だる江戸ッ子お信、年はまだ廿歳に一ッ二ッも足らぬ手弱女、容姿は色白で丸顔、黑瞳がちの兩眼は鈴を張たるやうに大きくて口元は小さくて締り、凛とした中に愛嬌があつて、紅粉なしの素顔で衣服なり髪の髷なら些とも飾ッ氣なしのサッパリ拵へ夫かと云て髪形すこしも取亂したる體も無く、木綿ものをキチンと着てキリ、と端折り、起居擧動がしとやかで氣が利て、口數が少なくて行屆いて、お客にも藝妓舞妓にも信切で、何所に一ッ點の打處の無い代物。ア、此お信が藝妓であらうなら新地きつての板頭であらうもの可惜美人を仲居とは勿體ないとの評判で、ナニ乃公ならばと金と男を資本にして言寄る漢は引も切らぬが「其思召は有がたう存じまするが私しは神樣に誓を立て男は禁物」と二の矢を繼せぬ拒絶に奴のお信と名が立